

運命はこのように扉を叩く

一

道が混んでいる。速度計の針が、時速五十キロメートルの手前で優柔不断に行きつ戻りつしている。それでも、ハンドルを握る議員秘書、野崎兜^{とぼつ}跋はご機嫌だった。運転をしているのは彼自身であり、そして助手席に乗っているのは阿納^{あのうまり}真理。後ろの座席には誰もいない。国道一号を西に向かう、平時なら一時間もかからない道程を、すでに二時間は走っている。密室にふたりきりで。これを幸福と呼ばずして何とする、と兜跋は胸中^{かいさい}で快哉をあげっぱなしである。頭上にけたたましいジェット音が轟いていても、関係ない。

「まだかかりそうね」

ジェット音が遠のいたところで、真理が言った。最初からあまり期待はしていなかった、と言わんばかりの口調。経緯からすれば、彼女の依頼で兜跋は車を出したのだが。

「東海道線にすればよかった？」

「その点は後悔してない。決まったレールの上しか走れない鉄の箱が、この非常時にあてになると思う？」

「いいや。叶う限り、可能な限りの最速で真理さんを横浜へお連れしようとしておりますと、アピールしておきたかっただけですよ」

「本当に悪いと思っているわ」

「いや、気にしなくていいですよ。真理さんのためならこの野崎兜跋……」

たとえ戦火の只中であろうと馳せ参じます、と用意していた台詞^{せりふ}を、「でも」と真理が遮る。「あなたのような別段親しくもなんとも無い赤の他人にでも頼まないといけなくらい、私の胸騒ぎ^{ひっばく}は逼迫したものなの」

「真理さん、俺の話聞いてますか……」

聞いている。真理は窓の外を、夜の空を見つめている。半時前には対空砲火の光が見えていたが、今ではだいぶ収まった。それは迎撃がうまくいったからではなく、その逆である。東京の空は支配された。啓示^{オフエンバーレナ}軍に。

一号線の混雑も、逃げ出す車の多さに起因しているようだった。何がなんでも命が惜しい者は、この戦争が始まった段でとうに首都圏から疎開しているが、いろいろなものを秤にかけた結果、都心に残った者のほうが多数派だ。彼らの判断の過程には、東京ならば軍の守りも強固であろうから、そう何度も啓示軍の攻撃を受けるようなことはない、という楽観があったに違いない。

楽観という点では兜跋も同様だった。自分の身の回りに関する限り、テロリストのほうがよほど怖いと思っていた。実際、九天軍に拉致される目にもあったが、今度は啓示軍の空襲まで体験する

はめになるとは、よほど運がない。そう愚痴をこぼしたくなる状況だが、悪いことばかりではない。おかげで真理とドライブできているのだ。スピードは出せていないものの、啓示軍が地上の車列を襲ってくることもなく、先を急ぐ必要はない。兜跋の事情としては、このまま目的地の横浜にたかなくても何ら問題はない。啓示軍をなかなか撃退できない軍の無能ぶりは糾弾に値するが、今はそんな気分にならない。

「空襲にしては穏やかね。いったい何のつもりなのかしら、あの戦闘機は」

真理が指したのは夜空の光点たち。蛍に似ていなくもないが、そう風流なものではない。蛍はジェット音など出さない。そしてジェット機ではあっても、戦闘機でも、攻撃機でもない。

「あれは機兵だよ、真理さん。フルークゾルダートというタイプだ。空力を利用し、同時に縛られてもいる在来の飛行機だったら、あんな自由な軌跡は描けない」

「あれが機兵？ 啓示軍でも、空を飛べる機兵は特別だと思っていたわ。そうでもないの」

「おや。二月に啓示軍がアメリカ東海岸に攻めこんだニュース、よく見ていないのかい。あのときすでに実戦投入されているよ。報道のカメラも珍しがってよく映していたんだが……。日本まで飛んできたのは初めてなんじゃないか。不謹慎ながら、ラッキーだと思ってしまうね」

「私は、兵器の細かい性能やフォルムに興味はない。あのニュースについては、連合軍への反撃を企図した啓示軍が却って手痛いカウンターを受けてしまった、という点を押さえておけば十分よ」

「ごもっとも。ま、武器に憧れるのは男の本能の仕業かな。一眼レフと望遠レンズを持ち出して、写真に収めたい衝動にも駆られるが、さすがにそんな場合ではなさそうだな」

「私は止めないわ。ここで下ろしてもらえれば、あとは歩けるから」

真理がドアに手をかけた。渋滞がひどくなって、速度計の針は水平に対し俯角を取って安定している。運動の苦手な真里でも本当に降りかねない。兜跋は慌てた。

「待ってくれ、冗談だよ。真理さんを横浜にお届けすること以外、今は頭がないんだから」

「そう。なら、急いでくれると嬉しいわ」

それっきり口を噤んだ真理に、兜跋は違和感を覚える。今の文脈からなら、「ヒトの脳は同時に二つや三つのことを考えられるってこと、ご存知？」くらいは言いそうなものだった。今日はノリが悪い。例のごとく病院に見舞いに行ったら、いきなりここから連れ出せなどと要求されたのも、やはり非常事態なればこそか。平時であれば、つまりこれまでならば、真理のほうから兜跋にアクションをかけることはなかった。

真理の横顔は憂いに満ちている。啓示軍の戦闘マシンが空を周遊しているのだから当然のようだが、しかしそれではすべてを説明できない。兜跋が病室を訪れた時点では、まだ、啓示軍襲来のニュースは流れていなかった。兜跋が真理に請われて車を出そうとしたときに、「今入ったニュースです」とラジオに割り込んだのが第一報だったらしい。

兜跋が何も言わないでいると、真理はひたすら頭の中で何かのシナリオを練っているようだった。沈黙が流れる。ラジオはだいぶ前に切った。変則領域のせいで雑音が酷い。ここぞとばかりにムードの出る CD を入れてみたが、真理に雑音扱いされて無益に終わった。

「何が心配なんだい、真理さん。訳は聞くなとのお言葉だが、急に横浜に行きたいだなんて、やはり事情が気になるな。言っておくけど、議事堂なら、もう誰も残っていないと思う。少なくともうち

の伯父はそうだ」

兜跋の母の兄、野崎^{たくと}托塔に関して言えば、実は横浜どころではなく、もう日本を出ているはずだ。軍のボスボラス作戦とやらに合わせて、最前線に赴くと言っていた。極秘行動で、兜跋も直前によく知らされたほどなので、真理たち桜小路^{さくらこうじ}一派はまだ察知していないだろう。いや、それとも嗅ぎつけたからこそ議事堂を確認したいのか。

「議事堂、行けないの？」

「いけないことはないが……、って、可能性の話か。このまま車で、ということであれば、そりゃ難しそうだ。ほら、あそこに立っているの、兵隊だよ。好き勝手に戦争をやるために、市民を締め出しているんだ」

「避難誘導でしょう」

「表裏一体。記述方法の違いに過ぎないと思うけどね」

「あなたは権力が好きなの？ 嫌いな？ 市民団体の代表でもやったほうがお似合いよ」

「権力は敵だよ。強大な敵だ。でも、だからこそ、飼いなす必要があるんだ。権力という怪物は、上手に御せば自分の利益を産んでくれる。いかにこの強敵を己のエゴのために働かせられるか、市民ひとりひとりがもっとよく考えるべきだろう。そうすれば、きっと世界は利口になる。今よりは多少マシな程度にね」

「それが野崎議員の野望？」

「伯父の野崎のことを言っているのかな。それとも、将来の野崎議員のこと？」

問いかけながら、兜跋は自分を親指で指し示すのを忘れはしなかった。

真理の表情に些^{いささ}かの変化がある。

「珍しいのね。野心を語るなんて。やはり今夜は異常なのかもしれない。――変則領域の力だとしても、おかしくない」

「まさか。人間の精神が、ラジオの電波よりヤワなわけがない。少なくとも野崎兜跋の精神については保証できる」

「無邪気にそう信じられれば、どれだけ幸せだろう」

皮肉ではないと直感して、兜跋はまじまじと真理の横顔を見つめた。

「――前」

真理の口から言葉がこぼれる。珍しく昔話か、と兜跋は傾聴の態勢に入る。が、そうではなかった。

「前を見なさい、馬鹿者」

兜跋は、運転手のあるべき視野に復帰する。が、慌ててはいなかった。車間距離には余裕を見ていた。真理は見つめられるのが照れくさくて、前を見ろと言ったのだと、そう解釈していた。

昔の漫画なら、椅子から飛び上がり目玉が飛び出るところだった。眼前に鉄の柱が立ちはだかっている。さっきまでそんなものは見えなかった。どこから現れたのか、と疑問を覚えた瞬間に、同じ柱が手前にもう一本増えた。頭上からだ。急ハンドルで衝突を回避。

兜跋が車をぶつけかけたのは、機兵の足だった。ミラーでそれを確認する。龍^{ロン}。兜跋たちを守る側の機兵である。上空に向けて火器を構えており、啓示軍迎撃のために出てきたのだろうとわかる。が、任務の本質を忘れてはいないかと、兜跋は怒る。

「くそっ、市民を殺す気か」

男らしい一言を披露したつもりだったが、横で聞く真理は完全に呆れていた。

「あなた、兵隊の制止を無視して封鎖を突破したの、気づいていなかったの？」

「あの機兵のことだよ、真理さん。こんな市街地の上空で対空攻撃なんてしたら、流れ弾がどうなることか……。こんなレベルの封鎖なんて意味が無い。関東全域が、いつ流れ弾に襲われてもおかしくない危険地帯になったんだ」

「その危険な状況をつくりだしたのは、果たして誰かしらね」

「もしかして、というよりも高い確率で、うちの叔父貴が悪いとでも言いたいのかな」

「あら、身に覚えがあるのかしら？ 私はただ、不思議なだけよ。九天軍のテロに乗じるように啓示軍がやって来て、そして、機を同じくして変則領域が発生し始めている。これをただの偶然と捉えることは、私にはとても難しいこと」

「だから横浜に行くというんですか。やはり真理さん、あなたこそ不思議な女性だ」

「昔からよくそう言われた。――いえ、今夜は久しぶりに、かしら」

再び真理の顔を窺う。やはり窓に向けられたその視線は、何か兜跋には捉えられない影を追っているように見えた。

よそ見は良くなかった。

兜跋は急ブレーキを踏む。今度は機兵の足ではない。立ちはだかったのは渋滞の列だ。どうやら事故車が道を塞いでしまって、いくつか玉突きもあったのだろう、数十台が立ち往生している。その輪をさらに広げるところだった。

「進めないのね」せっかく向けられた真理の視線が痛い。「最寄りの小田急かブルーラインの駅までどのくらい？」

「地下鉄……。地下……。そうか、その手があったね、真理さん」

兜跋は安堵した。これで任務を全うできる。

強引に切り返してその場を離脱し、兜跋は地下駐車場を目指した。多層構造で二千台を収容するその駐車場に、幻の最下層があることを、兜跋はもう知っていた。

* * * * *

「あっぶね」

南田はその独白とともに、詰まった息を吐き出す。危うく乗用車を踏みつぶすところだった。両脚を試作品に換装した龍の操縦感覚を、まだ掴みきれていない。あちらがうまく^{かわ}躲してくれて助かった。

操縦ミスの原因は、急^{あつら}詠えの機体構成ばかりでなく、上空に意識を取られすぎていたことにもあると南田は反省する。南田の^{にら}睨む先には、龍がブースタージャンプをしても到底届かない高度を飛行する、フルークゾルダートの機影がある。

「くそっ、またかよ」

火縄の射程に入ったと思ったら、ロックオンする間もなく高度を上げられる。その繰り返してついつい封鎖線ぎりぎりまで追いかけてしまい、危うく乗用車を踏みつけかけたところだ。深追いするなよと予め注意した江藤は正しかった。いや、結局自分はそれを遵守できなかったのだから、指

示の出し方としては正しくなかったのかもしれない、とも南田は考え込む。

考える時間があるのは、敵が交戦を避けている証拠だが、これでもまだ南田の緊迫感は増したほうである。南田たちが猿之門基地から機兵で駆けつけた当初、フルークゾルダートは今しがたのように低空までは降下してこなかった。それからすれば、啓示軍の行動は余裕を帯びつつある。

舐められている、と南田は感じる。

地上からの対空砲火が無いわけではない。突然の啓示軍襲来に不意を打たれた近衛軍も、黒龍隊が駆けつけるのに前後して、対空攻撃を開始した。しかし、バルムンクフィールドによる誘導阻害があることに加え、もともと装甲の薄い航空機を破壊するための火力では、たとえ命中したとしても機兵に致命傷を与えられない。黒龍隊でも手持ちの対空ミサイルを使用したか、撃墜には至らなかった。バルムンクフィールドのみならず上空にバログが出ていてそれが邪魔なんだ、という江藤の妙な自信に満ちた発言は、事実かもしれない。上官よりセンサーのほうに信頼を置いてミサイルを使った南田としては、バツが悪い。

歯がゆいのは、敵が積極的に反撃してこないことだった。移動速度では圧倒的に負けており、うまく待ち伏せたり挟撃を仕掛けなければ、今しがたのように敵を射程に収めることもできない。

黒龍隊相手に限らず、啓示軍は徹底的に消耗戦を避けていた。遠征側としては当然の方針だが、後続部隊があるでもなく、そもそも何をしに来たのかわからないのが南田には不気味に思えた。いずれ第一、第二太平洋艦隊から艦載戦闘機が到着すれば、形成は逆転する。気まぐれなバログはいつまでも彼らを庇護しないだろう。ゆえに彼らには時間がないはずなのだが、実際には、悠々と関東の夜空を飛び回り、随分と間隔の開いた対地攻撃で標的を破壊している。やろうと思えば、三十分で完遂できそうなものを。

どこが破壊されたのか、南田たちは殆ど把握できていない。判っているのは横浜近辺の一部の橋梁と通信施設が標的となったことだけで、東京や他の都市、そして基地施設の状況は依然として不明だった。

無線を拾う限りでは、厚木、百里といった空軍基地が打撃を受けたという噂が飛び交っている。確定情報ではないが、啓示軍機に対するスクランブルが見られない現状では、信憑性を侮れない。事実だとすれば、啓示軍が一個機兵戦隊に加えて増援を送り込んでくる状況にも備えなければならない。一方、亜細亜連邦軍側は司令部の陥落すら疑いたくなる対応の遅さで、援軍到来の目処が立たない。戦力再編中の黒龍隊だけでは、増援を迎えた啓示軍機兵戦隊を迎え撃つには足りない。したがって、仕掛けるなら戦力差がマシな今のうちが得策ということになる。

南田はビルの間隙に江藤の乗機、将龍の姿を探す。むやみに高層の建築物が多く、道路を歩いていたのではなかなか見つからない。相対バルムンク反応センサーも、インフラとして整備されたBFGの稼働によって信号が乱されており、あまり役に立たない。

狙撃される心配がないなら、自分から信号弾でも上げて合流を促すか。モニタ上のフルークゾルダートの動きを凝視しながら、南田はその選択の是非を検討していたが、暇を持て余した聴覚が、外部環境音に新たな異音が混じっていることに気がついた。ジェット音よりも低周波で、なだらかな抑揚を持ち、耳より寧ろ脊髄に響くようなそれを確かに聞き取ると、南田は溜め息をついた。周期を繰り返すごとに大きくなっていくその音のパターンは、ゴン太の遠吠えに他ならなかった。

「黒龍隊、しゅうごう！」

遠吠えに代わって、運動部のノリで召集の号令を叫んだのは、江藤博照だった。江藤の要望で製作されたカスタマイズ機、将龍について、実はスピーカも無駄に大出力のものに換装してあるらしいという疑惑が生じたのはこの瞬間である。南田の龍と江藤の将龍とは優に三キロメートル以上離れていたのだが、信号弾を打ち上げてもらうよりずっとわかりやすかったというのが揺るぎない事実である。

南田が将龍のもとに自機を寄せると、個別に行動していた残りの二機、朝井と杜^{ドッ}の龍も、上空の敵を気にしつつ集まって来た。四機が共有したバルムンクフィールドの中で、決して外には漏れない電波を介した動画での秘密通信が始まる。

「怪我はないか、野郎ども」と、江藤。

「身体、機体ともにピンピンしていますよ」と、南田。

「相手がしかけてこないんじゃないか」と、杜。

「だから向こうも無傷ですけど」と、朝井。

「ワウ」と、ゴン太。江藤の後ろに設けられた専用シートでくつろいでいる。ダーダネルス作戦では寂しい思いをさせたからと、江藤は周りの総ツッコミを鉄面皮で跳ね返し、強硬に将龍に同乗させたのだ。その姿は、人並みのサイズでポップアップ表示された動画ウインドウにより南田たちにも克明に伝わっている。

「あの様子からすると、奴らは、まだ何か攻撃目標を残しているな」

「横浜といえば、やはり中央議会の議事堂でしょう。後続の地上制圧部隊を待っているのでは？」

南田が言うと、江藤は鼻で笑った。

「どうかな。とっくに今日の議会は終わっているはずだし、もし続いていたとしても、サイレンを聞いてから逃げる時間はいくらでもあったろう。今からだって、遅くはない」

地下には逃走用の“ルート”がある。士官と藤居だけに留められた情報であるため、江藤は言葉にできなかったが、示唆するところは明らかだった。もし啓示軍が九天軍経由でその情報を得ていたなら、逃げ道のいくらでもある不毛なもぐら叩きはしないだろう。

江藤の言うことは尤^{もつと}もだ。しかし、鼻で笑うことはないではないか、と南田は憤る。拉致されそうなピンチから助けてやったのが誰なのか、思い出させる必要があるそうだった。

そういえば、あのとき江藤を襲っていた女についてまだ詳しく聞いていない、と南田は思い出した。議論が耳を右から左に流れ、数時間前の猿之門基地での記憶が甦る。

あの女、穂積^{かつ}克は、もともと亜細亜連邦軍の士官だったはずだ。叛乱を企てたが、江藤たちの活躍で早期に鎮圧されたのだと、門宮^{かどみや}から道々聞かされた。その穂積^{かつ}克が脱獄し、九天軍に与して江藤を襲ったのだから、まず狙いは復讐だろうと思いついていた。

しかし、彼女の目的は江藤を仲間に引き入れることだった。そしてもうひとつ、江藤に自分の想いを伝えること。

頭が固かったという反省もあるが、南田は自己弁護も捨て去れない。江藤に対しあんなことを言う女性がいるなど想像を絶しており、不可抗力だった。そもそも、門宮は穂積^{かつ}克が女性だと教えてくれなかった。――男だなんて一度も言っていない、と門宮はとぼけるに違いないが。

江藤は自慢も弁解もせず、愚痴もこぼしていない。あのことには全く触れていない。

それも道理、とは南田も思う。穂積克が何を言ったかよりも、その直後に彼女がその場から消失した事実のほうがよく重大だった。あれは間違いなく、我が身で二度経験した現象だと、南田は確信している。

目の前でそれを見たときの心境は複雑だった。やはり自分は狂ってなどいないという安堵も正直ある一方で、脅威も覚えた。黒龍隊が何かに巻き込まれて時空転移を経験したのに対し、九天軍は意図してそれを起こし、脱出に利用したのだから。

九天軍は啓示軍と同等の技術を持っている。あるいは、同等ではなく同一の技術を、啓示軍から供与されたとも見るができる。啓示軍襲来のタイミングからすれば、後者の可能性が高い。それはすなわち、啓示軍の尖兵^{せんべい}が先月から市中に潜んでいたことを意味する。アメリカをはじめとする世界各国と共闘してようやく啓示軍を押し返していたつもりが、実はそれも啓示軍の策で、柔らかい懐が脅かされているのかもしれない。金星也^{キムソンヤ}元帥がずばり今日始めたという第二次反攻作戦、ボスラス作戦が、敵に読まれていたという虞^{おそれ}もある。

なにせよ、日本の空を我が物顔で飛んでいる一個機兵戦隊をどうにかしなければならぬのは明確だった。暖炉の谷での例から推測すれば、彼らがただの水先案内人で、やがて啓示軍の大部隊がここへ時空転移してくるといふシナリオが浮かび上がる。逆に言えば、そんなメリットでも控えていない限り、敵が悠長に関東上空に留まっている理由が見当たらない。機兵の燃料もパイロットの体力も有限なのだ。

「江藤少佐。啓示軍はまた“壁”を作ろうとしているのかもしれませんが。でなくとも、消滅砲の使用が懸念されます。撃墜とまでいかずとも、あの蚊トンボをどうにか追い払わないことには、今夜は安心して眠れませんよ」

「わかりきったことを言っても始まるまい。何をすべきかが問題だ。待^たみの対空ミサイルは誰かさんのせいで撃ち止めだからな」

「うっ……」

「うまいぞー、とでも吠えたいか？ 龍が目から光子力ビームでも撃てればいいんだが、そんな改造は将龍でも盛り込めていない。だがしかし」

「しかし？」

「幸いにして、奴らに一太刀、いや一突き浴びせられる方法がまだここに残っている」

「なんですかそれは」

「鍵を握っているのはおまえだ、竜時。おまえの乗っている飛蝗^{バッター}型なら、奴らが低空に侵入したとき、上を取れるだけの跳躍ができる」

「そんな機体だったんですか、これ。何の試験で脚部を換装なんかしたんだと、疑問には思っていました。おまけに変な触覚も付いているし」

「スレイブニルブスターを両脚部に内蔵している。背中のと合わせれば、ちょっとしたロケット並の推力になるぞ。おまけの触覚は上昇時防護用サブ BFG の発振器だ」

南田は機体管制システムを呼び出して、該当ブスターに使用制限がかかっているのを発見した。何の認証も求められることなく、解除に成功。操作は通常のブスタージャンプと同じで、操縦^{かん}桿

とフットペダルの操作だけでよいという旨のテキストが画面に表示される。メッセージは他にも幾つか出ていて、いずれも開発者のメモそのままらしい。PIDなどのパラメータまでいじれるようなGUIになっており、いかにも試作品という趣が出ている。「飛蝗型」というちゃちなロゴは誰が添えたのか。

試作品であっても、仕上がりが万全なら文句はない。説明されたスペックが事実なら、たいしたものだと南田は思う。

しかし飛蝗型とはいかにもふざけた名前だった。既存の派生型は防人型サキモリなのに、どうして飛蝗か。音読みすればヒコウ型で、飛行とかけたものだと思えばまだ南田も納得できたが、実際にはジャンプの延長に過ぎない飛行能力に違いなく、飛行型と言い切るのはきっと北嶋が許さなかったのだろう。「こいつのコンセプトは理解しましたが、いくらなんでも飛蝗はないでしょうに」

「だろう。実は蛙型というのも考えたんだがな」

「蛙って……、なお悪いですよ。正気ですか。蛙と並べられる防人の身にもなったらどうです」

「お姫様がキスすると王子様になるぞ。兵士より王子のほうがいいだろう」

「お姫様がいないんじゃ、しょうがないですよ」

南小柿椰枝の微笑を想起して、南田は緩む顔を手で隠す。汗でも拭ったふりをして。

「フムン。ならば小野道風型とでもしておくか？」

「柳に蛙ですか。わかりにくいですよ」

ついでに雲龍井蛙うんりゅうせいあという言葉もちらつく。縁起はよくない。

「だからバツタでいいだろう。ショウリョウバツタから取って、精霊型とも考えたが、北嶋にはわかりにくいと不評だった」

「少量生産に留まりそうで、縁起が悪いですからね。――て、ダジャレ言ってる場合ですか。敵は上空にいるんですよ」

「だからおまえにやれと言っている。ただし、気づいているだろうが、軌道は直線的になる。狙い撃たれないよう注意しろ」

「どう注意しろって言うんです。いったん飛び立ったらどうしようもないでしょう」

「よく気づいたな。だから見切りが肝心だ」

「殺生な」

「案ずるな。俺たちで援護する。閃光弾を使うかもしれん。防眩ぼうげんフィルターサキモリのセルフテストを実施しておけ」

「了解」

南田としては脚部ロケットのテストもやっておきたいところだが、敵に手札を見せるような真似はできない。当然、ぶっつけ本番となる。

同じ制約から、狙える敵機も最初の機だけとなるだろう。隊長機なり、任務の柱となっているような特殊仕様機を探したいが、敵機も散開して飛び回っており、機体識別ができていない。横浜上空にいる機数すら怪しいものだ。

「敵機、来ます！」

朝井の警告にやや遅れて、ミサイル誘導用と思しきレーダー波が感知された。龍の出力しているバルムンクフィールドがそのレーダー波を変調させ、ミサイルを迷子にするべく働いてくれるが、しかしフルークゾルダートはレーダー波を浴びせるばかりでミサイルを撃ってはこない。

「ちょうどいい、あれが獲物だ」

散開しながら、将龍から最後の通信が届く。フルークゾルダートはミサイルの終端誘導が乱されるのを計算に入れてか、高度を下げた。南田はあえて動きを鈍くし、火縄で別の敵機を狙撃するかのように見せかけて、背を向けたまま最寄りの敵機の再アプローチを誘う。果たして、獲物はその罠にかかった。

「今だ、竜時！」

「合点承知之助！」

江藤の合図で、南田は背中と両脚のスレイブニルロケットエンジンを作動させる。予めエネルギーを注入された粉末状のコアが、膨脹段階でそれを解放し、文字通り爆発的な推力を生み出す。強烈な加速。PIDの設定はチューニング必須だと南田は思いつつも、ぐんぐんと高度計の値が上昇していくさまに興奮を覚えていた。

南田機が背中を向けていると油断していたフルークゾルダートは、罠を悟って慌てて軌道を変えようとするが、すでに遅い。地上からの射撃に牽制されて、一瞬、逃げ場を失う。それで南田には十分だった。

「破！」

上昇中にまともに狙いなどつけられない。だから南田は火縄を使うつもりはなかった。空中で火縄を放り投げると、背中にマウントしていた雷紫電を両手で龍に構えさせ、接近したフルークゾルダートに向かって最大出力で放電する。実際に槍先を噛ませるのが最も強力だが、そこまでの必要もない。先端が敵機のバルムンクフィールドを貫通し、無防備な電装系にダメージを与えられれば、それでよい。

飛蝗型とフルークゾルダートが空中ですれ違い、両者ともに高度を落とす。攻撃は成功した。
のうしんとう
脳震盪を起こした鳥のように落下していくフルークゾルダートを、地上で将龍他が待ち受けている。

江藤の将龍が、獲物の墜落を待たずに飛び出す。が、止めの一撃を食われる数歩手前で、慌てた様子で飛び退った。すき 寸毫の差で、将龍のいた路面が赤熱し、溶解する。南田はその光景と同時に、相対バルムンク反応センサーの急上昇に対する警報を聞いていた。空中にいた敵機の一機が急降下してきたのだ。

南田は自機の着地からすぐさま再跳躍を試みた。飛蝗型はパイロットの要望に応え、接近する新車の進路を空中で遮ろうとする。その敵機を正面から視界に捉えたのは、二機の距離が数十メートルにまで縮まったときだった。明度補正された視野の中心に、なお暗く映る影が飛び込んできた。放電のトリガーに指をかけるが、間に合わない。

機体に上から下への衝撃が走る。被弾とは違う、と南田の幾度かの戦闘経験が教えていた。

「俺を踏み台にした!？」

再上昇する噴射の余裕はなく、南田はゆっくりと地上に降り立つ。突破された背後をふりかえると、龍の一機が回避の勢い余ってビルに突っ込み、将龍がもう一機の龍を庇うように仁王立ちし、そ

れと対峙する黒褐色のフルークゾルダートの背中があった。

——もしかして、この機体は。

南田は記憶にひっかかるものを感じたが、そんな思考の余裕はすぐになくなった。再びバルムンク反応急上昇の警報。方向は真正面。敵機が、南田に対して背を向けたまま、腕だけを回転させて熱粒子砲を発射しようとしている。

機体をひねって、ぎりぎり回避できた。温度上昇警報が、装甲の表面を灼かれた事実を知らせる。

南田はひるまずに体勢を立て直し、再発射までのタイムラグを狙って反撃に出ようとしたが、頭上に新たな敵機の接近を感知して、踏みとどまる。眼前の路面に大穴が穿たれたのは直後のことだった。機関砲の威力ではない。ロケット噴射も見えなかった。頭上から滑腔砲か何かで狙撃している敵がいる。

「退け、野郎ども」

江藤の叫び声がして、二機の龍がすばやく退避を始める。将龍の胸部マルチランチャーから煙幕が展張されるが、それで上空からの狙撃を凌ぎきれものではない。

——誰かが狙撃手の気を逸らさなければ。

南田は再びフットペダルを深く踏み込んだ。滑腔砲なら連射は利かない。しかし南田も火縄を放り捨ててしまっている。相手の高度まで到達できるか否か、そこが勝負の分かれ目だった。調整の悪い推力制御のおかげで、臓腑が絞られるような加速度がかかるが、そんなことで音を上げてはいられない。南田は耐えた。

だが、機体のほうはその根性に追従できなかった。ロケットエンジンの過熱によりリミッタが作動し、推力が急低下。空を仰いだ南田は、視線の先に、長物を構えたフルークゾルダートのシルエットを捉えていた。砲身の見た目の長さがゼロになる。つまり、射線上ドンピシャに自分がいる。

——撃たれる。

そのとき、南田機を追い越して上昇していく小さな物体が見えた。それは徐々に失速し、上昇限界に達する直前に、弾けた。閃光弾だった。

「下がれと言ったら、下がらんか」

光で埋め尽くされたモニタに見るべき情報もなく、南田はようやく、江藤の声がしていることに気がついた。

南田は過熱状態のロケットエンジンに最低限の減速噴射のみ要求して、地上に降り立つ。

将龍はすぐ近くにいた。

「被弾はしていないな。朝井のところまで、ジャンプできるか」

「だめです、オーバーヒートしました。少佐は先に行ってください」

閃光弾はそろそろ光を失う。最低限、ビルの影には隠れなければ、格好の的となる。

「オーバーヒートはおまえだ、竜時。俺は下がれと言っている」

「しかし、殿しんがりがいないことには、追っ手に狩り散らされるだけですよ」

語尾に重なって、警告音。敵は南田たちを見失ってはいなかった。ミサイルの能動探知を複数感知。そして南田の龍は将龍につきとばされた。

「菓子も案山子もあるか。殿かかしといえば、好感度をぐっと上げる良ポジション！ 部下なぞに譲れるも

のかよ！」

江藤は叫びながらも巧みに機体を操って、飛来したミサイルを雷紫電でたたき落とす。が、近接信管だったのか、雷紫電のほうも爆発に吞まれて木っ端微塵にされる。南田はあっと叫びそうになったが、将龍本体はどういう変わり身を使ったか、無傷で離脱していた。南田が先に逃げ込んだビル陰に飛び込んでくる。

「ちっ。まゝ痛み分けだ。今度こそずらかるぞ。ぐずぐずするな」

「――了解」

気づけば地上の敵機の姿は消えている。飛行機能の喪失は一時的なものに過ぎなかったようで、閃光弾があたりを照らしている間に、仲間の助けを借りて上空へ戻ったのだ。これではどちらが目眩ましを使ったのやらわからない。

ビルの合間を塗って後退する龍飛蝗型と将龍に対して、敵の追撃はなかった。火器を構えて待機していた朝井、杜の龍と無事に合流できたのは、啓示軍が自衛以外の戦闘を避けているからに他ならなかった。それがどういう意図に基づくのであれ、屈辱の味は変わらない。不意打ちに失敗し、こちらの手札は知れてしまった。挽回の機会が果たしてこの先あるのか。自分は千載一遇の好機をふいにしてしまったのではないかと、自責の念がのしかかる。

「見ましたか、隊長」

杜洋伸はバルムンクフィールドを共有した秘匿回線を通じて、興奮を伝えてくる。

「なんだ、誰のパンチラの話だ」

「パンチラじゃありません。パンターです。さっき急降下してきた奴、暗くてよく見えませんでした。画像解析をするとたしかにシュヴァルツパンターでした。ほら、このビターチョコみたいな色合い、E6の隊長機ですよ！」

「俺はミルクチョコレートのほうが好きだな。言われんでも覚えておるわ。――が、確かか」

「俺も見ました。朱いブレードセンサーといい、間違いないでしょう」

朝井のほうは、興奮しているというよりも戦慄を覚えている様子で、やや神経過敏気味に空を警戒している。警報は全く鳴らないが。

南田も、同僚ふたりと同じ見解だった。

啓示軍第六機兵戦隊、E6。西フェルガナ基地で黒龍隊を襲った、最初の敵。それが再びやってきたのだ。

思い返せば、E6は黒龍隊にとって災の源である。彼らの襲撃ののち、西フェルガナ基地はオーロラと見紛うほどの巨大なバルムンク砲の掃射を受けて消滅した。そして黒龍隊は、未だ解明できずにいる時空転移に直面することになった。その後戦場を移し、暖炉の谷でもE6らしき一隊と交戦している。そして、今夜だ。啓示軍が横浜で何か大きな変則現象を呼び起こそうとしているとわかるから、楽天的な朝井でさえ怯えを隠せないのだ。

「ふむ。皆してそう言うなら、認めようではないか。なるほど、E6な。閃光弾にひるまないわけだ。奴らには同じ手をもう使っていた」

南田もそれはよく覚えている。西フェルガナ基地での初めての対機兵実戦の折、江藤が敵隊長機、シュヴァルツパンターを追い払うのに閃光弾を利用した。正確には、南田はあとからその状況を知

らされて記憶に刻んだ。シュヴァルツパンターの熱粒子砲を乗機の肩に受けた南田は、恐慌状態にあったためだ。思い返す度に苦々しい。

「隊長、E6は二度も啓示軍の重大な作戦に従事しています。今回も、ただの奇襲ではないはずです」

杜洋伸が改めて指摘するのを聞いても、「かもしれん」と江藤はのんびりとしていた。

「だがそれについちゃ、俺たち以上にビクつく連中がいるな」

「元老院派ですか。いやいや、ずばり元老院そのものか」

朝井が神妙にコメントした。GT72 鉦山基地を包囲していた元老院派、第二〇二軽量機甲師団のピリピリとした空気は、南田よりも朝井のほうが長く体験している。

あの基地を奪還したとき、元老院派は鉦山の地下を爆破して、何らかの隠蔽を行った疑いが強い。実際に鉦山内部にいた江藤はそうと断定して憚らない。江藤はその何かを見たのではないかと、南田は思うことがある。まだ訊ねてみたことはないが。

南田も、京都まで鎧蜘蛛の死骸を追いかけた一件を経た今では、江藤の思い込みを被害妄想とは笑えなくなっている。元老院は、啓示軍が消滅砲や“ベルリンの壁”を使うのを恐れるのと同等に、いやもしかしたらそれ以上に、亜細亜連邦の民に秘密が漏れることを恐れているのだ。ただ、彼らの大事な秘密がどういうものか、それは曖昧模糊とした憶測しかできない。

「今のところ、迎撃は俺たちがいちばん頑張っている。元老院派は、まだ慌てるような時間ではないと考えているのかもしれん」

「具体的に、実戦力としての元老院派というのは、この近辺ではどの部隊が該当するんです？」

南田は以前からの疑問を口にした。派閥争いは上級将校たちのものだという実感が強く、士官になったばかりの南田たちにとっては、概念上の存在に近い。ダーダネルス作戦中は、黒龍隊を議会派の尖兵としてあからさまに嫌う部隊もあったが、猿之門基地にいる限りは、あまり意識されないのだ。「このあたりでなら、近衛軍の四分の一が、元老院の鶴の一声で動くと言われているな。議会派はこれを上回って三分の一という見積もりが一般的だが、これは非常時にはもっと減るだろう。横浜に中央議会の議事堂がある関係で、普段は議会派を装っておいたほうが得だと算盤勘定しているだけの連中が、かなりいるだろうからな」

「たしかに、近衛軍は何がなんでもゾルダートを撃墜するという勢いではないですね。むしろ残弾を気にしているように感じます。バロッグが晴れるまでは無駄撃ちになる可能性が高いわけですから、^{うなず}領^なけ^ずますが」

「残弾が心許ないのは、俺たちも同様だ。一旦、基地に戻るぞ。杜と朝井は待機組と交代だ」

「なんの、まだやれますよ」と朝井。「まだ軽く前菜を平らげたところです」

「俺もまだいけます」と杜。「それより大丈夫ですか。猿之門から片道ざっと一時間かかりますよ。啓示軍の動きに変化があるまで、この辺りに張り付くというのはまずいんですか？」

「今の交戦でわかっただろう。奴らは、味方の被害さえ顧みなければ、簡単に俺たちを駆逐する能力がある。相手が空を飛んでいる以上、機兵で対処するのが適切なのかも再検討の余地がある。そのうち近衛軍が戦闘機なり地对空ミサイルシステムなりもう少しマシな迎撃兵器を用意してくれるだろう。ま、それでも、俺たちの出番が全くないことはないと思うが、作戦内容によっては装備の大幅な見直しが必要だろう」

元老院派の動きも見たい、という側面もあるのだろうと南田は察する。

「厚木基地の復旧作業を手伝ったほうがいいかもしれませんね。乗備機だけでは、たぶん手が足りないでしょう」

「いいことを言うな、竜時。要請があったら、おまえを行かせることにしよう」

「うわ、藪蛇」

リアクションは以前通りに取りながら、南田は、厚木基地で航空戦力の動向を監視するのが裏の任務になるのだろうと予感した。

細かい打ち合わせをして、四機の機兵は散開。都市部から逃げ出そうとする民間の車列を踏み潰さないよう注意しながら、各自、猿之門基地への帰途に就いた。

予想と変わらず、フルークゾルダートの追撃は一切なかった。

二

霞ヶ浦駐屯地の混乱も収まりきらぬまま、藤居は茨木らと東京に向かった。一刻も早く猿之門に帰り、仲間の安否を確かめたいのが藤居の本音であり、機兵の通行に適さない東京を経由するのはできれば避けたかったのだが、結局は寄り道をする事になった。市ヶ谷……、すなわち近衛軍統監部に寄って欲しいと、霞ヶ浦駐屯地の岩津から頼まれたからだ。

岩津と士官学校の同期だという茨木は、これを快諾した。霞ヶ浦の部隊も被害確認の済んだところから出動準備をしていたが、本来、管轄外への出動は近衛軍統監部からの命令を待たねばならない。しかし近衛軍統監部との連絡はつかず、さらにはすでに啓示軍オフエンパーレナにより打撃を受けた可能性が高く、したがって今後待ち続けても命令は来ないことが予想される。受身で待つてはいられないという岩津の判断は藤居もすんなり同意できるものだったが、そこで能動的に動く役割が本来霞ヶ浦駐屯地の所属ではない自分たちに振られることには、いささかの迷惑を感じていた。都市間基幹回線があれば、もっと膨大な情報を得られ、わざわざ誰かが現地まで赴かずとも現地の様子を把握できたはずなのだが、その回線は藤居自身が角龍ジャオロンで踏みつぶしたばかりであった。復旧に数日必要だと岩津は見立てた。それも、資材と人員が十分にあるとしての計算で。

非常事態につき独自の判断で部隊を動かしてもよいという意見は、霞ヶ浦駐屯地の将校らの間からも少なからず出ていた。そのうち過半数が暗に岩津に指揮を執れと言っていた。九天軍の襲撃で多くの上級将校を失った霞ヶ浦駐屯地において、実績と人脈の観点から、岩津の影響力はかなり大きいものとなっているはずだった。それでも、岩津は自ら主導権を握り部隊を動かすことをよしとしなかった。

「たしかに私の指揮で暫時は円滑に部隊を動かせる」

岩津は言った。

「しかし内部に不信不満を多く抱え込む。そうなった部隊は、もはや私の思惑通りには動かない。部隊とは所詮、人の集まりだからだ。人の心はそうそう動かせるものではない。横須賀の英雄なら、いざ知らず……。制御できない力は危険だ。したがって、指揮系統は筋を通さねばならない。市ヶ谷との連絡を早急に復旧させたい」

藤居は、岩津の考えていることが読めた。誰も口にはしなかったが、皆わかっているのだろう。市ヶ谷の近衛軍統監部はおそらくもう駄目だ。敵の立場なら、最初に狙うべきは防空施設と指揮系統である。前者は角龍の戦場管制システムによって破壊された。啓示軍は温存できた弾薬で指揮系統の破壊をまず行ったに違いない。しかし確定情報を得ないうちに、勝手な動きはできない。それは叛乱になるからだ。

誰かが音頭を取らなければならないのは明白なのだが、最初に声を上げる者は、名声よりも思いリスクを背負うことになる。岩津たちは、リスクが大きすぎると考えている。だから、市ヶ谷がもう壊滅していて復旧の見通しが無いという情報を送ってもらい、大義名分を得ようとしている。追って極東方面軍統幕本部なり、戦略軍参謀本部なりから承認を受けられる物語を欲しているのだ。

江藤がいれば、岩津に拳のひとつもくれていたかもしれない。

岩津たちが選り、茨木が認めたそれは、黒龍隊が暖炉の谷でやったこととは真逆である。黒龍隊は核兵器と“ベルリンの壁”のふたつの危険を排除するため、誰の命令も受けることなく自己判断で動いた。自分たちの得た情報とそこから組み立てられた認識が正しいという前提のもとで。江藤には議会で定められたその権限があったのだから、軍規にも文民統制にも反していない。ただし事後承諾は必須とされている。これを満たせない場合、江藤は黒龍隊隊長の座を失うはずだった。結果としては、軟禁こそされたものの、江藤は依然として黒龍隊隊長である。だからといって、そこから^{さかのぼ}遡ってすべてを正当化するのは、藤居には抵抗がある。岩津や茨木に意見することなく、東京への寄り道を受け容れたのは、ひとつにはそのためだ。

猿之門直行に拘らなかった別の理由は、もし啓示軍の標的が東京なら、猿之門基地から出撃した仲間と現地で合流できるかもしれないという期待があったからだ。猿之門基地が九天軍に襲われたという情報の続報はまだ入ってこない。誤認や情報操作だったかもしれないし、事実だとしても、容易に撃退して啓示軍迎撃に移行しているかもしれない。

未確定情報が多すぎるため、東京の迂回と経由のどちらが正しいかなど、現時点では判断しようがない。

本当のところを言えば、東京で時間をつぶすなどもってのほかだと叫ぶ心を藤居は自覚していた。東京迂回の妥当性評価に、感情によるバイアスがかかっている。その程度を客観的に計りきれないために、藤居は自ら決断することを避けたのだ。

角龍と^{チャオ}蛟の対峙を前にして、^{こうてん}昊天にどうしたいのかと尋ねられたとき、藤居は感情のまま動いた。その結果、円道と角龍を守ることができた。反面、九天軍の幹部は取り逃がし、利敵行為に走った群山は姿を消した。防空システムの破壊を見過ごし、啓示軍の進入を許した。――感情に従ったことは、果たして正しかったのか。

道中、角龍に同乗する円道紗耶に対しては岩津、茨木の選択の正しさを力説しながらも、藤居はまだ迷っていた。

「くよくよしてもしかたないですよ」

内心を見透かされたような言葉をかけられて、藤居は後部席の円道の姿をルームミラーで確かめた。視線が合う。

「どうしてわかるんだ」

「なんとなく。日頃の観察の成果、かもしれませんね」

「人を朝顔か何かのように言ってくれるな」

円道の指摘を見栄で否定するつもりで、藤居は前進速度を上げる。

霞ヶ浦からなら、本来、機兵搬送車に搭載すべき行程である。しかし、一行は角龍と龍健児型、二機の機兵を装甲車輻とともに自走させた。いつ敵から攻撃を受けるとも限らず、また、分解して積載する手間を惜しんだためでもあった。

夜道を闊歩する機兵の姿は人目を引いた。日本では、軍施設の敷地を出て機兵が歩行することは稀なので、市民がぎょっとして、あるいは興味津々で手を止め足を止め、鉄の巨人を見上げてしまうのは予想できたことだった。そのこともあって主要道路の使用は極力避けたが、それでも、交通事故の遠因をいくつも作ってしまった。

直接蹴散らさなかったぶんだけ幸いだった。ただし、もしやむをえずそうなったとしても、藤居は後悔はしなかったろう。市ヶ谷での用事をさっさと済ませ、猿之門基地に一分一秒でも早く帰り着きたいという衝動が、角龍の足をハイペースで動かし続けた。

その足並みがとうとう停滞を余儀なくされたのは、田園地帯を抜けて都心を視野に収めたときのことだった。角龍のセンサーが、街にこだまするサイレンと、迎撃指示や避難誘導で大わらわの無線、そしてその元凶たる複数の飛行物体を感知する。

高層ビルより高い空を飛び交うジェット機は、亜細亜連邦軍機のものではない。それは空飛ぶ機兵だった。亜細亜連邦軍には該当機種が存在しない。同盟を組む米軍機でもないことを、データバンクとの照合結果が教えてくれる。

藤居はフルークゾルダートという飛行型機兵を初めて目にした。ゾルダートタイプの機兵がフリーゲイルタイプの輸送機を身に纏ったようなみで、あれで戦闘機に敵うのかという疑念を持っていたが、しかし、今は結果が目前に示されている。制空権は完全に啓示軍の手中にある。海軍機も空軍機も、空中戦で負けたか、そもそも戦闘にすら持ち込めなかったのだ。

敗北感を招く要素はまだあった。それは東京の夜空に明るく浮かび上がる、世界最高クラスの電波塔の有様だった。八月の悪夢で失われたかつての東京タワーに代わり、数年前に都のランドマークとして完成した、新東京タワー。その展望台より上の部分が、今は垂直に対して二十度ほど傾いでしまっている。

後部席の円道が望遠カメラを作動させると、展望室の屋根に機兵が降り立っているのがわかった。搬送してきたらしい物資を展開しており、簡易の補給基地として仕立て上げられていることがわかる。まるで鳥が巣をかけたような構図だが、フルークゾルダートの重量は鳥の比ではない。軋んでいるに違いない展望室には、まだ観光客が取り残されている。

藤居は一瞬、また角龍が虚像を投影しているのではないかと、疑いたくなった。

「狙撃できそうですか」

BMD-4の安文俊アンウェンジュンからの通信で、藤居は角龍が正常に稼働していることを保証された。BMD-4は車道を移動したので別行動だが、距離としては近い位置を保っている。

「攻撃はできる。しかし得策とは思えないな」

藤居は思ったままを答えた。

角龍は霞ヶ浦駐屯地で可能な限りの武装を施してきた。そのなかには、シミュレーションでの戦闘訓練でも使用した、対空弾頭も複数含まれている。ただし、それらの誘導装置は戦場管制システムの利用によってはじめて最大限の効果を発揮できるもので、それを封印している今の角龍にとって、上空のフルークゾルダートは難しい標的だった。

「展望台は壊せないし、それをうまくよけて撃ち通しても、結局は市街地に墜落されちゃうしね」

と、李峰國^{リーフエングォ}。BMD-4 とタンデムに並んで走る軍用トラックから無線を使っている。そのトラックは藤居たちが霞ヶ浦駐屯地までの移動に使ったものだ。藤居と円道が角龍の乗り、群山が行方不明のため、峰國が乗って帰っている。武装はないが、弾薬などの補給物資は積んでいた。藤居たちは啓示軍との交戦を想定したうえで猿之門基地に向かっているのだ。

「あのような宿り木程度の補給拠点では、ゾルダートもそうそう飛んではいられまい。パイロットの休養のためにも、燃料の補給のためにも、いずれ地上に着陸する。叩くならそのときにチャンスだ」

一行の実質的なリーダー、茨木が、BMD-4 の車長席から言った。

「ですが、茨木教官。現時点での交戦は得策と思えません」

最低限、猿之門基地に着けさえすればよいと考える藤居からすれば、上空のゾルダートはしばらく捨ておいてよい相手だった。むしろ、藤居は九天軍を気にしている。昊天を名乗った男は、黒龍隊を利用するのだと言っていた。猿之門基地が霞ヶ浦と同様に九天軍に襲われた可能性は高い。藤居には、昊天が部隊を合流させて、黒龍隊への第二波攻撃に乗り出すのではないかという憂いがある。九天軍は霞ヶ浦で奪取した試作機兵、蛟を擁しており、少ない戦力を分散した黒龍隊にとっては、侮れない脅威となる。

「むやみに戦うつもりはないが」茨木は言った。「及び腰はかえって戦火の拡大を招く。最小限の攻撃で最大限の効果を得る、そのような機会が得られるなら、逃すべきではない」

「黒龍隊は、猿之門の本隊との合流を最優先目標とします」

「それでいい。私も、第一の目的は別にあるからな……」

茨木は語尾を濁し、具体的な目的を語ろうとしなかった。市ヶ谷の統監部の無事を確かめることとは異なるようだった。おそらく、九天軍の襲撃を察知して霞ヶ浦駐屯地に駆けつけた件と無関係ではないだろうと藤居は推し量ったが、その正誤を敢えては尋ねない。茨木は、必要なことは常に説明し、相手に意見を求める。茨木が語ろうとしないのなら、まだ知るべき時ではないのだと藤居は納得できる。茨木が紫龍隊の戦力の一部しか同行していないことも、明かし難い複雑な事情を想像させるに充分だった。

「じゃあ、迂回ですか」

円道が訊く。否定の言葉は誰も口にしない。

「待て、そこの機兵」

都心の迂回を試みたところで、そう呼び止める声が無線に飛び込んできた。藤居の聞き知らぬその声は、無線からの情報を待つ多数の軍人たちが耳にしたはずだが、誰に向けられたものかは瞭然としていた。角龍の感知している機兵は、自機を除いては尹慶珠^{ユンキョンジュ}の龍だけなのだから。

「割り出します」円道が宣言し、数秒で成果を挙げる。「——ジソコンです。四時方向、ビルの間、公園の裏手」

「捉えた」

尹から戦術データリンクで映像が転送される。街を見下ろす暗視映像のなかに、一五式情報化装甲車、通称ジソコンの輪郭が認められる。付近にはそれを護衛するかのように歩兵戦闘車が控えているが、対空攻撃能力を備えた車輛は見当たらない。黒龍隊がダーダネルス作戦中にそうしたように、そのジソコンは指揮所として使われているのだと藤居は推定した。

「聞こえたようだな。私は近衛軍第一歩兵師団の寺岡だ」

寺岡と名乗った男の声がクリアになった。通常の無線から、藤居たちが使用していた暗号化回線に切り替わったのだ。BMD-4のほうでそのように繋いだらしい。

「ご無沙汰しております、寺岡先輩」

「その声は、茨木か」

寺岡が同窓会で旧友と再会したような声を出す。実際、それに近いものがあるのだろう。重苦しい調子は鳴りを潜め、寺岡はざっくばらんにその先を続けた。

「――ならば話が早い。俺に力を貸せ。あれを撃ち落とすには機兵があったほうが有利だ」

「私は紫龍隊を率いる身です。そして紫龍隊は戦略軍直轄。近衛軍の命令は受けません」

茨木の言説は相変わらず毅然としていたが、懐かしがる気持ちが決してゼロではないことを藤居はその声から感じ取った。

「命令系統を四の五の言っている場合ではないぞ、茨木。これは緊急事態だ。ただ敵機が東京へ侵入したというのではない。かなりまずい状況だ。奴らは消滅砲を使う用意をしている」

「それは近衛軍の掴んだ情報ですか」

「いや、統監部は沈黙してしまった。まさかあの程度の火力で全滅してはいないだろうが、指揮系統のなかで所定の役割を果たせないのなら、全滅したも同然だ。近衛軍は今、各拠点、部隊の指揮官の独自判断によって行動を決している。待機、迎撃、撤退……。いろいろ判断はあるだろうが、俺は迎撃を選んだ」

「消滅砲の情報を得たからですね。しかし、どこでそれを。消滅砲の存在はすべての将兵に明かされているわけではない。佐官クラスであっても、緘口令かんこうれいの対象となっているはずですよ」

「自分で見たものを、忘れはしない。俺はダーダネルス作戦中、タシケント奪還に参加していた。啓示軍の新兵器が、虹色の光の帯で友軍を一挙に薙ぎ払うのを見たよ。茨木、おまえも機兵で戦っていたのなら、どこかであれを見たのではないか？ あのオーロラのような輝きが、数千の友軍を消し去ったのだ、恐ろしいことに。俺は、二度と啓示軍にあれを使わせるつもりはない」

「仰るとおり、私もあの虹の光は目撃しました。二度とも。もちろん、三度目を使わせるつもりはありません。しかし、命令のないまま軍を動かすことは本来、大罪ですよ」

「それだ、おまえの良くないところは。おまえよりも岩津のほうが出世頭というのは、俺からすれば口惜しいところだ。なぜ、素直に従えない。俺は手柄を分けてやろうと言っているんだ」

寺岡という将校の言葉には、たしかに後輩を盛り立てようという意図が汲み取れた。しかし、寺岡自身のエゴが主軸にあること、そうした配慮が茨木の美学に泥を塗る類のものであることもまた、藤居は理解していた。而して、交渉は決裂に終わるだろうと読む。

「啓示軍の迎撃は必要でしょう。しかし、それが必要なことの全てではなく、また、紫龍隊に最適な

任務であるとも評価できません。地の利はこちらにあるのですから、近衛軍の統率さえ戻れば、撃退は決して難しくはないはずです」

「しかし、統監部を数時間以内に復旧させるのは無理だ。戦略軍参謀本部はボスポラス作戦に手一杯で、東京どころではあるまいしな。技術的にも、政治的にも、この混乱は続く。俺はな、茨木、おまえのような男こそが今、立ち上がるべきだと思っている。俺を従えるくらいの勢いで、やってみないか」

「高く買って頂いているのは光栄です。しかし我々は今、霞ヶ浦駐屯地を襲った機兵を追撃中なのです」

「啓示軍は先に霞ヶ浦を襲ったのか」

「いいえ、潜伏していたテロリストの仕業です。ただ、啓示軍との連携が疑わしいため、早急に対処しなければなりません。今私がこの任務を放棄してしまえば、軍の混乱に拍車がかかることになるでしょう。先輩が独自に動くことでも、あるいはそのような誤算につながるやも知れません」

「懸念はわからんではないが……。おまえのほうこそ、俺を説得できる情報を提供してはいないな。見慣れぬ機兵の目撃情報は無線で流れていたようだが、それが霞ヶ浦を襲ったというのか？」

「その通りです。証拠の映像もお見せできます」

「そこまで断言できるのなら、いちいち見ることもない。俺はおまえを信用している」

「いいえ、ご覧頂いたほうが良いでしょう」

茨木が言うと、通話には使われずただ黒いばかりだった画面に、対峙する蛟と角龍の姿が映し出された。

「――^{インロン}影龍に似ているな」

「同感です。応龍隊の新型機兵の可能性が高い。私はこれを見逃すわけにはいきません。紫龍隊の最優先任務は応龍隊追討と、^{キムソンヤ}金星也元帥から直接に下命を受けております。近衛軍の一将校に妨害されたというような報告を、誰かがしないとも限らない。私が先輩の意に添いかねるのは、それを憂うからでもあります」

「元帥が相手では分が悪いな。しかし、これが応龍隊だと？ 最近の流れでテロリストといえば、横浜議事堂や四機（第四機動隊）を襲った九天軍ではないのか」

「機兵の操縦は、乗備機の技術からすぐ応用できるようなものではないのです。その点、すでに機兵を運用している応龍隊のほうが、可能性は高いと判断できます」

「仮にそうだとして、だ。応龍隊とつるんだ無謀な男がいただろう。おまえの同期の、あの江藤だ。あいつこそ怪しい気がするぞ。事実、黒龍隊は関東一円の防衛を任されているながら、まだ駆けつけない。最悪の場合、紫龍隊は黒龍隊と事を構える覚悟があるのか」

「失礼ながらそれは愚問です、先輩。じゅうぶんな調査の結果、内通の事実が確かめられれば、刃を向けるのにためらいはありません」

「いっせいでいいよ、とあったところか。よかろう、応龍隊も黒龍隊も、おまえに任せる。正直俺の部隊では、変則領域内で機兵を相手にできない」

嘘ではないと藤居は感じた。実際、寺岡の部隊は啓示軍の機兵に対してろくに抗戦した様子がない。これから実施する予定も、少なくとも直近の一時間にはなさそうである。

そして拭えないのは違和感だった。寺岡はまさか上空から一方的に攻撃されるために出動したのではないだろう。かといって、命じられるままに出てきたにしては、寺岡はやる気に満ちているのだ。いったい何をやろうというのか。

「ただし」寺岡は続けた。「まずは目前にいる黒龍隊から対処するのが順序というものだ。その砲撃戦仕様機のテストのために、黒龍隊からパイロットを派遣した話は聞いている」

とぼけるのは難しかった。黒龍隊にせよ紫龍隊にせよ、その隊員名簿は寺岡が確認できる状態にある。顔を隠してどうなるものでもない。

「任務優先度 AA^{ダブルエー} って言っても、無理ですよ」

送話をオフにして、後部席の円道が囁いた。

「江藤少佐から明示的に受けている任務は、あくまで角龍の評価試験完遂だ。九天軍が襲って来たなら、それは抗戦が認められるだろう。けれど自衛という観点で言えば、あのフルークゾルダートを攻撃せずにやり過ごすというのは言い訳しにくい。幸か不幸か、角龍にはその能力がある」

その間、茨木は先に尹慶珠の顔を見せることで、同行の角龍も紫龍隊の一員が動かしていると信じさせようとしていた。角龍の乗り手は^{ヘッドマウントディスプレイ}HMD を装着しているため顔は見せられない、とも説明した。実際、藤居と円道は角龍の UI をフル活用するため HMD をつけたままにしている。茨木は嘘は口にしていない。

茨木の尽くした技巧は、彼を昔から知るらしい寺岡に対して効力を発揮しなかった。常とは違って婉曲な茨木の言い回しに感づくほど、寺岡と茨木との付き合いは深かったらしい。目上の者を敬う茨木が、そうした相手に向かって黒龍隊の同行を隠そうとしてくれていることが、藤居には嬉しかった。

もういいだろう。藤居はある決心をした。

「茨木大尉。黒龍隊に対する嫌疑は、自分たちで晴らしたいと思います」

その宣言は、寺岡にも聞こえている。反応はすぐにあった。

「認めるのか、砲撃戦仕様のパイロット」

「私は黒龍隊の藤居祐輝准尉です。それは認めます。しかし、黒龍隊が造反したかのような疑いは断固否定させていただきます」

「すまないが、准尉。今は下士官の意見を聞きたいのではない。江藤博照^{はら}の肚を確かめないことには、都民の……いや、首都圏の三千万の市民に安全を保証できんのだ」

「それを言うなら、疑わしいのは第一戦略機動師団じゃないですか」

円道が高いトーンで割り込んだ。

戦略機動師団とは、叛乱に対する抑止力として、各方面軍に少数が編成された陸海空混成師団である。近衛軍のような地域的な組織には属さず、方面軍司令部にあたる統合幕僚本部の命令で動く。部隊編成が叛乱鎮圧を主眼としているため啓示軍迎撃には直接的に関わってこなかったが、それだけに、この関東一帯では最も戦力を温存できている部隊である。

「近衛軍は一応動いているみたいですけど、第一戦略機動師団はどうして出てこないんです。緊急展開能力はいちばん高いはずなのに」

「まさにその緊急展開能力を維持するために、戦略機動師団は出動を控えているのだ。いや、控えざ

るをえんのだ。日本の空が敵に侵犯されているというのに、指を咥えて見えていることを強要される彼らの悔しさを、君はわかっていない」

「あたしたち黒龍隊を監視するためにですか。ばかばかしい」

「ばかだと？ 貴様、口を慎め」

藤居は溜め息をついて、茨木に呼びかけた。

「教官。先に行ってください。ここで時間を取られるのは角龍一機で充分です」

「そうだな……。了解した。そうさせてもらう」

茨木の乗る BMD-4 と、尹慶珠の龍健児型が、再始動する。そして、BMD-4 の後ろにつけていたトラックも、糸で繋がっているかのように遅れずそれに続いた。ずっと口を挟まずにいた峰國は、別に居眠りをしていたわけではなく、ちゃんと話を聞いていたらしい。寺岡は、角龍だけが黒龍隊のものだという誘導に引っかかった。円道の挑発が功を奏した恰好だが、おそらく企図した言動ではないだろう。藤居もそれを計算に入れていたわけではなかった。

峰國はよく考えてくれていた。市ヶ谷がもう機能を失ったのであれば、峰國だけでも猿之門に直行してもらい、本隊の安否を確かめてもらったほうがいい。霞ヶ浦と猿之門、両方の状況を照らし合わせれば、一ヶ月の沈黙を破って相次ぎ亜連軍と警察を襲った九天軍の目的も見えてくる。昊天が藤居たちに語った言葉の真偽も、そこから推し量れようというものだった。

峰國さえ確実に猿之門まで辿り着いてくれるなら、自分はいっそこに残るほうが正解かもしれないと、藤居はふと気づいた。黒龍隊が近衛軍の一員として協力姿勢を取っている様子を、この東京で広くアピールするのは、悪くないアイデアと思われた。江藤に直接頼まれたことでなくとも、状況が自分に求める役割がそれであるなら、演じてみせるのが吉。不特定多数への友好アピールという、江藤が苦手とするところを、藤居は自分こそが補ってやらねばならないと意識していた。

「円道、悪いが付き合ってもらおうぞ」

藤居の眩きが聞こえたのか、寺岡相手にガミガミ言っていた円道が短く何か言った。何かしらの疑問形だったようなので、ひとまず藤居は言葉を重ねた。

「頼むぞ、相棒」

「はい、喜んで」

円道の明朗な声の余韻に紛れ、どこからか口笛が聞こえたようだと、藤居は首を捻った。

三

南田が猿之門基地に帰還したのは、午後十時を少し回った頃だった。

無事の帰還を祝う出迎えはない。原因は察しがついていた。第二大格納庫まで歩みを進めると、庫内には先に二機の龍が戻っている。交戦結果はすでに報告済みということだ。

機体を降り、コンテナに腰を下ろした杜と朝井が、大勢に取り囲まれて質疑応答を行っている。南田の計算では、ふたりは半時前には帰り着いたはずだから、もう重要な情報は展開され終わっているだろう。一方、江藤の将龍はまだ戻っていない。

機体を定位置に移動させながら、集音マイクで外の会話を拾い聞きしていると、案外ふたりの土

産話はまだまだ佳境だった。どうやら基地の通信設備は復旧していないらしく、隊員は外の情報に飢えているようなのだ。朝井と杜に向けられる質問は、戦闘の推移についてはもちろん、街の様子についても多く寄せられていた。横浜議事堂は無事か、九天軍はまた現れていないか、といった質問の末、横浜の象徴であるブルーシティが無事な姿を保って天に聳^{そび}えているとわかると、安堵の溜め息が広まった。

そのタイミングで、飛蝗型の特殊な脚をしまうのに手間取っていた南田は、ようやく機体を降りるに至った。朝井たちを囲む人だかりの一部が視線を寄越してきて、南田は自分も捕まるようだぞと身構えたが、仕事熱心な整備班員数名が人垣を散らしにかかり、包囲を免れた。少し残念ではあったが、助かったのは間違いない。心身ともに疲弊しつつある。状況が継続する以上、休めるときに休んでおきたい。

「飯！」

南田は、現在の最たる欲求を叫ぶ。

機兵を降りたあとといえば、普段はまずシャワーで汗と臭いを洗い流し、洗いざらしではあるものの強度と清潔さの要求仕様を満たすシャツに着替える。しかし今夜はいつまた機兵で出ることになるか分からない。幸い、四月半ばのことで、まだ夜気は冷たい。シャワーはやめておく。そうなると至上命題は腹を満たすことだった。昼間、九州から取って返す高速道路のサービスエリアで肉まんを食べて以来、固形物は摂取していない。

「竜時さん、レーションはセルフサービスでお願いしますね」

南田とすれ違いに飛蝗型に取り付く整備班員の声が、微かなドブラー効果を伴う。空腹の機兵パイロットよりも、試作品の脚を付けたばかりで出撃させた機体のほうが心配なのだろう。実際、過熱させている。状況説明をしたほうがいいのかと思ったが、飯を食っていいという言質^{げんち}は取れたのだからと、気づかないふりをする。

籠城戦から解放された杜と朝井が、不満も漏らさずおとなしくレーションを調達しに行く。南田は彼らの背中を見つめながら格納庫に残った。――残るしかなかった。いつのまにか現れた江藤が、南田の肩をがっしりと掴んでいたから。

「おい、竜時」

「うわわわ。どこから湧いて出たんですか」

南田は格納庫を見回すが、やはり将龍の姿はない。入って来れば気がつかないはずはなかった。穂積克が消えたように、瞬間移動でもない限りは。

別に瞬間移動したわけではないはずだが、南田の近くにわらわらいたはずの整備班が、^{こつぜん}忽然と姿を消している。再びあたりを見回した南田は、潮が引くように格納庫から一時撤退する同僚たちを見つけて、肩を落とした。

「どうした。疲れたか、竜時。厚木基地はそんなにひどかったか」

「いいえ、被害はたいしたことはありませんでした。――でも、どうしてそれを」

「わからいでか」

南田は帰路の途中で寄り道をし、自発的に厚木基地の偵察を実行したのだった。それで朝井たちよりも帰還が遅れた。しかし、江藤にはその行動は伝えていない。要請があれば行かせる、と江藤

は言ったはずだった。南田は勝手にそれを実践した。本来なら命令違反で怒鳴られ鉄拳制裁を受けても文句は言えない。実際に江藤の鉄拳を受けたなら、いくら文句があっても口をきける状態ではないだろうが。

「――では報告します。三節腕ほかの乗備機が動いていて、滑走路の復旧作業は進んでいましたが、陽の光のもとで確認しないことには離陸許可を出せないと管制塔が言っていました。方便かも知れませんが。いずれにせよすぐに戦闘機が飛ぶことはなさそうです」

「ほほう、交信までしてきたのか」

「当然、向こうに見つかりましたからね。不審に思われてもいけませんから、ひと通りは。でも陰もほろろの扱いでしたよ。通信に答えた厚木の将校は、黒龍隊を嫌っているようでした。やっぱりあのときの一件のせいですか」

厚木基地で、黒龍隊はエデン系テロリストの襲撃に遭遇した。南田たちは運が悪いと思ったものだが、あちらにしてみれば見方は異なるだろう。黒龍隊が来た日に限って襲撃を受けたのだから、黒龍隊こそ疫病神だと遠ざけられても不思議ではない。

「そういえば、コテコテの元老院派がいたな。あの連中が実権を握っているのか……。となると、元老院の腹積もり次第か。忌々しい。表立って統帥権を主張しないくせに」

「そういえばといえば、少佐はどこへ寄って来たんです」

まさか殿を気取るためだけに時間を潰していたのではあるまいかと、南田は疑う。

「何を言っている。俺は一番乗りで帰ったぞ」

「将龍はどうしたんです」

「第五実験棟の裏だ。今、北嶋と梶間センセイのおもちゃになっているところでな」

南田が九州から連れ帰った准教授は、血の匂い漂う基地に踏み込んで吐瀉としゃを繰り返しつつも、北嶋となにやら濃密な打ち合わせを行っていた。もう検証段階に入ったらしい。しかし、南田にはその実施場所が腑に落ちなかった。

「あそこにろくな工作設備は残っていないのに……。何をしようというんです」

「電算室の計算資源を使えるだろうが。そこが味噌だ。実は将龍に搭載したエアインパルサーの回路構成が、九天軍が梶間センセイに見せた回路図と似ているらしい。将龍のバルムンクシステムを調整して、EPUと電算室のタグで信号解析すれば、九天軍のおもちゃの正体を掴めるかもしれない。北嶋とセンセイがそう興奮していた」

「それはつまり、時空跳躍を再現できるということですか」

「さあな。解き明かしてもらおうとありがたい謎は、そればかりでもない。龍に搭載されているマスマシフィューザやバルムンクフィールドジェネレータも、所詮は経験則で機能しているに過ぎない。思わぬ機能拡張の余地や、逆に脆弱性や危険性が見つかるかもしれん。八月の悪夢からこっち、世の中わからないことだらけだ。俺の体重がなぜ減らないのか、とか。――いかん、体重の話をしたら腹が減ってきた」

「シミュレーションなんて始めちゃって、再出撃はどうするんです」

「そのときには計算を止めるわい。あくまで、あわよくばの施策だ」

江藤はそう念押ししたが、南田には、江藤が少なくない期待を寄せているように見えた。

そのほうが納得が行くのだ。龍の複座型を改造して将龍を生み出した理由が、単純に軟禁の憂さ晴らしだけだったとは南田には思えない。江藤は、龍王ロンワンや雷麒麟ライキリン、牙黒鷲ガコクシュウのような特別な機兵を再現したかったのかもしれない。“ベルリンの壁”を突破できるというアドバンテージを、黒龍隊で保持しておくために。

南田の憶測が的を射ているならば、江藤の企みはまさに今日のような事態を見越してのことだったに違いない。そして、将龍のエアインパルサーが九天軍の時空跳躍らしき技術の解析に役立つというのも、ただの偶然ではないことになる。

しかし、今は時間がない。黒龍隊の手持ちの機兵は少なく、試作機とはいえ将龍を戦力の員数外にするのは惜しい。江藤が好機と危機との狭間で揺れているのだと、南田はその微妙な表情から推定するのだった。

「将龍は、結果が出るまで計算に使っていて大丈夫ですよ」南田は言った。「^{エーゼクス}E6の蚊トンボくらい、俺が飛蝗型で撃ち落としますから」

「リキむな、竜時。死亡フラグだぞ。今は機兵よりも戦闘機かヘリが欲しい」

「近衛軍と歩調を合わせなければならない、と？」

「理想を言えばそうだが、実際には面倒だな。基本的には独自に動くことになる。俺たちも一応、近衛軍の一員だが、敵襲となれば俺の独断で黒龍隊は動かせるからな。この権利を活かさない手はない。櫛田の爺さんだけは、基地司令の権限で施設を封鎖して、間接的に黒龍隊を足止めできるが……。そういえば大将、もう東京から戻ったのか？」

「お見かけはしていませんが、俺も今戻ったところですからね」

「フムン。穴蒲が知っているはずだな。秋月にでも聞かせよう」

「直接聞けばいいでしょう。非常時くらい、苦手意識は捨ててください」

「ならおまえが行って来いよ、隊長代理で」

「俺がですか？ 冗談でしょう」

この疲れているときに穴蒲の説教は受けたくない、という意味合いで南田はそう返したが、しかし黒龍隊隊長の代理という意味では、いつか快く引き受けたいものだと思った。そんな将来の夢のためにも、ここで江藤に代わり戦功を挙げておくのは悪くない考えだ、とも。

「冗談ではない。爺さんには、近衛軍のケツを叩いてくれと頼まんといかん。俺が言うより効果的だろうからな。なにせあの大将、往時は横須賀の英雄と誉めそやされた男だ。俺より少し上の世代には、派閥の垣根を超えた絶大的なカリスマ性がある」

「そういう少佐も、横須賀の士官学校ではかなり有名ですよ」

カリスマ性があるかはともかく。その一言を南田は飲み込む。

「士官学校のヒヨコどもでは援軍にならんだろう……。ま、竜時もヒヨコに毛が生えたくらいだが」

江藤は南田の肩を叩いて哄笑する。夢をけなされたようで、南田の心は少々傷ついた。

「櫛田大将に頼まなくても、元老院は、^{オフエンバーレナ}啓示軍を放っておかないのではないですか？ 遅かれ早かれ、必ず航空戦力は動くと思うのですが」

「遅きに失しなければいいが。それにな、竜時。――いや、よそう」

顔を背けた江藤は、ひとまず休憩だ、腹ごしらえだと、鼻歌とともに行進を始めた。

何を言いかけたのか南田は気になったが、ここで安直に答えを求めては江藤に対して負けてしまう気がして、開けた口に別の言葉を紡がせる。

「了解。レーションをお届けします。詰所で食べますか？」

「気が利くな、竜時。だがレーションなどと悲しいことを言うな。頼んでおいた土産を出してくれればいい。岡山のカブトガニ饅頭まんじゅうをな」

「あ」

南田は口を押さえた。賞味期限の都合で帰路に買おうと思っていたカブトガニ饅頭だが、帰りは急いでいたので完全に失念していた。いや、覚えていたとして、もし南田たちがその時間ロスを選択していれば、今頃江藤は穂積克に拉致されていただろう。当人にはそれもハッピーエンドだったかもしれないが。

明らかなのは今現在、江藤はハッピーではないということだ。瞬間冷凍したかのように硬直し、かろうじて首だけ振り返った江藤の表情は、やはり体と同様に固まっている。しかし口だけは例外だった。

「念のため聞く。配達にただけだな？ 日時指定とか、クール便とか、そういうのを頼んだから手元にないだけだな？ 万が一にも忘れたわけではないな？」

「ノー、サー」

江藤を支えていた何かがぷつりと切れた。その何かは、顎を固定する役割も持っていたのかもしれない。江藤は顎関節を喪失したかのように大口を開け、急速解凍された表情筋は、全力でがっかりを表現していた。

「饅頭は届かんと言うのか……」

だらりと頭が垂れ、しかし直後に水平に復帰する。

「いや、この江藤博照、たとえ戦闘糧食でも任務はやり遂げてみせる」

「あの、それ普通ですから」

ともかく何か食べさせたほうが安全だという防衛本能の訴えを聞き入れ、南田は江藤を置いて、レーションの確保に向かった。

格納庫を出たすぐのところに朝井がいた。庫内で南田が江藤に捕まっているのを見て、入るのをやめたような立ち位置だった。レーションは持っていない。不満げな顔を見るに、すでにかっこんだわけでもなさそうだった。

「レーション、なかったのか？」

「いや、あるにはあるんですがね」朝井はぶつぶつと答える。「士官用宿舎に運ぶぶんだからって、分けてくれないんですよ。野外炊具も貸してくれないし」

「士官用宿舎に？」

江藤が格納庫にいるのに、おかしいことだと南田は思った。レーションを独り占めしようなどという不埒ふらちな士官を、南田は他に思いつかない。

「いわゆるカツ井だな」

ぬっと顔を出した江藤が呟いた。南田と朝井は揃って首を傾げる。江藤は自分の発言が悦に入った様子で、南田と朝井の肩を抱く。

「朝井はレーションを確保後、格納庫で待機。洋^{ヤンシェン}伸ほどこだ。食ったら仮眠だと言っておけ。竜時は俺についてこい」

「え、ちょ、さっき休憩だって」

「言ったが。キュウケイの前にはシンリが必要だからな」

例のごとく抵抗は無駄だった。生存本能に訴える食料のことなら或^{ある}いはという南田の淡い希望は、つべこべ言うなという一言と重い拳骨で粉碎された。

* * * * *

江藤は南田を士官用宿舎に引きずって行った。極秘メニューのカツ丼レーションが運び込まれたとでも勝手に勘違いしているのではないかと、南田は上官の正気を疑った。照明に照らされた横顔が、やけに嬉しそうににやついている。

士官用宿舎の玄関には、バッキンガム宮殿のように見張りがついていた。小銃を掲げたふたりのうちの片方が、はじめ江藤に敬礼し、引きずられている南田に気づいて会釈する。よく見ると、それは阿賀の部隊の新人、小笠木だった。同部隊で数少ない同年代の隊員でもある。

「お疲れ様です」

「通るぞ」

江藤は小笠木たちの返事を待たず、玄関の奥へと突き進む。それまで掴まれていた襟が扉を開けるときの解放されたので、南田は立ち止まって小笠木に話しかけることができた。

「食糧の守番でもしているのか」

「いえ、違いますよ。――食べ物の話はきついです」

小さく付け加えた小笠木の顔色が青白いのは、照明の色合いのせいではなかった。その服に黒っぽい染みがついているのに気づき、南田は事情を察する。まさかソースではあるまい。嗅げば臭いもするのだろうが、南田は猿之門基地に未だ漂っているはずのその臭いを、すでに意識できない。

「そのうち慣れるさ」

他にいい言葉が見つからず、作るべき笑顔のかたちもわからず、逃げるように南田は玄関をくぐった。

江藤は一階の面談室に首をつっこんで、収穫を得ずにふりかえったところだった。レーションの匂いを求めているのではなさそうで、ひとまず南田は安堵したが、しかし江藤が再びのしと歩いて行く先に何が待っているのか、まだ予想できない。

階段を登り、江藤の部屋がある五階を通過して、最上階の六階へ。

江藤は櫛田を探しているのだろうかと思っただ。江藤は櫛田の副官である穴蒲が怖いだけなのだから、直接櫛田を探すことに、面倒臭さ以外の難点は抱えていない。基地に戻った櫛田が、宿舎でのんびり休憩しているとは想像しづらいが、九天軍に破壊された司令部棟を放棄して、櫛田の個室とその一帯を代わりの司令部としたのだと考えると、いかにもそれらしい。大量のレーションが運び込まれたという朝井の証言にも合点が行く。

櫛田の個室がどこなのか、南田は知らなかった。江藤が文字通り目の上のたんこぶだと言ってい

たことがあるから、ちょうど江藤の部屋の真上なのかもしれない。しかし江藤はその位置を通過する。ドアに小さく出ている表札を横目で確かめた南田は、そこに「櫛田伴雪」という四文字を見た。本当に真上だったのだ。

櫛田の部屋をパスした江藤が立ち止まったのは、さらに数室先だった。表札には「倉知恵子」とある。

櫛田が赴任するまでの間、基地司令代理を務めていた倉知のことは、上級将校との付き合いの少ない南田も割合よく知っている。九天軍撃退後、基地内で無事が確認されたという話だったが、姿を見る前に南田は啓示軍迎撃に出撃したので、怪我の有無はわからない。

ただ、江藤がここへ来たのは、倉知の見舞いのためではなさそうだった。横顔がまだにやついている。とても誰かを心配している様子ではない。むしろ、喜んでいる。櫛田のことはともかく、江藤がそこまで倉知を嫌っているとは、聞いたことがない。――まさか寝込みを襲う気じゃないだろうなど、俄な不安が南田を襲う。

江藤がドアを押し開ける。鍵はかかかっていなかった。ぎょっとして振り向く倉知の姿を南田は想像した。

ぎょっとしたのは南田のほうだった。

「何をやっているんだ、坂元」

部屋の中央で椅子に拘束された倉知の背中があり、それに向かい合って坂元と秋月がいた。秋月は緊張した面持ちで、背筋を伸ばして立っているが、坂元は無作法に机の上に腰掛け、片膝を抱えている。伏せ気味の顔は翳り、手にはいつものナイフがある。

「見たとおりだ」

坂元は視線を倉知に据えたまま答えた。その先が続かないのを見て取って、秋月が言い添える。「倉知大佐と……、そうね、お話ししているところよ」

「待ってくれよ。そんな平和なシーンには……」

「でかした、坂元」

南田を遮って拍手する江藤には、坂元と秋月の行為に全く驚いた様子がない。にやついていたのは、この事態を察知してのことだと、今更ながらに南田は直感した。

しかし、なぜこんなことになったのか、南田は納得できない。出撃前、江藤は坂元に休めと言っていた。坂元が頷いて隊舎へと歩いて行くのを、南田は見ていた。

「説明してくれ。どうして倉知大佐を」

「竜時、本当にわからないのか」坂元が目を合わせる。「いいや、わかっているだろう」

坂元の指摘は正しい。南田はひとつの答案を持っている。それを正解と思いたくないだけのことだった。

「証拠はあるのか。大佐が九天軍と通じていた証拠は」

「物的な証拠は現在収集中だ。状況証拠なら揃っている。基地の通信隊が九天軍と通じて、奴らの侵入を手引きしたことは、すでに複数人から自白が得られている。その通信隊の制圧を進言した俺を、大佐はろくに話もしないうちから狂人として捕えようとした。ちょうど九天軍とコンタクトを取っている時間だったんだらう。上妻中尉こうづまが味方に回ってくれなければ、今頃ここは九天軍の新しいア

ジトになっていたかもな」

「そんな話は初耳だぞ」

「おまえこそ、九州まで行って何を掴んできた。イルベチェフ大尉はどうした。どこで門宮と一緒になった。俺だって聞きたいことはいくつもあるんだ」

南田に向かって呵成にまくしたてたかと思うと、坂元は穏やかな表情に戻り、倉知に向き直る。「というわけで倉知大佐、そろそろご発言願えませんか。動機など説明してもらえれば幸甚です」

倉知は反応しない。

話しながらナイフを^{もてあそ}弄んでいた坂元の手動きが、秒を刻むごとに早くなる。不動の表情よりよほど明瞭に坂元の苛立ちを読み取ることができた。南田は隣の江藤を見上げたが、まだ口を挟む気にはならないようだった。

――ならば。

南田は、期待するだけの自分を旅先で捨てて来た。己の欲するところは自ら切り拓くのが正道。南田は江藤の介入を待つのをやめ、つかつかと坂元の前まで歩み寄った。

「しまえよ。拷問みたいじゃないか」

同僚の^{いさ}諫めを、坂元は鼻で笑った。

「必要ならそれも^{いと}厭わない、というメッセージだ。ま、俺はまだ軍規を遵守するつもりでいるが、すべてはこいつら次第だ」

坂元が横を向いて顎をしゃくると、^{たんす}頷いた秋月が倉知の筆筒の物色を始めた。女性の持ち物ということで、坂元なりに配慮した人選なのだろう。それ以外に、情報班の秋月を伴っている理由は見当たらない。

南田はふりかえって、椅子に縛られている倉知の顔を初めて見る。基地で二番目の地位を持つ女傑は毅然と口を真一文字に結んでおり、秋月がプロの泥棒ばりの手つきで家具を漁り回る様子には目もくれず、南田に弁護を求めて視線を送ることもない。

「持久戦のようだな」江藤が言った。「俺は通信隊のほうを覗いて来るとしよう」

自習を宣告した教師のように江藤が出て行こうとした、そのときだった。倉知が沈黙を破り、不出来な担任教師を諭す学年主任のような口調で江藤を呼び止めた。

「江藤少佐、穂積克には会えたのか」

廊下へ消えようとしていた大きな背中が、ドアにつかえたかのように、静止する。

「――誰？」

秋月が小声で尋ねる。

「前の基地司令の子供だ」南田は門宮から教わった話を手短かに話す。「叛乱を首謀した^{とが}咎で捕まっていたのを、九天軍が助け出した。自分を捕まえた江藤少佐を、恨んでいるという話だったけど……。どうやら俺の聞いた話がすべてじゃないらしい」

でなければ、穂積克が江藤に愛の告白をするわけがない。

南田は坂元の様子を窺ったが、特に言うべきことは持っていないようだった。

「穂積と俺は同じ部隊にいた」

江藤がドアを後ろ手に閉めて言った。江藤の部屋と同じ仕様だとすれば、これで話し声くらいは

遮断できる。江藤の話し声でも、である。

「あいつが叛乱を起こすとは、俺は考えていなかった。軍に不満を持っていたのは知っていたが、当世何も特別なことじゃなかったからな。軍にせよどこにせよ、実際に行動を起こすのは、不満を持っている奴のうち、ごく一握りだ。あいつはそんな度胸がある奴じゃない。――そう思っていたら、叛乱だ。わけがわからんから、とりあえず捕まえて膝詰めの説教をしようとした。だが、いざ捕まえてみたら俺が話をする暇なんてなく、そのまま穂積は連行された。穂積と会ったのは、それ以来だ」
「初耳ですね、そりゃ」

坂元の声は、何か思案している様子で、いつもよりスローだった。

「門宮さんも、穂積克は江藤少佐に捕まえられた恨みがあるとしか、教えてくれませんでした」

「ま、軍でも伏せていた話だ。父親の穂積少将がこの基地司令を辞めた本当の理由はそこにある」

「そういうことなら、動機はあるということですね」

秋月がゆっくりと、自分の考えを確かめるように切り出す。その視線は江藤ではなく倉知のほうに据えられている。

「穂積少将の辞職の遠因を作ったのは、部下の管理不行き届きで叛乱勃発を看過した、江藤少佐、あなたにある。倉知大佐は、前基地司令の愛弟子ですから、江藤少佐の失脚を狙ってもおかしくない」

「訂正させろ。俺は別に穂積の上官だったわけじゃない」

「じゃあ、恋人だったんですか」

南田は勢いで訊いてしまった。すると江藤の顔が赤鬼のように豹変し、目玉が飛び出んばかりに睨まれた。

「ば、ばかか、貴様は！」

穂積克の愛の告白を聞いたのは、ここでは言われた本人と南田のふたりだけである。坂元と秋月のふたりが、江藤と南田を相互に見比べて状況を推定するのに忙しくしている間、ただ倉知だけは眼を閉じて微笑んでいた。

「よかった。克とはちゃんと会えたようね」

倉知はいつになく優しい声で呟いた。

「おかげさまで。危うく連れ去られるところだった」

江藤は腕をさする。乗備機のマニピュレータに挟まれた箇所である。

「自白するんですね、大佐」いくぶんほっとしたように、秋月。「あなたは九天軍に穂積少将の息子がいると知って、基地襲撃に協力した」

「訂正させろ、秋月。克は女だ。恋人云々を聞いていなかったのか」

秋月は肩をすくめた。

「てっきりゲイかと」

「俺も訂正しておこう」坂元が口を挟む。「穂積少々の娘と江藤少佐を会わせるだけなら、大佐は基地襲撃まで許す必要はない。嘘の口実で外に連れ出し、そのまま拉致させればいい。――いや、通信隊の仕組んだのは、本来そういう作戦か。どうなんです、倉知大佐。妙な占い師の噂を基地の隊員の間に流したのは通信隊だ。その大元はあなたか。あなたはどこまで知っている。どこで九天軍に裏切られた」

「坂元は少し黙っている」

江藤はようやく、南田たちと同じく部屋の奥側に移動し、倉地の正面に回った。そして坂元を押しよけると、机の上に尻を半分乗せて腕を組む。それだけでも机が軋む音を南田は聞き逃さなかった。秋月が真剣に破損を心配して椅子の脚を覗き込むが、そこが破壊起点とは限らないと、士官学校で破壊力学をかじった南田にはわかっていた。

猿之門基地も同じだと、南田は思った。破壊起点がわからない。倉知ひとりを裏切り者と断罪すれば済むような、単純な問題ではないような気がしていた。攻撃したのも、されたのも、組織なのだ。人ひとりの考えで自由になるものではない。穂積少将の娘はそれに失敗したのだろう。多くのシンパシーを得ることができず、企ては水泡に期した。一旦は、彼女に再びの機会を与えた九天軍は、もっと多くの味方を作るべく根回しをしていたに違いない。倉知はその一端なのだ。支持者を求めて地下深く広がった無数の根のなかの、たったひとつ。

「いつから、穂積と連絡を」

江藤の問いに、倉知は小さく笑った。

「昔からだ。秋月軍曹の言ったとおり、私と穂積少将との付き合いは長い。私が休日に少将の自宅に招かれることは度々あったし、克とも、彼女が物心付く頃から親しくしていた」

「はぐらかさなくて頂きたい。いいや、あんた自身にとっても不利な発言だ。あいつの脱獄を九天軍に支援させたとも受け取れる」

「それは情報部が判断すべきことだ、江藤少佐」

「質問をしているのは、あんたの処断のためじゃない。俺たちが生き延びるために、敵が何者かをはっきりさせにゃならんのです。――九天軍はどうやら、予め基地に仲間を潜り込ませていた。それは大佐殿の手引きですか」

「そうだ」

あっさりと、倉知は肯定した。坂元をまともな対話相手として見做していなかったとも取れる行動で、実際、南田は隣で舌打ちの音を聞いた。

「妙な話ですな。九天軍は民兵と退役軍人で出発した組織だが、現役の正規軍も相当数抱えていると？」

「ある時期を境に、大量の亜細亜連邦軍将兵が九天軍に流れている。情報部はどうにそれを察知していたが、ひた隠しにしてきた。応龍事件で星志 敦大将^{シンツイドウ}を失脚させたように、泳がせることで状況を利用できるとでも思ったのだろう」

「ずいぶんとご親切に詳説して頂けるのですな」

「いずれわかることだ。自白剤を使えばすぐにな」

黒龍隊がやらずとも、身柄を受け取った情報部なり何なりがそれをやる。倉知はそう覚悟しているようだった。リスクを承知のうえで、裏切りを行ったのである。何が彼女を衝き動かしたのか、南田にはそれがわからない。

「で、ある時期とは？ 流出した将兵の共通項は？」

「答えはもう教えている」

江藤は腕を組んで目を閉じ、数秒後にはかっと見開いた。

「応龍事件。軍閥派か」

「そう。軍閥派の秘密裡の機兵開発が最悪のかたちで頓挫してから、半年ほど後のこと。寄る辺を失った者たちが、志を果たす術として相次いで九天軍を選んだ。九天軍か、そのパトロンからスカウトが出向いたのだろう」

「溺れる者は藁をも掴む、か」江藤は嘆息した。「俺には理解できん選択だ」

「応龍隊と手を組んだ貴官の行動も、私には理解できないことだ」

「説明しても聞かないのでは、理解できないのも当然だ」

「そうだな。軍閥派が危ぶんだのはまさにそのことだ。指導層が軒並み失脚し、派閥の総意を発言する場を失った彼らは、力によるアピールという答えしか見つけられなかった。議会派と元老院派という二大派閥の封殺が、それだけ強力だったのだ」

「その報復が、一連のテロか」

「わからない」

「わからない？ あんたは一員でしょうが。大佐の階級と基地司令代理の役職は、九天軍じゃ何の足しにもならなかったと？」

「私は九天軍に加わったわけではない。ただ協力しただけだ。そもそも、軍閥派に属していたつもりもない」

弁解というよりも、純粹に間違いを訂正する口調だった。それが演技だとすれば大したものだと南田は思ったが、見極めはできなかった。

部下を捨て置き、江藤の尋問は続く。

「しかし、穂積少将は軍閥派だと聞き及びますがね。それに我らが現基地司令閣下も、応龍事件で失脚したお偉方の見本だ。大佐殿がそのシンパでないとは、信じがたい」

「個人としてふたりを尊敬しているのは確かだ。ひとつ覚えておくがいい、江藤少佐。立場というのは、往々にして、本人が望んで選んだものではない。それゆえに、立場を見てその人間の真意を図ることは難しい。櫛田大将も穂積少将も、軍閥派の主義主張をすべて肯定しているわけではなかった。軍閥派瓦解ののち、一部の将兵が九天軍に流れたことを、お二人は深く悲しんでおられた。櫛田大将が応龍事件に連座して権力を手放されたのは、暴力的な闘争を回避するためだったのだが、裏目に出してしまった」

「では、そんな將軍閣下たちのお心も汲めないような凡愚どもに、どうして大佐殿は協力を」

「九天軍は……、いや、克は、穂積少将を人質にした。私が協力を拒めば、少将は殺されていた」

「馬鹿な」坂元が叫んだ。「娘が実の父を人質にできるわけがない」

「古来、親殺しの例は枚挙に暇がない。横浜議事堂で死者を出した克が、血縁というだけの理由で少将の殺害をためらうとは期待できなかった。あれは昔から思い切りのいい子だった」

「思い切りが良すぎるな、あいつめ」江藤が唸る。「俺の作戦は先取りされていたか」

「どういう意味ですか」

聞き捨てならない台詞について、南田は上官を追及する。

「穂積が俺を狙ってくることは予想がついていた。だが俺は基地から出られなかったし、奴らからすれば襲撃が難しかった。奴らは俺を誘い出すために北嶋やおまえらを人質にするかもしれん。だから」

ら、逆にこちらから穂積を誘き出して、さっさと決着を付けようとしていたのだ。そのための餌として、穂積^{よしのぶ}芳喜の身柄を搔^か攪^{さら}って来るつもりで、昼間外に出た。九天軍の目黒襲撃の報が入ったせいで未遂に終わったがな。しかし、実行しても無駄だったわけだ。あの親不孝者め」

「少佐も一度、親御さんに謝ったほうがよさそうですね」

南田が溜め息をつく横で、坂元は鼻息を荒くしていた。

「納得できないな。仮に今の話が事実としても、大佐、あなたは江藤少佐ひとりを渡せばよかったはずだ。それなのに、九天軍の基地への襲撃を看過した。おかげでいったい何人の仲間が死傷したと……」

「弁明するつもりはない。私にとって、良き先輩であった穂積少将の命は重かった。他の数十、数百の将兵の命よりもな。それだけのことだ」

「でも、それでは説明がまだついていないわ」

そこで間を置いた秋月は、注目が集まるのを待ってから、先を続ける。

「江藤少佐を捕えるためだけに、九天軍は基地を襲って来たというんですか？ あまりにリスクが大きすぎる。実際、最高幹部のひとりを九天軍は失ったんですから」

坂元が、それを実行した。九天の名を冠する九人の幹部のひとり、蒼天の死が、九天軍の撤退へと繋がった。追撃で相当数を殺害、または捕縛したこともあり、猿之門基地への再度の襲撃はあまり心配されていない。それよりも防空網を悠然と突破した啓示軍のほうが問題になっている。

しかし、南田は心配を捨てきれないでいる。

聞いてしまったからだ。穂積克が仲間の少女と交わしていた不穏な会話を。

見せつけられたからだ。ふたりの女と乗備機が霧のように掻き消えるさまを。

不確定の脅威よりも明瞭な脅威への対応が優先され、南田たちは機兵で出撃した。しかし、啓示軍がゆっくりと事を構えるのならば、穂積が手勢を連れて再度江藤の拉致に現れることも警戒しなければならない。

九天軍が猿之門基地を襲ったのは、おそらく穂積の煽動の結果だろうと南田は考えていた。蒼天なる幹部は穂積を利用するつもりで、逆に利用されたのだ。江藤を連れ去りたいという穂積のごく個人的な願望のために。

ただ、彼女がどうやって蒼天^{そそのか}を唆したのは南田も想像が及ばない。九天軍のような傭兵的テロリストにとって、基地に直接乗り込む作戦は旨味がない。一撃離脱こそ彼らが取べき方法だった。ちょうど直前に、目黒の機動隊を爆破により壊滅させたように。いったい穂積はどんな言葉を弄して、猿之門基地襲撃に利ありと蒼天に信じ込ませたのか。答えは秋月の問いと同じところにある。「まさかこの基地に核弾頭が秘蔵されているだなんてオチはないでしょうな」

江藤が冗談めかして言ったが、誰も笑いはしなかった。暖炉の谷では核弾頭を巡って友軍と争ったのだから。公式には記録されていないため、倉知はそのことを知る由もないが、やはりくすりとも笑わなかった。かわりにひとつの仮説を披露した。

「啓示軍の空襲が、九天軍と歩調を合わせたものだとすれば、啓示軍の機兵に対して障害となりうる黒龍隊を予め無力化するために、基地を襲ったと考えられるな」

「それはない」坂元が断言する。「奴らは機兵よりも司令部棟や黒龍隊の詰所の制圧を優先していた」

「機兵に対する有効な攻撃手段を持っていないかただけではないか」

「奴らは奇襲を企図していた。それなら、起動前の機兵がいる格納庫を制圧すれば簡単に目的は達成できる。そこへ主力がなだれ来まなかったということは、やはり狙いは別にあったということでしょう」

「坂元少尉は何か考えがあるの？」と、秋月。

「いや、具体的にはわからない」

そう答えた坂元が、何か胸に秘めているのではないかと、南田は疑った。視線が泳いでいる、と言えば誇張だが、常の勢いを欠くのは確かだった。先ほど江藤に遮られたときも、何か意味ありげなことを言いかけていた。どこかで話す時間がないものかと南田は思った。

江藤がよいしょ、と呟いて机を荷重から解放し、手を打った。

「九天軍の目的は、捕まえた連中を締め上げればわかることだ。さすがに今度ばかりは、下っ端ばかりではあるまい。蒼天は死んだが、その取り巻きはいくらか残っているだろう。そして、その仕事は阿賀に任せればいい。俺たちは啓示軍をどうするか、それに注力せにゃならん。――坂元、そろそろ興奮も落ち着いてきただろう。朝井と杜を休ませるから、替わって戦列に戻れ」

「賢明な時間の使い方ね」

倉知が評する。江藤はそれには反応せず、秋月を見る。

「秋月。おまえは大佐殿を嚴重に隔離しておけ」

「私は戦列に不要なのですか」

普段口には出さないものの、おそらく情報班六人のうち最も任務遂行能力が高いと自負している秋月が、プライドを傷つけられたという顔をする。

「情報班はまだ四人いる。パイロットよりは余裕があるからな。そのうち交替はさせる。そう腐るな」

「了解。――阿賀少佐に連絡は？」

「不要だ。奴は目黒で九天軍に逃げられ、あげくこっちで部下が死んで、気が立っている。あれでもな」

「では、上妻中尉は」と、坂元。

「奴も駄目だ。ここにいる者以外には極力知らせるな。部屋の外でこの件について話すな。基地内とはいえ、どこに敵の耳があるかわからん」

まさか、と南田は高を括りかけたが、江藤の確信的な口調は、技術的にそれが可能であることをよく知っているからではないかと思ひ至り、戦慄する。そういえば、赴任当初から江藤は、隊員の趣味嗜好までよく調べていた。人選上必要な個人情報登録データから利用したのだと言っていたが、あれは信用すべきではなかったかもしれない。陰口を叩く場所には充分注意する必要があるそうだと、南田は深く胸に刻み込む。

そんな南田の疑念を知る由もなく、江藤は倉知^{よし}に向き直って決め顔を作っていた。

「大佐殿。あんたとは意外とウマが合うかもしれない。そんな気がしてきたよ。だから、今度酒を酌み交わすまで、誰にも暗殺されずに生き延びてもらおう」

「いいでしょう。できれば、克も一緒に」

「親子ともどもだと？」江藤はぎょっとする。「これはまた難題を」

「少将の居場所は見当が付いている。横浜地下の“ルート”。あそこしかない」

「仰るが、あそこは九天軍が侵入したとき、隈なく探したはずだ」

「あの場所を隈なく探すのは不可能だ。それは、そもそも軍がその全容を把握していないことに起因する。RATは全体構造の情報を持っているはずだが、それを軍に明かさないでいる」

「まさか。それはつまり……」

「否定しきれまい。そうだ、RATは何らかの目的で九天軍を泳がせている可能性がある。しかしRATとて狂犬を野放しにするリスクはわかまえているだろう。だから今日の襲撃も、RATが阻止してくれるという淡い期待があったのだが……」

倉知はちらりと苦渋の面持ちを垣間見せた。穂積芳喜の命が他の将兵たちの命に勝るとは断言したものの、好き好んで被害を出したわけではないのだという無言の弁明が聞こえるようだった。

「聞こえるか、江藤。こちらは阿賀だ」

江藤のベルトにぶら下がっていた無線機から、阿賀正尊^{まさとし}の声がした。

通信設備は九天軍との戦闘中におおかた破壊されたが、可搬型の無線システムは生きている。それを使って、阿賀は呼びかけている。江藤の弁の通り、日頃に輪をかけて神経質になっているのがよくわかる。

坂元は、無線の声を聞くやいなや、倉知の口をタオルで塞いでいた。坂元の心配はわかるものの、その行為に南田は眉を顰めた。そのどちらの様子を見てのものか、江藤は鼻を鳴らしてから、無線機を手取る。

「江藤だ。何か判ったか」

「重要な情報だ。九天軍は穂積前司令を捕らえていた。それを使って旧軍閥派に内通を強要していたようだ」

南田たちは顔を見合わせる。倉知の証言が、彼女の妄想や出任せではないことを、阿賀の情報は示唆している。

「おい、阿賀。穂積少将の居場所はわかるか」

「それも吐かせた。穂積前司令は横浜に囚われている。“ルート”だ。裏をかかれたな。九天軍の戦力は未だにあの地下構造に潜伏している可能性が高い。乗備機を隠せるような隧道^{すいどう}もあると俺は推定している」

「で、どうするつもりだ」

「会って話す。十分後に俺の部屋に来い」

「やれやれ、美女の誘いなら嬉しい言葉だが、男ではな」

江藤の冗談に気分を害したのか、阿賀が無言で交信を断つ。

肩をすくめて、江藤は無線機を腰に戻す。その直後、今度は江藤が腕にまいた通信端末が、アニメ声の恥ずかしい着信メロディを垂れ流した。咳払いをして、江藤はそれに出る。

「俺だ」

「ハイ、あ・た・し！」

送話口と口とが近いのか、相手の声は南田にもよく聞き取れた。それゆえに声の主も容易に判明する。

「門宮、貴様、どこに隠れている」

通信インフラが機能停止しているなか、通信端末自身の放つ電波でふたりは交信できている。すなわち、門宮はすぐ近くにいる。この士官用宿舎か、その庭先に。

「また来ちゃった。お部屋にお邪魔してもいいかしら？」

「――貴様、もう入っているな」

「ちっ。どうしてばれた」

地声に戻った門宮の声は、波長の関係で拾い聞きには適さない。何事かを江藤に伝えたようだったが、それは南田にはわからなかった。

「――よし、五分だけ時間をやる。何にも触れずに待っている。できれば呼吸もするな」

江藤は血相を変えて部屋を飛び出す。

南田と坂元は、慌ててそのあとを追った。

* * * * *

江藤は自室の電子錠にパスワードを打ち込んでから扉を開けねばならなかったが、やはり客はすでに入り込んでいた。

「おかえりなさいませ、ご主人様」

オクターブを上げて門宮がほほえみ、出迎えられた三人は同時に^{おえっ}嗚咽をこらえる。

こみ上げたものを堪えるためではないだろうが、江藤はしっかりと扉を閉めてから、口を開いた。

「RAT はどう動く」

単刀直入の質問だった。

RAT は表社会でも裏社会でも元老院の警護組織であることにかわりなく、啓示軍が首都圏に機兵戦隊を送り込んできたからには、何かしらの対応を取ることは明白だった。元老院議員の所在は公表されておらず、その情報は黒龍隊の職務上知りうる範囲からも外れているが、仮にこのあたりに元老院議員がいなければ、そもそも RAT が拠点を置く必然もない。そしてなにより、南田は門宮から直接聞かされてもいる。RAT は、九天軍が元老院議員に危害を加える可能性を排除するために、九天軍の捜査に協力していたのだと。

「啓示軍と呼応して動く反体制分子を鎮圧します」

「九天軍は任せろというのか」

「そんなケチなことは言いませんよ、江藤少佐。亜細亜連邦に逆らう者すべてです。警察では荷が重いでしょ、連邦軍にはまず啓示軍の機兵を排除してもらわねばならないので」

たしかに九天軍を任せられるなら黒龍隊の身は安全になるが、南田は門宮の言葉の影に隠れた事実に気づいていた。警察では荷が重い鎮圧任務を、総人員で圧倒的に劣る RAT が軽く片付けられるつもりでいるのは、それだけ乱暴な手段を用意しているからだ。おいそれと頷ける話ではない。RAT は好きに敵を決める。

「門宮さん」南田は問う。「RAT が黒龍隊を敵視することもありえるんでしょう」

「もちろん、可能性はある」

門宮はグラム単位の動揺も見せずに返した。

「しかしそれはお互い様というものだろう。だからこそ、妙な腹の探りあい避けて、こうして元老

院からのメッセージを届けに来ているんだ。――江藤少佐、黒龍隊には後顧の憂いなく、先陣を切って啓示軍を排除してもらいたいと、元老院では考えています。ここは期待に応じておいたほうが得だと御注進しますよ」

「横から妙な期待をかけられてもな。機兵なら元老院だって持っているだろう。あの偽龍王は出さないのか？」

「ちょっとちょっと。偽、偽って、やめてもらえませんか。れっきとした龍王の第二期シリーズなんですから」

「俺に言わせれば、あんなものは紛い物だ。――で、出られないのか？ 一昨日は、けっこう手加減をしてやったんだ。まさか壊れて動けないなんてことはあるまい」

「そんなことやったんですか。まったく、おとなげないな。――というわけで、俺はそもそも、そんな模擬戦のことは聞いていませんよ。今あれがどこにあるのかも。ただ、いずれにせよ、パイロットの五百蔵いおろいには対空戦闘の経験がない。火筒ホツツをまともに扱えるかも、ちょっと心配だ」

「使えない子だな」

「その適性を必要としていなかったんでしょう、SMITSは。後詰として控えさせるくらいなら、できるでしょう。うまいこと黒龍隊でゾルダートを地べたに叩き落としてもらえれば、あれも役に立ちます」

「地上戦に持ち込むまでが大変なのは、こちらとて同じことだ。だが、あれの跳躍力なら使いでがいいかもしれない。なんなら、機体だけ寄越してくれてもいいんだぞ。うちのパイロットは余っている」

「それはSMITSが、いえ元老院が許さない。元老院派の支配下にある龍王が、いつでもあなたの寝首をかけるという特典付きでなければ、派遣は成立しないでしょう」

「そこをなんとかするのが、おまえの仕事だ」

「アルバイトにそこまでする義理はないですね。所在確認と打診くらいはしてあげてもいいですが、俺の発言力に過剰な期待をかけられても困ります」

「おや、どうしたカマ野郎。勝手をやり過ぎて、RATに居場所がなくなったか」

江藤の発言はとても協力者に対するものではないなど、南田が上官の品性を改めて疑っていると、当の門宮は諦めたように肩を竦めた。

「勝手とは失敬な。俺はボスの命令に従っているまでです。RATも一枚岩ではないという悲しい実態をお察し頂きたい」

そのあたりの事情は、南田も九州までの往復の旅程で気づいていた。

坂元が一步進み出て、尋ねる。

「あなたと築嶋つしまとは、異なる指揮系統に属するのですか」

口調こそ穏やかながら、坂元の目付きは鋭い。

築嶋という名はどこかで聞いたなど南田は記憶を辿り、京都で門宮と一緒に倉庫の警備をしていた、岡っ引き風の男のことだと思い出す。

「それは答えられない。機密事項だよ」

「おまえ、まだ向こうに忠義心があるのか。敵から寝返って仲間になるおいしいポジションを取りやがったと、感心していたのだから」

江藤が言うと、門宮はいかにも演技っぽく顔をしかめた。

「人間きの悪いことを。俺は RAT を裏切ったつもりはないし、たとえ組織が混乱していても、自分の属する一派は正しいところにいると信じていますよ。江藤少佐、あなたもご自分をとことん信じているタイプだと、俺は思っていたんですが。違いましたかね」

「そうだな。おまえがこれからもきっと俺のために骨を折ってくれると信じている」

「それはこちらの台詞です、江藤少佐。さきほども言いましたが、元老院は黒龍隊の戦力に期待している」

「元老院に連邦軍の指揮権はない。筋違いだろう」

「それを承知で、非公式ながら黒龍隊に協力を求めているんです。関東に侵入した啓示軍部隊の作戦を阻止して欲しい、とね」

「なんとも虫のいい話だな。俺がここで飼い殺しにされている間、何の助けもよこさなかったくせに」

「今日、助けたじゃありませんか。九天軍が軍閥派崩れとつるんで猿之門基地を襲う計画を察知し、南田少尉の尻をとんぼスパンキングしてここまで蜻蛉返りさせたのは俺です。そして俺にそのように命令したのは、元をたどれば元老院議員なのです。ここ、テストに出るので覚えておいてくださいよ」

門宮は、南田に全く提供していなかった情報をさらりと開示した。とにかく、九天軍が穂積克の先導で猿之門基地を襲うようだという話だけを聞かされて、南田は福岡から高速を飛ばして帰って来たのだ。

「この俺様を餌にして、九天軍を引きずり出したがっていたのがおまえたちだ。獲物がかかったんで、逃がすまいとあくせくしてただけだろう。恩着せがましく事実をね振り曲げおってからに」

「まあ、それも事実の正しい側面なので、否定はしません。しかし、それだけでもない。中央議会の決定に、元老院がそうみだりに介入しては、亜細亜連邦の体制が揺らぐ。うちのボスたちは常にそれを懸念しているのですよ。ですから今回も内密に、公には江藤少佐の独自の判断というかたちで、ご協力頂ければ幸いです」

「元老院や RAT がそれほど慎重深かったとは初耳だな。すると、これまでの埋め合わせ分も足して、相当の見返りが用意されていると期待していいのだろうか」

「さて。黒龍隊に満足のいく物資を融通できるはずだと、ボスは言っていましたかね。龍の次期生産分を半ダースほど熨斗のしつけて贈ってさしあげましょうか？」

江藤は腕を組んで、門宮の発言が出任せかどうか値踏みしていたが、長くは続かなかった。

「ふむ。まずはそのボスに会わせろ。RAT の上司じゃないぞ、RAT 設立の元手を出したボスのほうだ。話はそれからだな」

「元老院議員の顔を明かせと？ ご無理を仰る。その秘密を守るのが、俺たち RAT の仕事だというのに」

「無理もゴム草履もあるものか、これこそ道理だ。RAT が分裂しているのは、元老院にも意見の齟齬そごがあるからだろう。どこの何様が俺に頭を下げるつもりなのか、はっきりさせろと言っている。俺にとっても好都合な話であれば、乗ってやってもいい」

「足元を見ますね、このひとでなし」

「人非人呼ばわりには慣れている」

「そいつは多分にその規格外の形のせいでしょうよ」

「で、会わせるのか、会わせないのか。会わせないというなら、黒龍隊は空海軍が動くのを待つだけだ」

「困りましたね。そこを動かすとなれば、使われる兵器は通常弾頭だけとは限らない。だから黒龍隊に頼んでいるのに」

「正気か。横浜だぞ」

「横浜に限らず、東京だろうと南京^{ナンキン}だろうと一緒にですよ。それだけ優先度の高いミッションだということです。俺にとってもあなたの説得が最重要ミッションになっている。――元老院議員との会談の件、持ち帰って検討させてください」

「アポはいつにする」

「二時間後でどうですか。検討にもそれなりに時間がかかる。会談の場をセッティングするだけでも、元老院議員が逆上したあなたに扼殺^{やくさつ}されないように、万全の注意を払わないといけないので」

「ジェントルマンを捕まえて何を言う」

「野獣じゃないですか。少なくともあなたの愛するゴンちゃんは野獣だし。あとは類友^{るいとも}の法則。――おっと、そろそろ五分ですね。では、またのちほど」

おちよくなった江藤に捕まるまいとばかりに、門宮は扉へと駆け去り、あっという間に廊下を足音が遠ざかって行く。坂元がそれを追おうとしたが、江藤の太い腕に邪魔をされた。坂元は表情で不満を明らかにする。

「RATは九天軍の襲撃をもっと早く警告できたはずですよ。少なくとも、築嶋は独自に九天軍のアジト狩りをやっていた。しかし、その情報は我々には一切流されなかった。奴らは信用できません。指揮系統が分裂しているという話も……」

「暖炉の谷のことを覚えているよな、坂元」

今度は言葉で遮られた坂元が、不満とは別のネガティブな心境を表情に乗せた。暖炉の谷ではいろいろなことが起こったが、そのなかのどの話題が出てくるか、南田には予測がついた。そしてそれは的中した。

「久留^{ひさどめ}は、元老院への忠誠を貫くために、俺たちに刃を向けた。倉知大佐にしても同じだ。穂積の親父を助けたいがために、テロリストに手を貸すリスクを負った。門宮が俺の条件を飲むなら、その覚悟を買ってやろう」

坂元はなおも不服そうだったが、江藤の腕をすり抜けようとはしなかった。

「案ずるな、坂元。奴の戻って来るまでの二時間をぼんやり待とうというのではない。こっちはこっちで、ミッションを設定しようじゃないか」

将龍での実験のことだろうか、南田は考えた。しかし、マニュアル通りにバルムンクシステムを操作するだけの機兵パイロットに、思考錯誤の実験の手伝いができるとは思えない。やれるとしたら、厚木基地に殴り込みをかけて元老院派の重い腰を上げさせることくらいだろう。そう発想してしまって、南田は苦笑する。ずいぶんと荒っぽくなったものだと。

「何を笑っている、竜時」

「いえ、こっちのことです」

「九州までのキャクキャウフフな旅程を思い出していたのだな」

「な、何のことでしょうか」

実を言えば、南田は出撃前後もしばしば南小柿柳枝のことを気にかけていた。九州からは車で一緒に戻ったが、九天軍が襲撃中の猿之門基地に連れて行くわけにはいかず、市街地の外れで下ろしたのだ。できることならそばで守ってやりたいが、そんなお節介は時期尚早だろうと自覚しているし、啓示軍やテロリスト相手に徒手空拳で何ができるでもない。自分だからこそできることを考えてみれば、やれることは限られている。

「なんだ、楽しかったみたいだな」

坂元がからかう素振りを見せたが、南田が危惧した程度よりもだいぶおとなしい。

「ああ、楽しかったとも。江藤少佐の妹さんにも会えたしな」

「今はその話はいいだろう」

江藤が南田の口を塞ぐ。聞かれたくないならわざわざ手配して合わせるな、と南田は叫びたかったが、しかたない。まずは呼吸の確保で妥協しなければならない。南田は敬礼で了解の意を示し、脂臭い掌から解放される。

「それはそうと、隊長、そろそろ阿賀少佐がお待ちです」

あっさりと興味を失った様子で、坂元が江藤を促す。南田が懐中時計を取り出して見ると、たしかに約束の時刻を過ぎている。

「それはいかん」江藤は自らの頭を叩く。「ミッションには奴の協力が必要だ。急げ。駆けつけ三倍の速度だ」

江藤はひとりで走り出してしまう。南田は坂元と顔を見合わせ、臨席を認められたらしいとわかると、牛のような足音を追った。

入隊当日にも似たようなことがあったと思い出しながら。

四

江藤と阿賀との作戦会議は、開始から半時でケリがついた。

南田は坂元とふたりで士官用宿舎の玄関を出る。

ふたりに気づいて敬礼する小笠木の顔は疲労の色が濃かった。彼らは倉知が敵と通じていたことをまだ知らないのだと南田は気づき、情報を隠している後暗さを覚えた。しかし今の小笠木にその話を漏らすのは空振りの善意に違いないと、出かかった声を嚙下^{えんか}する。

「ご苦労さん」

坂元がそれだけを言い、ふたりは肩を並べて第二大格納庫へ足を向ける。

江藤は倉知の件を阿賀に話さなかった。そうでなければ、手短かに会議が片付いたはずがない。阿賀は横浜まで九天軍追撃に出張ることを既定方針としており、江藤はあっさりそれを了承した。特に口喧嘩もなく、極めて円滑に会議は進行した。嵐の前の静けさとなるかもしれないが、南田もあの場で倉知の叛逆を暴露する必要はないと判断した。

しかし、南田には江藤の肚が読めなかった。阿賀を怒らせそんな事実は隠しつつ、好きなようにやらせる、その方針自体はわかる。しかし、阿賀の機甲化歩兵部隊が離れれば、猿之門基地の対テロ

戦能力は八割方失われてしまうのだ。九天軍は、少なくとも穂積克は、江藤を標的としていた。江藤は自ら鎧を脱いだ。風呂に入って鼻歌を歌うにはまだまだ早いというのに。

江藤の協力的な態度を訝ることなく、阿賀はさっそく出動の準備を進めている。小笠木もそろそろ門番の任を解かれ、自分の着備機とライフルを装甲兵員輸送車に搬入することになるだろう。

一方の江藤は、暢気なもので、第五実験棟まで将龍の実験の様子を見に行っている。将龍のコクピットを寝床にしてしまったゴン太のために、夜食を携えて。自分用の酒も荷物に忍ばせていたかもしれない。

南田と坂元は、これからようやく晩飯にありつくところである。もちろんアルコールは無し。士官用宿舎に運び込まれていたレーションをふたり分だけくすねたので、あとは詰所の給湯器で温かい飲み物でも淹れようと算段を立てている。ひとときの休息である。

江藤は再出撃を可能性としてしか語らないが、結局、それしか選択肢はないだろうと南田は考えていた。元老院からの要請が気に食わなくても、啓示軍に“ベルリンの壁”を作らせるわけにはいかない。暖炉の谷で起きた惨劇を、関東で再現させるわけにはいかないのだ。

そんなことを考えていると、無言のうちに詰所の手前まで来ていた。坂元もまた、何か考え事をしているようだったので、南田は安心する。それから、坂元が何を考えているのかが気になってきた。今日の坂元の様子はいつもと少し違う。暖炉の谷で、核弾頭の秘密を抱えていた頃に似ているように思える。だから心配になったのだ。

「何か気がかりでもあるのか」

坂元は立ち止まり、小さく笑った。

「苛々しているように見えるか」

「いや、九天軍幹部の首級を挙げた英雄にしては、浮かない顔だと思って」

「小笠木とたいして変わらないつもりだけどな。人殺しを褒めるなんて、ずいぶん変わったじゃないか、竜時」

皮肉屋なのは昔からだ。却って南田は安堵したが、しかし憂いを拭いきれたわけでもなかった。「生け捕りにできれば、それに越したことはなかっただろうけどさ。相手は宣戦布告もしていない。九天軍は正式な軍隊でもない。そんな奴らから身を守るために必要な措置を、責めるつもりはないよ」「正しいと思ってやったことが、実は重大な過ちかもしれない。そんな不安がなかなか拭えないだけだ。俺はもう、失敗はしたくないからな」

訓練時代からの付き合いだった久留が RAT の特務員だと見抜けず、その思惑に乗せられて動いてしまったことを、坂元はまだ悔いている。誰にも看破などできなかった、不可抗力だったと思う南田は、むしろ久留に翻意を促せるだけの人間関係を醸成できなかったことが残念だった。

「坂元は RAT を憎んでいるのか」

門宮に対する態度から、南田はそれを強く疑っていた。

「それは少し違うな。警備組織という表の顔は、全くの虚偽でもないだろう。だが築嶋という男は信用できない。門宮は、口では元老院がどうか言っているが、組織を放逐された可能性は捨てきれない。だから別の意味で信用できない。江藤少佐は失った力を RAT のような外部から取り込もうとしているが、うまくいくのかは疑問だ。まだ身内に、近衛軍に頭を下げて協力体制を整えるほ

うが妥当なんじゃないかと思う。でもそれは、あのおっさんのプライドが許さないのだろうな」

「江藤少佐は権威を嫌うからな。例外は自分だけ」

「だから議会派の尖兵として期待されながらも、勝手気ままにやってきた。おかげで軟禁もされたが、それでめげるガラじゃない。今頃議会派に尻尾を振る気にもならないだろう。元老院も嫌っている節があったが、さっきのは意外だった。最低でも話だけなら聞くということだろう、あれは」

「暖炉の谷では元老院派のマヒロフスキー大佐と共同戦線を実現したんだ。そう驚く程でもないだろう。ま、この非常時でなければ提案を歯牙にもかけなかったに違いないけど」

「それほど協力相手を渴望しているのかもしれない。しかし俺にはやはり、いいやり方とは思えない。組むなら北 ^{セヴェルメドヴェーチ}熊のほうがリスクが小さい。彼らは行動目的がはっきりしているからな。で、竜時、イルベチェフ大尉はどうした？」

「ああ、江藤少佐には簡単に話したが、大尉は福岡から直接原隊に戻った。ボスポラス作戦発動の報せを、俺たちは九州で聞いたんだ」

それは今朝のことだった。南田はイルベチェフやアダバ・ヨシダらとともに、強盗を働いた。追っていた鎧蜘蛛の死骸の一部を手に入れるためだ。在所を知らせてきたのは小嶺風沙 ^{こみねなぎさ} という協力者だったが、実際に現場に現れたのは、京都で別れたはずの門宮 ^{すずく} 洗 ^{すす} だった。

門宮の弁によれば、彼は南田たちに鎧蜘蛛の死骸を分け与えるために、いったん九州まで移動させ、そのうえで RAT ゆかりの施設をともに襲撃したのである。彼のボスがそう指示した、との談だが、真相はわからない。ただ RAT が一枚岩でないという門宮の言葉を信用するに足る体験を南田はしてきた。門宮は強盗に際して数人の RAT 職員を病院送りにしている。嫌々そうだったが、しかし手加減は感じられなかった。あれが RAT という組織 ^{おのの}の性質なのだと、南田は改めて慄かされた。

イルベチェフは奪取したサンプルの一部を受け取って、すぐにロシアへ飛んだ。イルベチェフは南田たちの気づかない方法でボスポラス作戦の発動を告知されており、出発間際に南田にその情報をリークしたのである。協力費として。イルベチェフの行動は素早かった。もともと期日がないことを承知の上で、鎧蜘蛛の死骸探索に加わっていたのかもしれない。その点を含め、イルベチェフは多くを語らなかった。

江藤と藤居によろしく ^{ことづて}という言伝と、残るサンプルを手 ^{すずく}に、南田は猿之門への帰路についた。門宮が九天軍の猿之門基地襲撃を予言したからである。江藤には暗号通信機で連絡を試みたが、送信は妨害された。それが他ならぬ猿之門基地の通信隊によるものだったとは、九天軍を撃退してはじめて判ったことだ。

「北熊は領地奪還が最優先か……。ダーダネルス作戦の二の舞にならいいけどな」

経緯を聞いた坂元は、協力者の当てが外れたという以上の難渋を示した。

「いくらなんでも、今回俺たちは派兵されないだろう。敵はむしろ目の前にいる」

「その目の前の敵が気がかりだ。亜細亜連邦軍主力はアラル海目指して進軍中といったところだろうが、啓示軍は前線から遠く離れたこの日本に、一個機兵戦隊を送り込んだ。どこかであった図式じゃないか」

「暖炉の谷と同じだな。あと、西フェルガナ基地に、タシケント」

「わかっているじゃないか。フルークゾルダートは交戦を避けたんだろう？ それは、また消滅砲や

“ベルリンの壁”を使うからかもしれない」

「それは俺たちも戦いながら考えていたよ。ただ、元老院派に焦りが無い現段階では、まだ慌てるほどじゃないという結論になった」

「でも門宮は泣きついてきた。近衛軍が動いていないのは、消滅砲や“壁”を恐れて逃げ出しているからかもしれないぞ。俺たちは元老院との交渉など待っている場合じゃない」

「だから出撃準備を整えろって、少佐も言っていただろう。ひとまず、もっと対空装備が必要だ。飛蝗型以外の龍にも、スレイプニルブースターを装備させたいし」

「敵は十機以上だ。対してこちらは全然定数に届いてない。まず味方を揃えることが先決だろう」

「通信さえ回復すれば、霞ヶ浦から藤居さんたちを呼び戻せる。うまくすれば向こうの防衛戦力と角龍が加えられるさ」

「角龍^{ジャオロン}の戦場管制システムが完成しているなら、他の龍の数倍の戦力価値があるだろう。たしかに強力な増援だ。だけど霞ヶ浦の部隊は誰が説得するんだ。指揮系統に則って協力要請をするなら、江藤少佐に動いてもらわないとどうにもならないぞ。今はダーダネルス作戦中とは違う。特別規定第一〇号発令下ではないんだ。段取りをよく考えなきゃいけない」

「じゃあ、俺が少佐に話してくる。坂元、飯の準備は頼むよ。あと、峰國^{フエングオ}にカフェオレを分けてくれるよう交渉してくれ」

「峰國ならいないぞ」

南田ははっとした。基地に戻ってから、一度も峰國の姿を見ていない。他にも姿を見かけない隊員はいたから、特に気にしていなかったが、基地がテロリストに襲われたという状況から考えてしかるべき可能性に対し、目を背けていたのかもしれない。

「まさか、九天軍の襲撃で」

「いいや、あのとき奴はもう基地にいなかった。奇跡的だが、黒龍隊から死者・重傷者は出ていない。奴はたぶん霞ヶ浦に行っている。勝手にな」

「どういうことだよ。あれは藤居さんと群山、あと紗耶ちゃんの三人だけの派遣だったろう」

「テストパイロット追加派遣の話があったらしい。峰國はそれが決定になる前に、勝手に出かけて行ったんだ。――というのは鷹山の状況分析だけだな。俺も詳しくは知らない」

「あそこの飯はうまいって噂だけど、あいつ、なんだってこんなときにそんなフリーダムなんだ」

将来は隊長となった南田の片腕として働くなどと、調子のいいことを言っていたくせに。

「江藤少佐の件は任せる。峰國のことも、少佐が何か知っているかもしれないな。隠し事の多いおっさんだ」

「たしかに秘密任務とか好きそうだな。わかった、聞いてみる」

「待て、竜時」

威勢よく踏み出したところに水を注されて、南田はたたらを踏んだ。

「なんだ、急ぐんじゃないのか」

「急ぐからだ。飯はあとにしよう」

「なんでだよ」

「俺は……」

坂元が何かを言いかけて、やめた。口を止めて体を動かしたのだ。

坂元は手を顔の前にかざし、士官用宿舎のほうを振り返っている。南田も同時に鏡像のポーズを取っていた。

「何だ、今の光は」

緊張を孕^{はら}んだ坂元の言葉に、密かに南田は首を傾げる。南田は、ただならぬ気配を感じて体が反応しただけだった。一秒未満の時間差で、見逃したらしい。

「どこだ、光ったのは？」

「よくわからなかった。とにかく強烈だった。見えなかったのか？」

「ああ」

「――倉知大佐が逃げ出したか」

言い終える間もなく坂元は駆け出す。

「秋月が見張っていたはずだ」

坂元の神経過敏ぶりに辟易しつつ、南田は、距離の離れていく背中に向かって叫ぶ。

「あいつはグルかもしれない。隊長は巧妙だよ。秋月を情報班の任務から外しつつ、倉知の逃走を手引きできるよう泳がせたんだ」

しゃべることで、スピードが落ちた。南田はその間に追いつき、^{はんぱく}反駁する。

「全部憶測じゃないか。もう少し人を信用しろよ」

「俺はもう間違えたくないと言った。だったら安全側に考えるのが上策だ」

それを言われると、否定できなくなる。事実、堅実な将校として信用を置いていた倉知は、私情によって基地と隊員の安全をないがしろにした。

ひとまず坂元の仮説に従って動こうと肚を決めて、南田は改めて問う。

「大佐が逃げたとして、どこから逃げたと思う」

「心当たりがある」

坂元は士官用宿舎に続く道を折れた。回り込むというわけでもない。

南田は理解した。坂元は、すでに倉知は宿舎から出たものとして行動しているのだった。南田もそれには異論がない。宿舎の門番をしていた小笠木たちは、中で倉知を拘禁していた事実を知らない。坂元の見た光を小笠木たちも目にしていたとしても、倉知を拘束しなければならない理由としては認識しないだろう。

坂元は迷わず基地の裏手へと入っていく。ゴン太の散歩当番のときでも近寄ったことのない、廃倉庫のほうへと。なるほど九天軍の一員が潜伏していてもおかしくなさそうだと南田は思った。

しかし、坂元が足を止めたその場所に、倉庫などなかった。

最初、南田は灯りが消えているせいで倉庫が見えないのだと思った。坂元がポケットから出した懐中電灯の光が、そこに瓦礫の山を照らし出し、南田ははじめてそこが九天軍との戦闘で破壊されたことを理解した。雑多な物が一緒くたに焼かれた臭いが、そよ風に乗って漂ってくる。火は見えない。赤外線カメラで覗けば、残熱を視覚化できそうだが、倉庫が木っ端微塵になってから一時間以上が経過しているのは疑いない。

「外れか」

瓦礫に光の輪を巡らせ、その積み重なり具合を入念に調べていた坂元が、肩を落としたようだった。「この地下に隠し通路があった。作ったのは昔の基地の人間だろうが、九天軍はここを侵入経路のひとつとして使っていた。倉知大佐が逃げたなら、ここだろうと思ったが……」

坂元は、別の逃走経路を考えている。一方で、南田は異なる思考をしていた。倉知が脱走したというのはやはり坂元の早合点だったのではないかと。

坂元は疲労がたまっているのだという仮説を立ててみる。そもそも、南田は坂元のいう強烈な光を見ていない。誰かの向けた懐中電灯の光が、一瞬だけ坂元の顔を直撃しただけのことかもしれない。基地内の照明はところどころ消えているから、出歩く隊員は少なからず懐中電灯を携行している。その偶然を、神経過敏になっている坂元が、奇妙な強い光だったと誤認したのだと考えられる。

南田は頭^{かぶり}を振った。それは現実逃避だと自覚していた。本当に強烈な光は見たのだと考えるほうが、現実的だった。昨日までなら、その発想を非現実的として一笑に付しただろう。しかし今は違う。坂元がその様子を人から聞いたかどうかはわからないが、南田はたしかにこの目で見た。穂積克^{まばゆ}が、眩い光のなかで消え去ったのを。その跡を検分したが、乗備機の足跡は往路分しかなく、光がただの目眩ましであったとは考えられない。

九天軍はどうやら時空跳躍を制御するバルムンクシステムを保有している。そこから推測するなら、倉知が脱走するのに地下通路などは不要だったことだろう。

「あのときの光と似ていなかったか？」

南田の質問を、坂元は過たず理解した。

「言われてみれば、近い気もする。——そうか。だとすれば、逃げたとは限らない」

坂元が何を想像したか、南田にもよくわかった。穂積克がさっそく第二波をしかけてきた可能性だ。

ふたりは士官用宿舎に取って返す。標的は江藤かもしれないし、情報を漏らすおそれのある倉知のほうかもしれない。江藤は第五実験棟に向かった頃だからすぐには捕まらない。したがって倉知の安全を確かめるのが優先事項となる。

前方で起こっているかもしれない喧騒をいち早く聞き取ろうと、意識を集中していた南田の聴覚に、断末魔の叫びのようなものが届いた。

「聞こえたか、今の」

「ああ。ゴン太か」

間違いない。横浜でも聞いたばかりの、最近では声量も莫迦にならなくなってきたゴン太の遠吠えである。

「第五実験棟だ」

今度は南田が先に行く。

緊張は半分が興奮へと変わっていた。まだ九天軍が時空跳躍を使って襲って来た可能性は捨てきれないが、士官用宿舎の周りに至っても、殺気立った気配が感じられない。

成果が出たのかもしれない。江藤が待ち望んだ実験の。

* * * * *

第五実験棟の外で、将龍が月を仰いで倒れている。初めて実機に乗って機体降着を行った訓練生

が、操作タイミングを誤ってもなかなかこうはならない。相当の勢いで落下したのか、将龍のまわりの地面は陥没気味で、接続されていたらしい配線類が切断されて散らばっている。まるで、巨人の子供が操り人形を手板から引きちぎり、気まぐれに地面に叩きつけたような構図だった。

「何事ですか」

すでにあらかた察していたが、南田は礼儀としてそれを尋ねた。

「実験は成功だ」

「実験は失敗だ」

技術者と研究者が異なる見解を示した。いずれにしても火急の事態ではない。北嶋も梶間も将龍を見つめて呆然と立ち尽くしているし、ゴン太はコクピットハッチの上に登って遠吠えを続けている。

「強い光を発していたようですが」

坂元の問いに、北嶋と梶間が揃って反応する。

「君にも見えたのか」

「そんな、ありえない」

言葉が重なって、ふたりは顔を見合わせる。

「お一人ずつお願いします」

南田は岡目八目の冷静さで割って入る。そうしなければまた同時に口を開きそうだった。

「まず、北嶋大尉。実験とは時空跳躍の再現ですか」

「そこまでは狙っていなかった。しかし、結果としてはそれに成功したんだ。将龍は一分間、ここから消えていた」

「いや、それは失敗と言うべきではないですか」結局、梶間は口を挟んでくる。「九天軍の残した回路図を再現し、シミュレートを行ったつもりが、予期しない出力を得てしまった。おそらく、九天軍がオリジナルのバルムンクシステムを作動させ、こちらのコピーが同期して作動したのではないのでしょうか」

「こちらがトリガーを引かないのに、勝手にシンクロした？ そんなことがありうるのですか」

「バルムンクシステムの同期現象は汎く見られる事例です。機兵もバルムンクフィールドを共有して通信を行ったり、出力を高めたりするでしょう。実はあれは、ジェネレータに使っているコアの同期性を利用したものですよ。コアが励起状態にさえあれば、あとは外部から制御可能です。尤も、九天軍もこちらでコピーが作成されているとは思っていなかったでしょうから、厳密には誰の制御も成立していません」

議論が始まりそうな気配を察し、南田は先手を打つ。

「偶然か必然かは、ひとまず置いておきましょう。まずは観測結果を確認させてください。将龍は一分間だけ消えていて、そして元の場所へ戻ったのですね」

「私の計測では、五十四秒でしたね。地球は自転も公転もしているし、太陽系や銀河系も絶対座標に固定されているわけではないのに、なかなか興味深い結果ですよ。北嶋大尉に見せて頂いた記録だけでは、なかなか信じがたい部分もありましたが……。こうしてこの目で見たからには、私は支持に回りますよ。いや、制御方法を究明したい。さっきのように偶然に消えたり現れたりするのでは、私はただの観測者でしかない」

九州で初めて会ったときに比べて、随分と口が回る。贖罪しよくざいの意識などよりも、単純な好奇心を動力源としているように見える。それを責めるつもりは南田にはない。

「その場に戻ったというのは、初めてのパターンじゃないのか」

坂元の指摘に、南田と北嶋は揃って頷く。ただ短時間消えるだけでは、制御できたとしてもあまり使い道がない。

「――さて、俺にはまだわからんが」

江藤の声がした。側頭部をさすりながらコクピットから出てくる。

「寝ていたような気分ですか、やっぱり」

過去の経験から、南田は尋ねる。江藤はこれまでに三回経験しているはずで、今を含めれば四回になる。慣れた分だけ、克明に語れそうなものだった。

「時間がずいぶん飛んだような感覚だ。電車を寝過ごしたような……。くそう、頭が痛いぞ」

「副作用か」

北嶋が、散らばった配線類を踏むのも省みず、将龍に駆け寄る。それより先に、遠吠えをやめたゴン太が江藤の肩のあたりに足場を移し、頬を舐める。

「たいしたことはない。――それよりも、だ。ここは本当に、俺がいた世界なんだろうな」

一瞬ぎょっとしたが、南田は笑うことにした。

「夢の見過ぎですよ」

「いや、飲み過ぎかもしれん」

江藤がげっぷをする。本当に酒を抱えてコクピットに入ったのだとしても、まだ酔いが回るには早過ぎる。十分も経っていないだろう。口臭が漂って来たように思うのは、きっと気のせいだと南田は自分に言い聞かせる。まさか横浜へ迎撃に出た頃から飲んでいたとは、さすがに考えたくない。「栄養ドリンクでも酔えるようになったとは初耳だ」

北嶋が、未だ心配そうな様子で江藤を見上げている。南田は別の意味で安堵した。

「うん、そういえば般若湯はんにかとうの服用は諦めたのだった。はて、するとこのポケットの中の重みは何だったか……」

言ったそばから、何かが江藤の足元に落ちた。ゴン太が飛びついて啜くわえ上げ、主人に差し出すが、南田からは死角になって見えなかった。

「おお、これだったか。偉いぞ、ゴン太」

ゴン太を撫でている間に、混濁していた江藤の意識はにわかに鮮明になったようだった。南田を睨んで大声を出す。

「竜時！ 将龍がシンクロして動作したということは、穂積が何かしでかしたはずだ。基地への侵入者をチェックしつつ、黒龍隊を第二大格納庫に集める。坂元は……」

「俺は阿賀少佐と同行したく思います」

「――ほう？」

「九天軍には借りがありますので。“ルート”に奴らが隠れているなら、きっちり返しておきたいのです」

さっき坂元が言いかけたのはこのことだったのだと、南田は理解した。指揮系統を無視した突飛な発想だが、機兵パイロットのほうが余剰である今、その選択肢は考慮に値する。しかし、江藤がどう判断するか。南田は江藤を見上げて言葉を待った。

「許可する。ただし、九天軍のバルムンクシステムを発見した場合は、その確保を最優先するように」「破壊ではなく？」

やる気満々の坂元は翻意を促したいようだったが、江藤は迷わなかった。

「確保だ」

「了解」

案外にすべて納得の行った様子で、坂元は恭しく敬礼する。南田にはふたりの合意内容を読み取れず、ふいに疎外感を覚える。

「隊長ー！」

大声で江藤を呼びいながら全力疾走で現れたのは、鷹山だった。

鷹山は儀礼用の制服を着ている。てっきり仮眠を取っているとばかり思っていた南田は首を傾げた。寝間着に着替えないとベッドに入らないのが鷹山の流儀だった。もちろん、寝ぐせ対策も欠かさない。

ここで歴史に刻まれるべき実験結果が出たことなど知らない鷹山は、自分こそ誰より重大な情報を携えているという顔で、息を整えるのももどかしそうに敬礼した。

「大変です」

「ご苦労だった。収穫はあったようだな。何だ？」

「極東方面軍の防空システムはダウンしています。現在は各拠点の設備がスタンドアロンで動いているだけで、おまけに大半がハードウェアにも被害を受けています。ICBMでも撃たれようものなら、東京も横浜もおしまいですよ」

ご苦労、と江藤は鷹揚おうように頷いたのち、実は鷹山には猿之門第一小学校の都市間基幹回線アクセスポイントを利用して情報収集に当たってもらったのだと、南田たちに概説する。まだ江藤を隊長とは知らず、箕輪みのわという名の怪しげな市民だと思わされていた、あの日の記憶が蘇る。

「バロログは拡大しているのか」

南田が聞くと、鷹山は首肯しゅこんした。

「東京からも横浜からも、情報が直接入って来ていない。テレビもラジオも、不確かな伝聞を垂れ流しているだけだ。ろくに整理もできないままな。ただそれでも、啓示軍の機兵が侵入していることは、知れ渡りつつあるみたいだ。目撃情報が飛び交っている」

「まずいな」坂元が唸る。「今は政府も戦略軍も情報統制をかける余裕が無い。市民がパニックに陥るぞ」

「今更遅い」江藤は一喝する。「パニック程度で済めば儲け物だろう。俺たちは最悪の事態を知っている。それだけは防ぐぞ」

「でも、それには航空戦力が」

「バロログが拡大している。航空戦力には期待できなくなったし、門宮の提案に乗っている時間も惜しい。俺たちでやるしかない」

「戦力不足が否めません。この際、霞ヶ浦の部隊と共同戦線を張れませんか」

「やめておけ。向こうには、おまえたちが京都に行くとき持たせたような暗号通信機はない。作戦会議は全部筒抜けになる。おそらく、内通者を介して啓示軍にも情報が伝わるだろう」

江藤は触れなかったが、昨日まで使っていた暗号通信機も、もう信頼はできない。出発の時、機材を手配したのは倉知だった。脅されていた倉知がどこまで積極的に九天軍に協力していたかは定かでないが、倉知の良心に信頼を置くというリスクを負う気にはなれない。もっと堅実な方法が適切だと南田は考えた。

「都市間基幹回線への接続さえ復旧すれば傍受の心配はないのではないですか」

「忘れるな、敵は九天軍とグルの可能性が高い。そして九天軍は横浜の地下で都市間基幹回線に細工をした前科がある。俺は、負ける賭けは好かん」

「他の部隊との連携は置いておくとしても、情報不足はどうにかしないとな」

外した眼鏡を拭きながら北嶋が言った。

「九天軍は、逃げ出すときに抜かりなく通信設備を破壊して行った。携行用の通信機では、基地の中しか相互通信できない。受信だけでもできればいいんだが、改造するには資材が足りないな」

「電気屋を叩き起したところで、ここいらの市販パーツではな。——あるいは、バロッグ拡大が九天軍の差し金なら、阿賀や坂元の頑張りでどうにかなるかもしれないが」

その先を口の中でごによごによとフェードアウトさせ、江藤は改めて命じる。

「竜時、集合完了次第、出られる戦力を全て引き連れて横浜へ向かえ。啓示軍にプレッシャーをかけるんだ」

「俺がですか!？」

南田は思わず叫んでいた。江藤が直接指揮できないなら、北嶋か藤居が仕切るのがこれまでのパターンだった。

「案ずるな、鷹山が補助する」

「俺がですか!？」

鷹山が、南田とは異なる感情を含めておうむ鸚鵡返しをする。

「ええい、うるさい奴らだ。何も玉砕しろとは言っていない。戦闘状態を継続させ、奴らの作戦を妨害しておればよいのだ。——坂元は、地下のほうを任せるぞ。わかっているな？」

「イエッサー。で、隊長は？」

「俺は将龍を復歸させてから追いかける。シュヴァルツパンター黒豹とやらは、俺が『黒』の称号をかけて勝負するのが筋だからな。そのために、整備状態は万全としたい。が、人手はたいして要らん。俺と北嶋とセンセイ、あと整備班員が四人もいればいい」

北嶋は、打ち合わせも何もなかったはずだが、三人の少尉たちに大丈夫だという視線を送っている。梶間だけが事態の展開に追いつけずまごついていた。

検討してみて、南田はそれなりに合理的な作戦であることを認めた。基地にいる限り、情報が入るのは遅れ、必然的に啓示軍への対応は後手後手となる。元老院派の動きもわからない。椰枝のいる猿之門を離れるのは後ろ髪を引かれる思いだが、我慢である。せいぜいが今夜限りの勝負となる。啓示軍のほうが、それ以上は待てないだろう。

南田は復唱しようとして、気づいた。

「江藤少佐、それでは守りががら空きになります。穂積の罠だったらどうするんです。行くなら一斉にここを空き家にするべきです」

「善は急げだ、遅延は認めん。一案ずるな。こちとらホームグラウンドだぞ。罠を仕掛けるなら断然こっちが有利だ」

自信満々にそう言われてしまうと、南田も、腹を括るしかなかった。

午前零時。南田は龍飛蝗型を駆り、黒龍隊四十名余を率いて猿之門基地を出立した。

整備班も連れての移動は、ダーダネルス作戦に参加し大陸を放浪していたとき以来である。そして目指す敵は、やはりダーダネルス作戦で因縁のある E6^{エーゼクス}。

南田は懐中時計の螺子^{ねじ}を巻く。明日もまた動き続けるように。フィリップ・リーから椰枝とともに託されたそれは、心拍にも似た心地良い機械音を奏で、主に落ち着きをもたらす。

長い夜になりそうだった。

五

横浜は、八月の悪夢で壊滅的打撃を被ったのち、新世代中枢都市計画のモデルケースとして再開された経緯を持つ。ブルーシティと名付けられた中央街区には最新の建築技術と各種のインフラが盛り込まれ、未来都市として喧伝された。特に、復興と発展のシンボルとして聳え立つ多目的超々高層建築「ブルーアイズ」は、完工から十年が過ぎた今でも城塞^{ごと}の如き威容を保っており、横浜を訪れた人々はこの未来的都市空間を見てほぼ例外なく感嘆する。

一方、整備計画から漏れた周辺の街区は、二十年前の面影を強く残している。高層建築や次世代型のインフラは殆ど見当たらず、見栄えも機能も洗練されていない。いかにも雑然としているのだ。それは亜連の莫大な予算を注ぎ込まれた中心地の復興に乗り遅れまいと、辺縁部の事業者が計画もそこそこに拙速で再建を進めた結果である。同業者ごとの連携もなく、ともすれば建設事業者の奪い合いすら起こしてきた彼らだが、ある点においては見事な一致を見せていた。それは、横浜を元に戻すという目的意識。旧態を切り捨てつつ新生を図ったブルーシティとは、根本思想が異なっていた。

しかし、街は彼らの思惑から少し外れ、全くの元通りにはならなかった。世界各地から出稼ぎ労働者——彼らの多くは難民、いわゆる九九年組^{ナインティナイナーズ}であった——が流入し、それぞれの国柄を反映した商店が目立つようになった。駅前を埋め尽くす看板の文字は、日英中韓に加えロシア語でも記されるようになった。

良きにつけ悪きにつけ、そうした変容について意識的なのは三十代以上の住民だった。若者にとっては、中央のブルーシティとこの雑然とした一帯との両方が合わせて横浜なのであり、八月の悪夢以前の横浜の空気など知りもしないのだから、比較のしようがない。嘆く必要も、中央政府の都市計画に感謝する衝動もない。不満を抱える層の一部が反体制組織を結成して小火^{ぼや}ていどのテロを行うことはあっても、それが汎く支持を得ることはなく、体制の脅威ではなかった。軍の治安維持部隊や警察が練度維持のために利用しているくらいであり、市民は与えられた平和の水準におおむね満足していた。

八月の悪夢直後に生まれ、物心ついたときにはすでに復興の道筋がついていた世代である坂元には、横浜の外れといえはやはり治安維持任務の演習地としてのイメージが強い。士官学校時代、学生で班を組んで街を歩き、ここでテロが起きるとすればどのようなシーンが想定されるかについてレポートを提出する講義があった。半分は、息抜きであったのだが、しかし教官の御船は常以上に厳しい採点をした。彼に採点された同期生の過半数は補習を受けさせられた。それは、休日の自由時間中に突如として襲われ、臭い玉を投げつけられるという内容だった。外出中に食らった者もいる。鷹山がそうだった。同じ日に、鷹山は交際半年の彼女に振られた。因果関係はわからないが、ともかく常以上に髪を爆発させてベッドに伸びた親友の姿は無残だった。

坂元は補習を免れた。人ごみに紛れた若手教官のひとりに気づき、その教官が坂元とは別の道を歩いている学生をウォッチしているのを認めると、これを背後から急襲して口を塞ぎ、御船の所まで連行したのである。レポートと別に加算される特別点のおかげで、坂元は上位の成績を収めた。

だが、トップではなかった。伝説として残るほどの武勇ではない。江藤とその同期生たちには及ばない。

そのような差を、これまで坂元は齒痒く思っていたが、もうその劣等感は消えていた。江藤は特殊なのだ。それがわかった。特異なサンプルと自分を比較したところで意味はない。所属している母集団が異なる。そして、一見優位そうに見える特異性が、実は毎度毎度プラスに働くわけでは決して無いことを、坂元はよく理解していた。

江藤は変則領域を感知している。それは間違いない。そして九天軍にも同じ力を持つ者が、あるいはそれを代替する装置が、存在する。後者の存在を先に公知にしておかなければ、江藤が九天軍に通じた謀反人とされかねない。ただでさえ、基地の副司令を拘禁するといった暴挙に及んでいるのだ。元老院派が虎視眈々と黒龍隊の追い落としを狙っているなか、そのようなスキャンダルは黒龍隊存亡に関わる大事である。だから坂元は志願した。“ルート”内に潜伏しているらしい、九天軍への攻撃に。他の隊員は気づいていない。知らせればどんな軽拳妄動に及ぶかわかったものではない。独りで片付けるのが上策というものだった。――そしてこれは坂元個人の問題でもあった。自分を騙し、蒼天を討ち取らせたあの娘、亜璃亜を、坂元は許せない。その意味でも、鷹山たちを巻き込むわけにはいかない。

利用されていると知る由もなく、阿賀は、装甲兵員輸送車の中で着備機を軽々と着こなす坂元の様子を見て満足していた。

阿賀の号令で装甲兵員輸送車の後の扉が観音開きになり、機械を装着しているとは思えない、生身よりもむしろ素早い動きで隊員たちが路上へ展開する。黒龍隊本隊はまだ到着しておらず、近衛軍が迎撃を再開しているわけでもなく、E6はまだ燃料も体力も残して空を制している。

E6のフルークゾルダートがまだ滞空できているのは、ブルーアイズの上層部を枝変わりに、交替で羽休めを行っているからだった。上層部には代行執政府のオフィスなどがあり、それを人質に取られている恰好で、休息中の機体を地上から狙撃する試みは実行に移されていない。歩兵を中から上らせて、職員らの安全を確保しつつE6をブルーアイズから追い払う作戦が進められている。

以上は、近距離の無線や昔ながらの伝令によってもたらされた情報である。これから地下に潜る坂元たちにはそれらの情報が入らなくなるため、上妻以下八名の分隊をこの装甲兵員輸送車とともに

に残して、引き続き情報収集を行ってもらおう。坂元の傍らには、上妻と連絡を取るための長大な通信ケーブルのロールを抱えた兵士がいる。外径十ミリを超える頑丈そうなケーブルだが、地下で戦闘ともなれば、無事とは限らない。したがって、上妻が行うのはあくまで情報収集と伝達であり、指揮を執るのは阿賀である。

普段は全体を俯瞰できる配置で指揮を執るという話だが、今夜の阿賀は自らも着備機イダテンを身につけていた。文字通りに先陣を切って突入する意気込みを周囲に発するそのさまは、およそ坂元の知る阿賀とは異なっていた。部下を失った阿賀の静かな闘志が燃えているのだ。

対物ライフルの最終点検を済ませた阿賀は、例外なくイダテンを装備した二ダースの機甲化歩兵を前に、夜空を衝くブルーアイズを背にして、状況開始を宣言した。

作戦は簡単である。

まずは数ある“ルート”への進入経路のうち、人が通り抜けられるだけの狭い道、そしてハイテク通信網とは縁のない、暗い場所を選んで突入する。これは、九天軍が“ルート”内のインフラを掌握していると想定しての選択である。また同時に、阿賀がほぼ独断――江藤との相談は指揮系統の遵守に何ら寄与しない――でこの作戦を遂行しており、援軍が見込めないことを意味している。

“ルート”に入り込めたら、捕虜に吐かせた位置に向かって速やかに移動する。監視網に引っかかるうがお構い無く、機甲化歩兵の機動力と火力にものを言わせて一気に九天軍を制圧し、囚われの穂積少将を救出する。テロリストが少将を盾とした場合には、撃つか否かの判断をその場で阿賀が下す。そのため陣頭指揮でもあるのだ。また、その場の九天軍を掃討しても肝心の少将が見つからない場合には、再び捕虜を取って尋問することになる。阿賀たちにとってはお決まりのパターンらしく、若手にも迷いが無い。

上妻たち地上班と別れ、坂元はケーブルの取り回しを片手で手伝いながら、暗い地下への階段を駆け下りる。

地下に入れば、上空の啓示軍機オフエンバーレナのジェット音などすぐに聞こえなくなった。ブルーラインの整備用通路から分岐している進入口だけに、普段なら地下鉄車輛の行き交う音と振動が伝わる騒々しい空間であるはずだが、今宵はもう終電時刻を過ぎている。もっとも、終電が平常通り運行されたかどうかは定かではなかったが。

二十人余の機甲化歩兵は、ドブネズミ一匹も見かけることなく、捕虜に吐かせた九天軍の潜伏場所へと到着した。そこはもぬけの殻だったが、たしかに十人以上の人間が寝泊りをしていた形跡があった。

「引き払って三日にはなるかと」

部屋中を検分していた橋谷はしやが戻って来て、阿賀に報告する。

「攻撃を前に、アジトを捨てたか。しかし、部屋は複数を用意していたはずだ。他の拠点をとどる手がかりを探せ」

橋谷が敬礼もそこそこに探索を再開する。坂元は、橋谷に替わって阿賀に近づき耳打ちした。「九天軍は猿之門の民家にもアジトを持っていました。RATラットがそれを突き止めて襲ったのを、俺はこの目で見ています。RATは“ルート”内の九天軍の所在についても、ある程度情報を持っているかも知れません」

RAT がテロリスト鎮圧に注力するという門宮の話を、坂元は半分も信用していない。そして、門宮が江藤に持ちかけた取引についてここで打ち明けるほど、阿賀を信じているわけでもない。ただ、RAT が故意に九天軍を泳がせているのであれば、勝手にその根城を荒らす坂元たちは RAT の妨害に遭うはずであり、それを阿賀に^{ほの}仄めかしさえできればよかった。あとは、阿賀が経験に基づいて適切に行動してくれ、無為にここで時間を浪費することにはなるまいという推測があった。

「RAT の動きは上妻に監視させている。仕事柄、パイプの数本くらいはある」

阿賀は自慢するでもなく淡々と説明する。RAT との作戦の重複は無益であり、そして、RAT が“ルート”内での阿賀たちの自由な行動を許さない可能性もとうに検討済みであると。

「一戦交えることもありうる？」

「愚の骨頂だ。敵は啓示軍であり、テロリストだ。RAT との衝突は避ける。同時に我々の目的は必ず達成する。それがタスクだ」

「――了解」

坂元が引き下がり、慣れない調査に加わろうとしたときだった。阿賀の部下がまたひとりやって来て、坂元を一瞥し、阿賀に視線で判断を求めた。

「構わん、何だ」

「ブルーアイズ両塔の中階層以上随所で、銃撃戦が始まった模様。警察筋の情報によれば、エデン系過激派の合同テロである可能性が高いとのこと。ただし、警察はまだ突入命令を出しておらず、銃撃戦の大部分は当事者が不明です」

「仲間割れとは考えにくい。となると、RAT が動いたか。早いな」

「では、我々も地上に戻り加勢を？」

「いや、ブルーアイズの^{そうじょう}騷擾は陽動と判断する。穂積少将の救出は、地上ではできまい」

しかし、と坂元は心中で反駁する。広大な地下通路網のどこに人質が隠されているか、その手がかりもないのだ。阿賀は上妻との連絡を絶やすなど部下に命じ、ひとまずは近傍の部屋の探索に移る。

不承不承あとに続きながら、坂元は、築嶋と桃源協の源紅麗葉のことを思い出していた。桃源協を利用すれば、築嶋の動向を探ることも不可能ではない。築嶋は亜璃亜に対して容赦がなかったが、紅麗葉に正体が露見したあとの態度からすれば、本来的には情で動くタイプに違いなかった。ただ、情をかける対象から亜璃亜が――九天軍のテロリストで札付きの殺人犯が――外れていただけのことだ。紅麗葉にうまく話を通し、桃源協が九天軍に襲われているとでも演技をしてもらえば、釣り出せるかもしれない。しかし、時間の限られたこの状況では、現実的方策として設定しにくい。

良い思いつきではなかったが、誘き出すという観点は悪くないと坂元は考えた。江藤も穂積少将を餌にして娘の克を誘い出そうとしていた。少将はすでに九天軍の手中にあるが、これに並ぶ餌を用意することはできるかもしれない。

例えば、江藤博照。

坂元はそのアイデアを打ち出した。江藤は餌として強力な誘引力を持つはずだが、しかしこれを獲物に食い逃げされては元も子もなくなる。現在の黒龍隊は、まだ実力を以て存在を誇示できていない。体制にとって不可欠な存在だと周囲に認めさせられていないのだ。それを成し遂げるのは江藤かもしれないし、あとを継いだ世代かもしれない。いずれにせよ、今ではない。

人身御供^{ごくう}が必要だった。RAT なり九天軍を誘うための、知名度と影響力を有する何者かが。そして坂元にとっては失っても惜しくはない、そんな人間が。

知っている顔を次々に照会し、やがて坂元はこれぞという人物に行き当たる。何を馬鹿なことを考えているのだと初めは自嘲し、しかし数秒後には本格的な検討に移っていた。そしてふと気づく。坂元よりも有利な情報環境にあり、このアイデアに先行して到達した者がいたのではないかと。

坂元は駆け出したい衝動に駆られた。踏みとどまったつもりだったが、足の筋肉の躍動を察知したイダテンは、先読みをしてアクチュエータを作動させ、坂元の足を前に出させる。

「どうした、坂元少尉」

近くにいた年上の少尉が坂元の挙動不審に気づいて声をかける。対物ライフルではなく自動小銃を装備したその少尉は、おそらく意を決してから二秒以内に坂元の脳天を撃ちぬく能力を持っている。機甲化歩兵に頭でっかちのぶきちょエリート士官はいない。例外なく、状況判断能力と同等に高い戦闘能力を身につけている。

坂元は注意深く、着慣れない着備機を装着して歩きまわったので少し疲れただけだと説明して、五分だけ休憩をもらうことにした。実際には坂元の体はまだ休息を要していなかったが、考えを整理する時間は欲しかった。そしてなにより、不穏な人物としてマークされるわけにはいかなかった。阿賀の部隊では、黒龍隊が暖炉の谷で何をしていたのか、殆ど知られていない。戦略軍の情報操作も、黒龍隊の隠蔽工作も、どちらも第三者には有効に働き続けているのだ。それゆえに、伝染病で集団凶気に陥ったという風説を信じている者も、まだ残っているに違いない。

機甲化歩兵たちは九天軍の足跡や遺留物を丹念に探している。もしかするとそれは無益な苦労かもしれないと坂元は思った。九天軍が時空跳躍をコントロールしているとすれば、この地下から地上のどこかへと一息に移動可能なのだ。そのうえ、今この時点ではどこを探しても見つからないかもしれない。事実、坂元は時空跳躍ののち時計を半月以上ずらさねばならなかった。九天軍がそこまでの制御に成功している可能性は捨てきれない。啓示軍を呼び寄せておいて、自分たちは文字通りに姿を消して日本の陥落を待つ、そんな作戦だとも考えられる。

しかし、坂元の危惧は現実のものとはならなかった。橋谷が足元の痕跡から九天軍の移動方向を割り出し、阿賀は移動命令を下した。坂元は九天軍が強力な手札をまた一枚加えているという悪夢を抱きながら、黙って後ろのほうを歩く。

一行はさらに数階分を下った。途中、イダテンを装備したままでは渋滞^{あいろ}する隘路を通過したが、行き着いた先は、自動車や乗備機乙種が通れるほどの大通路だった。灯りはなかったが、照明設備の痕跡はあった。過日九天軍の仕掛けた罠で焼けたようだった。結露した水の^{したた}滴る音は響いているが、生き物の足音は聞こえない。坂元は、世界戦争の果てに荒廃した未来の横浜を見ているような錯覚に囚われた。物々しく武装した、ともすればアンドロイドにも見える一団が目指す先に、果たして幸福は待っているのか。

不意に、行列が進行を停止した。誰の号令もなかったが、ぶつかる者は皆無だった。皆、一斉に射撃体勢を取っている。坂元は遅れて対物ライフルを構える。前を歩く兵士にライフルの先端をぶつけないよう、注意しながら。

「タンマ！ 俺、味方！」

前方の暗闇のなかに人がいた。あるいは、人の言葉を話す何かが。

「^{リーフエングオ}李峰國か！」

正解を悟った坂元は、両手を上げて近づいてくる人物の顔かたちを暗視ゴーグルで確かめた。峰國によく似た兄弟でもない限り、本物だと断言できる。

「こんなところで何をしている」

阿賀が問う。その声が警戒心に満ちて響いたためだろう、峰國に向けられた銃口はひとつも下ろされない。

「何って、九天軍のアジト探しですよ。通りすがりの市民から、奴らがこっちのほうに逃げ込んだっていう有力情報を得たんで」

峰國は自分の背後を指さした。その先に焦点を移すと、どうやら二つの人影がある。私服の男女だ。男のほうが微かな光源を持っており、暗視ゴーグルで増幅された輝きをもってすれば、彼らの容貌まで見て取ることができる。しかし、坂元の知っている人間ではなかった。

「軍の方々ですか」

女の声がした。声量はか細いが、決して弱々しい口調ではない。

「近衛軍第三二歩兵連隊、第七中隊中隊長、阿賀です」

対物ライフルを下ろした阿賀が進み出て名乗る。女はお辞儀を返し、隣で突っ立ったままの男に蹴りを入れて、同じようにお辞儀させる。

「私は右院議員桜小路慶多の秘書で、阿納と申します」

「真理さんと同じく、右院議員の野崎托塔の秘書、野崎兜跋だ」

峰國が連れていた男女が自己紹介をし、一行はどよめいた。桜小路、野崎ともに、先日の九天軍のテロで被害に遭った右院議員である。そして、阿賀は野崎兜跋という青年そのものを知っていた。

「あの日以来ですね、野崎さん」

「ああ、どこかで見た顔だな。俺たちをなかなか救出できなかった将校連中のひとりか」

兜跋は流暢に悪態をつく。黒龍隊隊員は阿賀の怒声や鉄拳制裁を経験しているので、決してこんな口は利かないところだ。

「九天軍の居場所について情報があつたなら、まず我々に伝えてもらったほうがよかった。自分たちで乗り込むなどんでもない。いいですね、九天軍の気まぐれに何度も期待しないほうがいい。彼らが時として非武装の人間を無造作に殺すことを、あなた方は間近で見知っているはずだ」

「言われなくても分かっているさ。だから俺も一度は止めたんだ。しかし真理さんがどうしてもとね。それで俺が……」

「ではなく、動かなくなった車の前で揉めている私たちを見つけた通りすがりの李少尉が、事情を聞いてここまでエスコートしてくれたのです」

「えっへん」

胸を張る峰國のほうへと、坂元は歩み出た。

「峰國、なぜ横浜にいた。おまえは霞ヶ浦に行ったはずだよな。それも命令無視の勇み足、いや勇み腹だったようだが……。まあ、それはひとまずいい。藤居准尉たちとは合流しなかったのか」

「藤居准尉とは会ったよ。――ままま、内輪の話はあとで。それより急ぐみたいだからさ」

「そのとおりだ」兜跋が威厳を装って追従する。「どうやら九天軍はとんでもないことをしでかそうとしているらしい」

「口調の割には、内容がフワフワしていますね、野崎さん」

「うるさい、無能な軍人め。あんたらは、啓示軍が亜連内部のテロリストを利用したと思っ込んでいるんだらうが、実態は逆だ。テロリストのほうが啓示軍を利用しているんだ。空のフルークゾルダートは囷なんだよ。それなのに、なんだ、地下に割り振った戦力はたったこれだけなのか？」

「黙って」阿納真理が兜跋の額を叩いた。「阿賀少佐、是非ともお力添え頂きたいのです。九天軍はこれまでになかった特別なバルムンクシステムを作動させようとしています」

「もとより九天軍の捕縛が目的です。お任せください。そして、秘書のお二人は速やかに安全な場所へ。私たちの後ろに続いている通信ケーブルを辿れば、地上で部下が布陣しています」

阿賀があくまで軍人以外を追い払おうとすると、兜跋がわざとらしく肩を竦めた。

「おいおい、空襲を許しておいて、どこが安全だと……。痛い、痛いよ、真理さん。ヒールだったら骨が折れたところだ」

兜跋がうずくまり、再び真理が頭を垂れる。

「失礼を致しました。ですが、これも的外れなことを言っているわけではありません。九天軍が装置を作動させれば、どこにいても同じかもしれません。であれば、少しでも早く彼らを発見するお手伝いをさせて欲しいのです。それがいちばんの安全策でしょう」

「居場所がわかると？」

「ええ。ですが厳密には少し違います。装置の在り処なら案内できます」

「拉致された際にその場所をご覧になったということですか」

「そう捉えて頂いて構いません。阿賀少佐、どうかご決断を。こうしている時間も惜しいのです」

頭に血を昇らせたのか、真理が不意に左手で側頭部を押さえる。

「大丈夫ですか。やはり、九天軍は我々で探します。李少尉、おふたりを上までお連れできるか？」

「お任せあれ。九天軍をとっちめたあとなら、いつだって。でも、その前ってのは残念ながら無理です」

峰國が手懐けられた犬の如き忠誠心を見せる。坂元は、峰國が珍しく我を通そうとする理由がわかる気がした。阿賀にはわかるまい、とも。これは黒龍隊の問題なのだから。

「阿賀少佐、私と李だけででも、阿納さんを連れて奥へ行きます」

坂元は黒龍隊の身分を盾にして慎重な阿賀の背中を押す作戦に出た。

しかし、阿賀も頑として折れない。

「貴様らは、安全が保証できているのか？ 増長も甚だしい。――橋谷伍長、四人を地上まで連れて行け」

「了解、と言いたいところですが」

橋谷はそこで小さく舌打ちを挟んだ。その手は可搬型通信機に繋がるレシーバを握っている。

「上から妙な連絡が。急にバログ濃度が上昇し、現在、視界不良の状態。おまけにエデンが乗備機を投入したらしいって未確認情報も。警察と近衛軍が応戦中」

「どういうことだ。それだけのバロッグならば、乗備機は稼働不能のはず」

「九天軍の新兵器ってところでしょうかね。とにかく、上はてんでこ舞いらしく、ろくに応答がない。隊長、一旦戻りますかい？」

「いや。バロッグがそこまで濃くなれば、電池駆動の着備機^{おぼつか}として作動が覚束無い。上妻たちに地下への退避を勧告しろ。こちらは先に進む。——道案内、お願いします」

「そうこなくっちゃ」

峰國が短機関銃を両手で抱え、勇んで先頭に立つ。が、それを真理が呼び止めた。

「そちらではありません、李少尉。そこの角を左に」

「いや、俺はこっちで食い止めないと」

そこにいた大半がきょとんとした。しかし、機甲化歩兵のうち数人は、迫り来る異音を察知して即座に狙撃体勢を取った。坂元は遅まきにして暗視ゴーグルで通路の奥を探る。

——何か猪突猛進してくる。

乗備機乙種かと最初は思った。サイズとしてはその程度だったし、手足のような影も見て取れた。しかし、足が速い。乗備機は一般に歩行のみで走行はできない。踏み出した足が接地するまで、反対の足は荷重を支え続けなければならないのだ。響いて来る足音は、とてもそんな長閑^{のどか}な速度ではない。「なんだ、なんだ、あれは！」

誰かが叫んだ。口を開かなかった残り大部分の兵士たちも我が目を疑っているに違いない。

それは巨大な虫だった。甲虫と蜘蛛を掛けあわせたような禍々しいシルエット。うっすらと光る器官が、頭や肩に散らばっている。——それは人の上半身に近しい部分も持っているのだ。

坂元もまた驚いていたが、パニックに陥ることはなかった。それは暖炉の谷に現れた化物と明らかに同種の個体だった。鎧蜘蛛と名付けたのは、誰だったか。

「頭を潰せ！」

坂元は、状況を飲み込めずにいる機甲化歩兵たちにそう指示すると、誰より早く対物ライフルの引き金を引いていた。ろくに狙っていなかったその一撃は鎧蜘蛛の背後の天井を穿ったが、化物は脇目もふらず突進してくる。すでに攻撃対象と認定されているのだ。

阿賀の号令が下った。鎧蜘蛛との距離は五十メートルを切っていたが、次々に撃ち込まれた大小の弾丸が、鎧蜘蛛の持っていた前進の意思と運動量とを木っ端微塵に打ち砕いていく。ガスと繊維質とを撒き散らし、ほどなくそれは死体と化した。

兜跋の足元に鎧蜘蛛の頭だけが転がってくる。兜跋は悲鳴を上げなかったが、尻餅をついたまま後ずさりするばかり。峰國が笑って、短機関銃でその物体を撃ち抜く。瞳^{おぼ}と思しき部分から、琥珀にも似た朧^{おぼろ}な光が消えていく。銃声の残響が消え去ると、大勢の男の荒い息遣いが聞こえ始めた。

「なんだ、これは。貴様らは知っているのか」

阿賀が峰國と坂元を交互に見ながら尋ねる。坂元はここぞとばかりに言ってやった。

「おや、これが見えるということは、皆さんにもようやく精神病がうつったようですね」

オフェンバーレナ
啓示軍第六機兵戦隊隊長、ケーシャ・スラント中尉は快哉を叫んだ。

眼下の街がゆっくりと、しかし疎漏なく霧に覆われていく。その起点となっているのが、彼女らの足元に屹立している二連の高層ビル、ブルーアイズである。すでにそこから半径五キロの円内が、熱粒子砲や電離砲の作動時と同等の絶対バルムンク反応を示す、高濃度バロログに置換されている。そこではもはや、玩具のモータの駆動すら、信頼を置けない。バルムンクフィールドジェネレータなくしては、文明の巻き戻しを迫られる領域である。

変則領域多発地域である日本では、この二十年余で様々な対策が取られた。特に横浜のような大都市では、市民の生活と産業活動をできる限り維持するため、あちこちにBFGが設置され、警報発令を受けて自動で作動する仕組みになっている。

ただし、送電網が機能しないこれほどのバロログとなると、BFGの作動時間も自家発電の燃料や二次電池、キャパシタの容量に制限される。丸一日もすれば、ブルーシティと呼ばれる横浜中心部の高度なインフラは、その機能を失い形骸と化す。そしてその頃には、白い闇が関東地域一帯を覆っている計算になる。

その計算をしたのは、啓示軍基幹部隊である。四ヵ月前、中央アジアでの一連の作戦がそうであったように、今回もケーシャ麾下のE6は重要な役割を基幹部隊から与えられている。そのために、部隊の全機を飛行仕様のフルークゾルダートに換装もされている。鉄の巨人に巡航飛行を可能とさせたこの重装備形態は、決して安い投資ではない。これはそのまま、基幹部隊がこの作戦に寄せる期待の大きさを物語っていると、ケーシャは考えている。

E6の目標は、変則領域のコントロールにより日本の中枢機能を麻痺させ、そしてここにある種のポートを建設することにある。ベルリンと横浜とを結ぶ見えない通路を作るのだ。暖炉の谷からベルリンまで一瞬で移動したあのようなときに、それは啓示軍の最先端技術が可能とするところである。奇蹟ではなく技術であれば、当然、仕様に合う条件を整える必要がある。それをE6がやるのだ。

しかし当然、E6がここまでやって来るのには数々の困難が存在した。でなければとうにこの作戦は実施され、亜細亜連邦はユーラシア大陸の東西から挟撃されて敗色濃厚となっていただろう。

現実は大きく違っている。北米、ユーラシア大陸の双方で連合軍に敗北を喫し、啓示軍が人々に道を示してやれる領域は、往時より確実に減少する傾向にある。深く敵地に進入する今回のような作戦は日に日に困難さが増しているのだ。

そんななかで、E6を扶けたものは大きくふたつある。亜細亜連邦軍の防空システムを直前に破壊した反体制過激派組織、九天軍と、E6の進路を保護するように発生したバロログである。特に、後者は予定になかった僥倖である。

バロログは一般に地表付近にしか滞留しない。地下と高空で定在するのは稀であり、特定地域に偏る傾向がある。横浜を含め、関東にはそのような特殊な例はなかった。だから、ケーシャらが関東に入ったとき、付近の空域に広くバロログが発生していたのは天啓と思えた。九天軍の内応で防空網が無力化されるとは聞いていても、バロログのあるのとないのでは、安心感が全く異なる。

ケーシャはこの一件を以て、九天軍という取引相手を本当に信用することにした。基幹部隊からは九天軍の協力を前提とした作戦を仰せつかっていたものの、実のところケーシャは、E6が半数の

損失を被^{こうむ}ろうとも独力で目標を達成する意気込みでいた。しかし蓋を開けてみれば、九天軍は見事に亜細亜連邦軍の防空網を無力化し、E6は一機も欠けることなく関東上空へ到達した。さらに、近衛軍の反抗も極めて限定的で、E6は東京と横浜でのバルムンクシステムの構築作業を予定より早く完了できた。

基幹部隊は近衛軍の妨害をもっと激しいものと予想していた。核弾頭を使用されるおそれもあるとケーシャは言われていたのだ。現実には、通常弾頭のミサイルすらろくに飛んでこない。ブルーアイズを盾にとっているとはいえ、亜細亜連邦が暖炉の谷で迎えた危機を正しく理解しているなら、リスクを承知のうえで攻撃に踏み切るのがむしろ正常な判断だとケーシャにも思えた。

啓示軍の撤退に満足し教訓を得ようとしなかった怠惰なのか、脅威を理解しつつも目の前の犠牲に躊躇している腑抜けなのか、いずれにせよケーシャからすれば唾棄^{だき}すべき態度である。そんな連中は啓示軍に加わる価値はない。ケーシャが見限った祖国の軍隊と同様、この世界規模の改革のなかで淘汰されるべき存在である。やがて亜連が降ったとき、彼らが残っているのは害悪であるが、しかし、出てこないのでは討伐もできない。

隊の安全が保たれている一方で、ケーシャは倒すべき敵が表に出てこないというフラストレーションに苛まれていた。半日に亘^{わた}る機兵操縦のもとらす疲労をごまかし、肉体と精神を十全に機能させて作戦を成功に導くためには、闘争心の維持こそがケーシャ・スラントにとっての特効薬なのだ。だから、ブルーアイズを中心に広がっていくバロッグの波を超えて接近してくる敵機の編隊とミサイルらしき飛翔体を感じたとき、ケーシャは二度目の咆吼を上げたのだ。

赤外線感知で追尾してくる空対空ミサイルの群れに対し、ケーシャは愛機シュヴァルツパンターの両脚側面から多数のフレアを放出。続けて右腕の熱粒子砲を真正面に向けて一発放ち、部下たちへの応戦許可の合図に代える。ミサイルの一発が熱粒子砲に吸い寄せられて夜空に華を咲かせ、次いで走った火線がまたふたつのミサイルを射抜く。見れば、ブラームスの率いる三機編隊が、斜め上方に占位して迎撃と攪乱を始めている。

ケーシャは目標を前方に見定めた。シュヴァルツパンターがブルーアイズの屋上を蹴って宙に身を躍らせ、変則領域制御によって揚力を生み出す科学の翼が、重い機体を飛翔させる。

敵は速度からして戦闘ヘリコプターと推定できた。バロッグを避けて飛んできたのだろう。低空に追い込めれば、BFGに守られる機兵が圧倒的に優位となる。その追い込み役はブラームスが負ってくれている。ケーシャは、獲物を直接牙にかければよい。

まず熱粒子砲で一機を撃ち落とした。空中で熱粒子砲を放てるという認識を敵は持っていなかったらしく、残りの敵機が慌てて散開する。

しかし、横腹を見せたのはいかにも甘かった。ケーシャの追撃に翻弄され、回避の余裕をなくしたところで、部下のフルークゾルダートが接近して重機関砲の雨を浴びせる。

残ったヘリは、高層ビル影に隠れた。愚直に追えば、背後を取られるか、十字砲火の餌食となる。かといって、長期戦はE6にとって不利である。ヘリが顔を出すのを待ってはられない。

ケーシャは僚機に指示を出して、ビル上方に二機を向かわせる。そして、自分は高度を落とし、大通りに着地した。これまで戦いを見守るだけだった装甲車が、目の前に降下してきたシュヴァ

ルツパンターに向けて慌てて擲弾^{てきだん}を放つが、バログの中で精密射撃などできるはずもない。避けるまでもなく弾は外れ、ケーシャはその装甲車を蹴倒して先に進む。

地上走行でビルの裏側に回りこんだケーシャは、上方のフルークゾルダートへの応戦に気を取られた、三機の亜連軍ヘリを視認した。まずは熱粒子砲で一機のメインローターを溶解させると、再チャージの合間、浮揚して次の標的の真下から機関砲を撃ちこむ。これも命中。しかし、そのヘリは墜落の前に、抱えていた対空ミサイルを上空に向け斉射した。その向かう先には、部下たちがいる。

フォローは間に合わなかった。部下の一機がミサイルをかわしきれず、被弾。体勢を崩してビルの壁に激突し、落ちていく。

それに生き残りの敵機が食いついた。曳光弾^{えいこう}を含む火線がレーザーのようにフルークゾルダートを突き刺す。機兵の装甲は在来の航空兵器よりは頑丈だが、戦車のようにはいかない。命中弾を続けて浴びれば、大破は免れない。

敵機を落とすよりは、自分が盾になるほうが早いとケーシャは判断した。落ちてくる味方機との相対速度を合わせ、翼を広げて火線を遮ろうとする。が、それは未遂に終わった。ケーシャが盾になるより早く、火線がやんだのだ。

振り返ると、一機のフルークゾルダートが機兵大の刀剣、ヴェルメゼーベルを振りかぶり、ヘリとのすれ違いざまにテールローターを切断したところだった。モーメントの釣り合いを失ったヘリは、なんとか機体の水平だけを保ちつつ、ビルの谷間に落ちていく。

「貸しひとつですぜ、隊長」

傷だらけの部下の機体を抱きとめたシュヴァルツパンターに、ヴェルメゼーベルを抱えたフルークゾルダートが接近し、共有したバルムンクフィールドのなかで通信を送ってきた。

「コミレットか」ケーシャは信頼する小隊長の名を呼んだ。「東京のほうは任務完了か。早かったな」

ザック・コミレットには、別働隊を率いて東京での任務に当たらせていた。ブルーアイズに設置したのと同様の装置を、東京の巨大な電波塔にしかけるのが彼らの仕事だった。

「それがどうも、陽動がばれたらしい。それで急いで合流した次第です」

詳細は、コミレットの分隊とともにブルーアイズの屋上に戻ってから報告を受けた。

「敵に感づかれたということは、これがどういうものかは知られているということですね」

コミレットの話聞き終えて、ブラームスが唸る。亜細亜連邦軍の戦力を東京と横浜に二分する作戦だったが、東京に集結していた部隊は、コミレットらを見捨てて横浜に向かったという。フルークゾルダートの編隊は亜連軍地上部隊の先を越して来たので、まだそれらの到着までは時間があるが、今のヘリのような航空兵器はすぐにも増援が来ると考えなければならない。

「九天軍が失敗して情報が漏れたのでは」

コミレットの疑念を、ケーシャは否定した。

「“ケーニヒ”からの合図は途絶えていない。もしも情報漏洩があったとしても、作戦はなお続行すべき状況にあるということだ」

「信用していいんですかい、“ケーニヒ”って奴は」

「言っただろう、“時報”^{ツァイトアンゼーゲ}たるアルベルト・ヴェーバー様がお認めになった男だ」

「ほほう。隊長が認めるのであれば、俺も信用しますがね」

コミレットは、作戦前までのケーシャが抱いていた九天軍に対する不信を、よく見取っていた。それでも今の今までコミレットが不平を口にしなかったということは、隊長としての権威を認められている証だとケーシャは察した。それは自分のやり方に対する評価でもあり、素直に嬉しかった。「新手、来ました。^{スホーイ} Su -42 です」

大型センサーモジュールを装備した機体から、報告が入る。同等のモジュールを装備するケーシャのシュヴァルトツパンターも、数秒遅れでそれを感知した。八機いる。

「どこの部隊だ」

滑走路を壊せなかった遠方の空軍基地から飛び立った機体であれば、そのぶん、ここまで辿り着くのに多量の燃料を消費している。帰投の燃料も必要なため、ここでの戦闘時間は制限を受ける。しかし、もし滑走路を復旧させた近場の基地から離陸した機体であれば、敵の戦術の自由度は高く、先程の対ヘリ戦のように有利に運ぶのは難しくなる。

「いまだに Su-42 を編隊で維持しているとなると、おそらく、戦略機動師団でしょう。本来は内紛鎮圧が任務のはず。背に腹は変えられない、といったところですか」

「我々には存在しない、いや、必要のない存在だ。亜細亜連邦はつくづく歪んでいる。――それに気づかせてやろう」

全滅させればいいのだ。

ケーシャの脳と肉体が貪欲に酸素を欲し始める。だが、その昂ぶりをブラームスの声が冷却した。「どうも様子がおかしいですね。向こうはすでにこちらを射程に収めているはず」

「近接戦闘に持ち込むつもりなのだろう。コミレットの出番だな」

「いえ……。やはり動きがおかしい」

ブラームスの言ったとおり、レーダーの捉えた敵編隊が E6 との交戦を避けるように舵を切った。バロッグの広がりに対しても必要以上に大きく距離をとっている。

「どういうつもりだ」

広域破壊兵器でも使うのかとケーシャは身構えたが、敵編隊は単純にブルーシティ上空を迂回しただけだった。しかし、通り過ぎる気はないらしく、弧を描いて一定の距離を保っている。

やがてブラームスが慎重に口を開いた。

「推測ですが、Su-42 はもともと変則領域観測機という名目で配備されたものです。今では戦闘機として運用されていますが、あの編隊の Su-42 は、本来の目的のために飛んでいるとも考えられます」

「我々がやろうとしていることを探りに来たというわけか」

「では妨害するか、隊長」と、コミレット。

「私が行く」ケーシャは即答してから、首を振った。「――いや、捨て置け。見たいというなら存分に見せてやればいい」

最後の慈悲を垂れるのも悪くはないとケーシャは考え直した。そして開眼したならば、そのときは、温かく迎えてやろう。自分が啓示軍に受け入れられたように。

一時とはいえ、黒龍隊の指揮を預けられた南田の士気は高かった。乗っているのが飛蝗型でなくとも思わず飛び上がってしまいそうなほどだったが、しかし、現実には南田にそれを許すほど軽くはなかった。

横浜中心街区ブルーシティを目指した黒龍隊の一行は、その象徴たるブルーアイズの標識灯を夜空に見ることもかなわず、停滞を余儀なくされていた。なぜならば、あたりは濃霧に包まれて視界が利かず、そして、往時の暴走族の集会なみの密度で集結した戦車と歩兵戦闘車とが、黒龍隊を包囲しているからであった。

「なぜ我々の行く手を遮るんです。啓示軍がブルーアイズを占拠しているのが見えないんですか」

南田は龍飛蝗型を先頭に立たせ、包囲網の車陣に呼びかけた。外部スピーカーを使っているの、受信できなかったとは言わせない。もちろん応答はあってしかるべきだった。どの車輻にもきちんと部隊名表示があり、それらはいずれも、黒龍隊と同じ近衛軍に属する部隊だった。同じ予算から給料をもらう仲間である。

「敵は啓示軍だけではない」

南田に合わせたものか、メガホンを使った応答があった。

「ブルーシティは現在、複数のエデン系過激派の同時多発テロにより、主要施設を一時的に占拠されている」

一時的にという部分に強調を置いて、その声は息を継いだ。南田はすかさず口を挟む。

「では、関東防衛を役目とする黒龍隊としては、ますます見過ごすことはできませんね。新世代中枢都市たる横浜を、テロリストの自由にさせるわけにはいかない。あなたがたも、機兵のバルムンクフィールドに入って頂ければ、ブルーシティに出動できます。いかがですか、一緒に」

どうせまた疎んじられている、色よい返事はないのだろうと南田は諦めていたが、義務として誘ってみた。結果は、予想よりなおひどかった。

「一緒に何をさせようというのだ。啓示軍に寝返る道連れか欲しいのか。それとも手土産に我々を後ろから撃つ気か」

「それはどういう言いがかりだ!？」

叫んだのは、鷹山だった。ここで車列を蹴散らしにかかってもおかしくない勢いだったが、理性は保っているらしく、鷹山の龍は微動だにしない。

「では、黒龍隊が榊田大将を監禁し、権力をほしいままにしているという情報を、どう弁解するかね？」

そんな話は初耳だった。榊田は九天軍の襲撃前に基地を出て、どうやらそのまま戻っていない。出先で九天軍に襲われたのではないかと憂うならまだしも、黒龍隊が幽閉しているなどとは悪い冗談だった。

――と、弁解したいところだったが、後ろめたさが南田に沈黙を選ばせる。基地司令の榊田のことは知らないが、司令代理だった倉知ならしっかり閉じ込めているのだ。

いっそその話をここで打ち明けるべきかとも逡巡したが、いかにも不利だと南田は断念した。その件を知っている者は、ここには誰もいない。あまつさえ、阿賀が黒龍隊護衛に割り振ってくれた機甲化歩兵の分隊が南田の後ろにいるのだから、下手なことを言っては数少ない味方まで敵に回すことになる。そんな愚は犯せない。南田は仮にも隊長代理の立場にあるのだから、これまで以上に

慎重にならねばならなかった。

「防空システムを電子的に破壊し、啓示軍の侵入をやすやすと許したのも黒龍隊だという話がある。ダーダネルス作戦からの奇蹟の生還も、これで腑に落ちる」

別の声が、また驚くべき情報を提示してくる。日本各地の対空レーダーやミサイルサイトをハッキングできる^も猛者など、江藤博照くらいしか思い当たらない。しかし江藤には動機がない……はずだと南田は信じている。

「竜時、これはまずいぞ」鷹山が暗号通信チャンネルで囁きかける。「俺たちが通信網から遮断されている間に、すっかりデマが浸透しちまってる。アンチ黒龍隊勢力の仕業だ」

「ばか言え。近衛軍の全てが敵に回ったわけじゃないだろうに」

数時間前、南田たちが戦いやすいよう交通整理に協力してくれたのも、たしかに近衛軍だったのだ。その事実が南田に信頼の精神を堅持させる。

「気持ちはわかるが、竜時、よく聞け。ストレス下にある民衆はアジテーションの絶好の鴨だ。それは軍人にだって同じことが言える。啓示軍に加えてエデンの一斉蜂起とくれば、誰か身近な悪者のせいだと考えるほうが楽なんだ。ストレスがない。世の中の現象はすべてエネルギーの小さい方向へ進む。原理原則に逆らうな。ここは連中の不安を利用する手を考えようぜ」

「そんな理屈、通用するかよ。ここは変則領域だ」

南田はひそひそ話を一方的に切り上げ、再びスピーカー出力をオンにした。

「俺たちが啓示軍とグルだって？ 言い出した奴を連れて来い！ そんなデマを流す奴こそ、スパイか何かに決まっているだろう！」

四方八方でどよめきが起こった。いいぞ、もっとやれ、と囁し立てる整備班。落ち着けよと慌てる鷹山。監視中のフィジカルコンディションのデータを引き合いに出し、心配そうに声をかけてくる情報班。包囲網の近衛軍の将兵たちの声はわからないが、何かを言い合っているのはわかる。啖呵を切った効果はあった。

事態がどう転ぶにせよ、ここはもうコクピットから躍り出て殴り合いをしてでも疑いを晴らすしか無い、と肚を決めてかかった南田の前に、やがてひとりの男が車陣の中から進み出てきた。

すらりとした^{たたく}仔まいの将校である。龍の投げかけるスポットライトを浴び、男は不敵に南田を見上げてみせた。糊のきいた制服は、戦略軍のものだった。かっちりした襟の上に乗っている顔に、見覚えがある。

「あなたは……」

南田は息を飲み、ポップアップ画面上の鷹山と顔を見合わせた。そして異口同音に続ける。

「誰でしたっけ」

将校の膝が崩れた。しかし意地で踏みとどまって、雄叫びを上げる。

「戦略軍特別運用調整官、^{ワンガイウェイ}汪凱威だ！」

軍用英語で紡がれた肩書きはよく聞き取れなかったが、後半の名前を聞いて、南田の記憶の糸が繋がった。暖炉の谷で久留と龍複座型に乗っていた男だ。顔面蒼白、出血多量で気絶しているところの印象が強く、自立歩行している目の前の将校がそれと同一人物だとは、なかなかわからなかった。

「ああ、そうでしたそうでした。汪大尉、ご無沙汰しています」

表現がよそよそしくなったのは軍用英語が機械的言語であるためばかりではない。親しく会話を交わした仲ではないし、そもそも日本語があまり通じないようだ。

とはいえ、暖炉の谷のあの特殊な環境に居合わせた者同士、一定の信頼感はある。南田は機体を膝立ちにして、コクピットハッチから顔を出した。汪は不満そうななかにも幾分溜飲を下げたような表情を見せる。

「これだから黒龍隊は……。まあいい。デマを流したのは誰だという質問だったな。おそらくは九天軍だ。でなければ、それに呼応する極東方面軍の裏切り者たちといったところだろう。このなかにも何人紛れているやら……。マヌケな君たちは、近衛軍という番犬の注意をそらす餌として使われてしまっているのだ。どうだ、わかったか」

汪は胸を張り、南田は目を瞠^{みは}った。

「そこまでわかっているなら、最初に説得に回ってくださいよ」

「ばかだなきみ、それでは私があまり目立たないではないか。見よ、この衆目を」

スポットライトでも浴びているかのように、いちいち動きが芝居がかっている。本人に恥じらう様子は全くない。役者といえば役者。

「あなた、うちの隊長とたいへんよいお友達になれそうですよ」

「能ある鷹は爪を隠す。しかしその爪は、いざというとき最大のパフォーマンスを発揮するものなのだ。しかし江藤博照はまだ出し渋っているのだな。この好機に自ら出てこないとは」

「――何を言っているのです？」

「芝居はいらんぞ、少尉。どうせ周りには聞こえない。私も昼間に君の同僚から受けた仕打ちは水に流そう。だから今は敵にどう対抗するかを一刻も早く協議しようではないか。江藤少佐はどこにいる？ どういう作戦で攻めるのか、是非聞かせてもらいたい」

やはり汪が何を言っているのか南田にはさっぱりわからなかったが、それでは話が前に進まない。別の質問をした。

「江藤少佐と話をするために、ここで待っていたのですか」

「その通りだ。黒龍隊敵視の流れを取って看過したのも、その方便だ。もちろん、手綱の調整はしたぞ。私は栄えある特別運用調整官だからな、それくらいは朝飯前だ。幸か不幸か、バログも深い。近衛軍は私の変則領域についての深い経験と知識に頼って行動せざるをえないのだ。――で、江藤少佐はどこにいるのだ。後ろの装甲車の中か？」

汪が顎で指し示したのは、情報班のタチアナたちや整備班の矢俣たちが乗っている二三式戦場管制車だった。肝心の新型指揮通信システムが未実装なため、座席ばかり快適な贅沢仕様の装甲兵員輸送車となっている。やや旧式ながらスペック通りに動く指揮通信車を黒龍隊は持っているが、北嶋が合流するときのために、それは猿之門基地に残して来た。とはいえ、なりは立派だから、隊長たる江藤が乗っていると偽ることはできる。それでも、南田は正直に答えることを選んだ。

「江藤少佐はここにはいません。あとから合流します」

「なんだって？ 悠長にもほどがあるぞ。暖炉の谷で何が起きようとしていたか、知らなかったわけではあるまい。だからこそきみたちは、友軍にも取って牙を剥いたのではないのか」

「あれは、元老院派が核弾頭を使うのを阻止するために……」

「芝居は無用だと言っているだろう。時間がないのだ。互いに肚を割って話そう。黒龍隊は、オルロフがどこにあると睨んでいるのだ？」

「オロ……、オロロ……、臙豆腐？」

「オルロフだ。ボケている場合ではないぞ」

聞き覚えのない言葉だった。南田は再びひそひそ話で鷹山に問い合わせるが、首をひねる動作を見せられただけだった。

「知らない名称ですね。例の、砂時計型の BFG のことですか。消滅砲のマーカーになっていた……」

説明が尻すぼみになったのは、汪の顔が失望に満ち溢れていたからだった。

「これは驚きを禁じえないな。黒龍隊はオルロフの存在を認識していないのか。三回も接触しておきながら！ そして、オルロフこそがきみたちの運命を弄んできたというのに！」

そのとき、芝居がかった悲嘆にくれる汪の背後から、メタボ腹の紳士が歩いて来ていることに、もちろん南田は気づいていた。

「何をごちゃごちゃ言っているのだね、汪大尉」

背中に目のない汪は慌てて振り返る。そしてバーコード頭の右院議員の姿を認めると、たじろいだ。別に威容に押されたというわけではなく、今のやりとりを聞かれたのではないかと動揺しようだった。あれだけ大声を出しておいて、迂闊な奴だと南田は思う。

「榎田議員、安全なところでお待ち頂きたいと申し上げたはず」

「ここはじゅうぶん安全だとも。そもそも黒龍隊は私が禁足から解放してやったようなものだ。そして、恩人に牙を剥くような駄犬に関東防衛の任を預けたつもりはない。然るに、ここには何の危険もないということだ」

豪語するのは、紛れもなく右院議員であり軍事委員会の一員、榎田である。横浜議事堂が襲撃された折に負傷し、入院していると聞いていたが、もう出歩くのに問題はないようだ。もともと支障があったのか定かでないが。

榎田は創設直後の黒龍隊の様子を見に来た、数少ない議員のひとりであり、彼の発言は真実だと南田にも認めることができる。ただ、あまり恩義を感じたことはなく、向こうが片思いの信頼感を抱くのもよく理解できない。榎田にとっては、黒龍隊は所有物だという位置づけなのかもしれないと、南田は邪推した。

「きみはたしか、南田少尉だな」榎田が南田を指差して言う。「残念ながら、右院は議事堂が危険区域になったため、機能していない。それはすなわち、江藤少佐に与えた特権が今この時において実行力を持つということだ。他の近衛軍が何を言おうと構うものか。錦の御旗は諸君らのものだ。存分に啓示軍と戦ってくるがいい。――そう江藤少佐に伝えたまえ」

とりあえず味方をしてくれるらしいと理解した南田は、江藤が遅れてやってくることを再び説明した。すると榎田はかんかんに怒りだした。

「あの男は、肝心なときに何をやっているのだ」

たしかに、合流が遅いとは思っていた。大所帯を引き連れて移動しなければならなかった南田たちに比べ、将龍一機と電子戦装甲車一輛ならばはるかに俊足である。近衛軍との押し問答の時間を含めれば、そろそろ将龍を修理して追いついてもよさそうな頃合いになっている。江藤に、あるい

は猿之門基地に何かあったのではないかという一抹の不安がよぎる。

「榎田議員。江藤少佐からは、啓示軍への妨害を命じられております。その範囲においては、我々は自由に行動できるということで、よいですね」

「私は、先生と呼ばれる方がしっくりくるな」

「榎田先生、よろしいですか」

「うむ、問題ない。どうせあとから問題を扱うのは我々軍事委員会なのだ。諸君も我が身がかわいければ、軍事委員会を守ることを至上命題と覚えておくのだな」

それはおそらく冗談だったのだろうが、南田は笑えなかった。我が身くらいは自分で守ってみせる。そのうえで、他者もまた守りたいのだ。それは岡山の家族であり、士官学校時代に遊んだ横須賀の街の人々であり、また、交流の生まれた猿之門の市民である。そして、南小柿柳枝。啓示軍がここで暖炉の谷と同じことをしようとしているなら、南田の守りたいそれらの人々が皆、あの精神異常に冒されることになる。榎田の考えているよりも事態はよほど深刻で、急を要する。

「では、黒龍隊はブルーアイズを占拠した啓示軍第六機兵戦隊との交戦のため、ここを通らせていただきます」

「いや、待て待て」と汪。「私を連れていくのだ。江藤少佐にも会えず、ここで置いて行かれたのでは、これまでやってきたことが水の泡だ」

汪は、龍に乗せてもらうのと、後ろの車のどれかに乗せてもらうのとで逡巡を見せたが、ここにいる龍はいずれも単座型であると南田が忠告すると、迷わず車陣へ駆けて行った。残った榎田にも、一応、南田は声をかける。

「榎田先生はどちらに？」

「私は、桜小路さんと連絡をとって次善策を話し合うので、残念だが一緒には行けない。黒龍隊の謀叛の疑惑を払い、諸君らが大手を振って帰れる場所を用意するのが、私や桜小路くんにとっての闘いだ。互いの健闘を祈ろう」

「ありがとうございます。May the Force be with you！」

ワンテンポ遅れてだったが、意外にも榎田はにやりと笑った。この国家権力の歯車も、かつてはSF映画に心踊らせた時代があったのかもしれない。

南田はその手応えを胸に、隊を前進させる。近衛軍のメガホンからは警告が飛んだが、もう聞く耳は持たなかった。面の皮で押し通る。戦車の脇を通り抜ける時、複数の砲塔が旋回して龍を追ったが、発砲はなかった。

撃たれたらどうするか。反撃の覚悟まではできていなかった南田にとって、血を見ずに突破できたのは幸いであった。

ここを抜けてしまえば、あとは簡単である。啓示軍や九天軍の企みを阻止すればよい。もっとも、話としては簡単なだけで、実行にはなお多くの困難が立ちだかっていることを、無論、南田は承知していた。E6のフルークゾルダートは数が多く、空を飛べるというアドバンテージもある。火器に関して、バログ内でも使える電離砲や熱粒子砲を彼らは準備しているだろう。

その難局の指揮を、江藤が来るまでの間、自分が受け持つのだ。次から次へと湧き起こってくる不安に、南田は暖炉の谷での危機感を思い出すことでなんとか抗う。否が応にも早くなる心臓の鼓

動に、カチコチという穏やかな駆動音が胸の上で重なる。フィリップ・リーから貰ったデミハンターの懐中時計が、慌てるなど言っているようだった。

そして幸か不幸か、南田に冷静な判断を要求する事態はすぐに訪れた。

前方、俯角に、黄色ないし橙色の灯りが数十と並んでいる。

南田は最初、それを自動車のヘッドライトだと思った。バログのなかで立ち往生し、軍や警察が救出にやってくるのを待っているのだろうと。あるいは、かなり近くで銃声や爆音が聞こえ、エンジンを切る暇も惜しんで逃げ出したのかもしれない。

しかし、灯りは動いていた。輝点同士の間隔は徐々に変化しており、それでいて全体としては一丸となって、相対距離を縮めて来ている。相対速度は時速五十キロメートル。黒龍隊はまだ近衛軍を背にした緊張を伴って徐行していたから、彼我の進行速度はおよそ等しかった。バログの呼び起こす変則現象を恐れず果敢に自動車を進める人々がいる、などと南田は勘違いをしなかった。それらがヘッドライトではないことを、龍が教えてくれていた。前方の移動オブジェクト群にはすべて、黒龍隊で独自に登録した名が付記され、たちまち路上がその標示に埋め尽くされる。あとからあとから、それは溢れて出ているのだ。南田はアドレナリンの分泌を意識した。

「零時方向、『鎧蜘蛛』多数！ 機兵は全機正面に展開、車列を守れ」

「ただし、バルムンクフィールドの中には収めるんだ。情報班と機甲化歩兵の援護がないとかなりキツイぞ、この数は！」

南田の指示を、即座に鷹山が補足する。その通りだ、と追認しつつ、南田は飛蝗型の跳躍力を活かして最前面に飛び出した。

鎧蜘蛛はバルムンクフィールドに惹き付けられ、その源であるコアを摂取する。暖炉の谷で推定したその習性は、やはりここに現れた群れについても共通のようだった。飛蝗型に鎧蜘蛛大小十匹程度が殺到し、南田は最大出力で放電させた雷紫電を振り回して、これを次々に殲滅する。

暖炉の谷での経験から、黒龍隊はこの敵の弱点をよく分析していた。南田は雷紫電で的確に顔面や胸部中央といった急所を突いたし、側方をすり抜ける鎧蜘蛛を立て続けに火縄で狙撃した鷹山も、甲殻の分厚い部位や主駆動系以外への無駄弾は撃ちこんでいない。残る一機の龍を操る杜洋伸は、手早く機兵搬送車に近づき、暴徒鎮圧用の高分子粘膜炎を取り出して、足止めを始めている。

しかし、三機の龍に対して鎧蜘蛛の数はあまりに多かった。先に屠られた個体の屍を越えて、次々に新しい個体が襲って来る。

「こら、南田少尉、聞こえているか」

汪凱威が何かを喚いているのに南田は気がついた。そういえば、通信ポップアップが開いたのを、反射的に隅に追いやっていた。そこに汪の顔がある。しかし、正面には戦闘に必要な情報でもう隙間がない。南田は雷紫電の残り使用回数を確認しながら、声だけで応じる。

「はいはい、いま取り込み中なんですけど」

「ばかだな、君たちは。鎧虫機をすべて相手にしようとするからだ」

「ガイチュウキ？ ああ、鎧蜘蛛のことですか。奴らはBFGに寄って来るんです。機兵で引き付けないと……」

「そんなことを私が知らないとでも思ったか。その習性を利用するんだ。私たちの後ろには何が

いる？」

「――あ」

汪の考えはわかった。先ほど啖呵を切って別れたばかりの近衛軍機甲部隊が、可搬型 BFG 数基で広域のバルムンクフィールドを展開し、その殻に籠ってバロッグの難を逃れている。

「鎧虫どもは君たちでなく、後方の巨大なバルムンクフィールドに吸い寄せられて行進していたんだ。なら、そこに居座る彼らに出迎えさせればいい。火力、持続力ともに十分だ。積載能力に弱点を抱える機兵で、彼らの客を横取りしてまで消耗戦を展開する必然はない」

汪の提案は魅力的だった。このまま鎧蜘蛛の群れ相手に戦っているのは、E6 に挑む前に弾薬が尽きてしまうだろう。

「それ、いただきます。――黒龍隊、フォーメーション『達磨さんが転んだ』！」

「なんだ、それ」と、鷹山。

「いいから合わせてくれよ。BFG 停止、各車輛沈黙。自衛以外の攻撃を禁止だ」

江藤ほどの発言力がないせいか、南田の言ったとおりの態勢が実現されるまで一分ほどを要した。BFG 停止のため電波通信が雑音だらけになったのも足枷だった。それでも、一応は被害らしい被害もなく、鎧蜘蛛の群れは黒龍隊に興味を失ってただただ道路を直進していく。進路上の障害物となって踏みつけられる車列からは隊員の悲鳴が聞こえたが、鎧蜘蛛はそうした音波には一切反応しなかった。

「さもない奴らだ」

最後尾についていた機甲化歩兵の応援部隊から、呟きが聞こえる。基地では憔悴していた新米の小笠木だった。もう調子は戻ったろうかと南田は気にかける。鎧蜘蛛の襲来が良いカンフル剤になったかもしれない。

やがて後方から大小の砲^{ほうこう}の唸りが聞こえてくる。情報班が複数の通信手段を組み合わせてなんとか近衛軍と意思疎通をしていたので、迎撃の態勢はぎりぎり取れたはずだ。バルムンクフィールドの中で迎え撃つぶんには、機甲部隊に圧倒的な利がある。むしろ、過剰な火力で周辺のビルや家屋に被害を出さないようセーブするのが最大の苦勞だろう。しかし、前進しながらとなると、機甲部隊では難しい。特に狭い道路を列をなして進むと、火力が分散するし、そもそも BFG の効果範囲が車列の全長をカバーできない。あれがどうやら普通の乗備機ではないことに近衛軍の兵士が気づけば、半包圍環境で恐慌状態に陥ることも想像に難くない。したがって、ここから先、ブルーアイズに至るまでの道程は、黒龍隊自ら切り拓かねばならない。

「先を急ごう」

BFG を作動させ、南田は隊に前進再開を号令する。

鎧蜘蛛まで出てきたとなると、ますます状況は暖炉の谷に似てきた。行く手のブルーシティは全体が深いバロッグに覆われている。相対バルムンク反応で前方一帯すべてがレベル B に達しているのだから、それはわかる。これが“ベルリンの壁”に転化したなら、もう籠に手出しはできない。そうなる前に電光石火の突破をかけるしかない。

想定よりも危険な任務だ。鎧蜘蛛が何がしかの相対バルムンク反応を持っていても、このバロッグのなかでは至近距離まで識別できない。この都会では熱源検知もあまり頼りにならないだろう。

歩行時の振動もヒントにはなるだろうが、おそらく自分たちの起こす振動に紛れて実用的ではない。鎧蜘蛛の全身に散らばる蛍のような発光部を目視確認するのが最適ということになる。龍にとっては得意の有視界戦闘となるわけで、唯一それだけが好条件と言える。対空装備に限らずあらゆる武装を満載してきた甲斐があった。

「いったい、奴らどこから湧いて出るんだろうな。暖炉の谷でも同じだけど」

鷹山の素朴な問いに、南田はふと、ひとつの仮説を思いついた。

あれらもまた、時空を隔たるところから呼び出されているのだ。それは啓示軍がベルリンに持つ秘密のラボかもしれないし、見知らぬ異星かもしれない。黒龍隊が半月の空白を味わったことを考慮すれば、突飛な発想ではあるが、古生代や中生代の未知の生物という可能性すら否定しきれない。ともかく現在地球上で確認されている生物とは隔たりが大きく、何らかの隔絶を乗り越えて現れたものには違いあるまいと南田は確信を抱く。

「変則領域の起こす現象はデタラメだ」汪が割り込む。「いつも最初はそう感じる。しかし、経験を蓄積してよくよく解析してみればどうだ、やはり一定の法則性に縛られている。すべて全くの自由気儘きまというわけではないんだ。だからこそ、こうして機兵はバルムンクフィールドやマスディフューザかみわぎを作動させられるし、啓示軍は神業かみわざとしか思えない数々の現象を制御できる」

「その制御の方法、特別運用調整官殿にもまだわからないのでありますか？」

「いい質問だ、南田少尉。そのあたりの謎を解明するために、私は暖炉の谷の戦いからこっち、特別運用調整官の名に懸けて調査と研究に没頭していた。タシセント、GT72 鉱山基地、西フェルガナ基地……、手がかりを求めてあちこち巡ったが、最後に辿り着いたのがここ、横浜だ。君たち黒龍隊には、私の得た知識と、展開した考察を共有する資格がある。次の敵に遭遇するまで、時間の許す限り伝えておこうと思う」

通信回線は車列の全てに伝わっている。小笠木たち機甲化歩兵も含めて。それら数十人分の息を呑む気配が南田のもとまで伝わって来た。誰も口を挟む者はない。邪魔があらうとも汪凱威はマイクを離さないだろう。すぐに滔々とうとうと語り始める。

「まずは覚えるべき単語が二つある。ひとつは『オルロフ』、数奇な運命をたどったダイヤモンドの名を与えられた物。もうひとつが『崑崙』クンロン、我が中華の秘境に連なる霊山の名を与えられた物。忘れるな、これらが君たちの運命を狂わせたのだ。そして、あるいはこの世界そのものをも……」

「二時方向、大型鎧蜘蛛三体！ こちらに向かってくる！」

機甲化歩兵からいち早い警告。汪の言葉に気を取られがちだった南田は、彼ら機甲化歩兵の優秀なサーチ能力を実感する。

三体の鎧蜘蛛は、まっすぐこちらを目指している。全力疾走に近い。また「達磨さんが転んだ」フォーメーションでもいいかもしれないが、鎧蜘蛛が他に興味を引かれて移動するまで息を潜めて待つ時間が惜しい。

「鷹山、ここは任せて先に行け！」

南田はフットペダルを踏み込んで飛蝗型を勇躍させた。そばには灯りの残るマンションがあり、火器の使用はリスクが高い。雷紫電装備の南田が片付けるのが最も手早い。

「おまえそんなこと言っていると死ぬパターンだぞ！」

諫める鷹山はしかし、南田の言葉に従ってくれた。いい同僚を持ったと、南田はしみじみ思う。こんな見せ場と手柄を譲ってくれるのだから。

八

HAOS正常起動。ディスプレイ、コンソール共にコーションライトの点灯なし。断線はすべて交換、あるいはバイパス処置をした。充電状態九十二パーセント。マスディフューザやエアインパルサー、バルムンクフィールドジェネレータの作動状態も良好であることを、江藤は感じ取る。

将龍の復旧は完了した。

「こっちはいいぞ、北嶋。そっちはどうだ」

「もう少し待ってくれ。データの移動がまだ終わらない」

電子戦装甲車の座席に収まった北嶋の、苛立たしげな顔が画面に映っている。データというのは、先刻の実験のデータである。得られた示唆は膨大だと期待されているが、解析している時間がないので、作戦現場まで持って行こうというのだ。黒龍隊を有利に導く情報が得られるかもしれないので、その判断は江藤も了承済みである。多少の遅れはやむをえない。南田や鷹山たちを信用するしか無い。「いっそ、ここから飛べればいいのだがな」

江藤は冗談めかして言ってみた。現実的でないのはわかっている。将龍はあくまで九天軍の装置に同期して時空跳躍を再現できたに過ぎない。スタンドアロンでは作動しないうえに、消えたあとはいつどこに出現するののかも、はっきりしない。リスクばかりが多すぎる。暖炉の谷ではよくもうまく事が運んだものだと、江藤は今更ながらに感心する。自分の悪運の強さに。

いや、違うだろうと江藤は考え直す。穂積克は、悪運を江藤の天賦の才として評した。しかしそれは、江藤が変則領域を感知できるがゆえに危機回避に成功した事例を、穂積がそのように観測したに過ぎない。ならば暖炉の谷で何度も都合よく時空跳躍できたのも、雷麒麟の隠された機能のおかげだったと考えるべきだろう。将龍はその劣化コピーに過ぎないので、九天軍のバルムンクシステムに同期させるのが精一杯だったが、希望は見えてきた。九天軍がそのようなバルムンクシステムの構築に成功している以上、雷麒麟でも任意の時空跳躍が可能であった公算は大きい。やはり是非ともあの機体を修復して手元に起きたいが、それは、今夜のゴタゴタが片付いてからのことになる。将龍で一応の実験結果が得られただけでも、僥倖としなければならないだろう。

うしろでゴン太が吠えた。その声で、江藤は北嶋からの呼びかけに気づく。出発可能らしい。

「よし、出発進行！」

一機と一輛が足並みを揃えて基地のゲートに向けて走りだす。バロックが基地周辺にまで広がったため、将龍のバルムンクフィールドに入れてやらないと電子戦装甲車の動作も怪しい。

黒龍隊はこれで、秋月杏里を除く全員が基地を離れる。見送りは誰もいない。基地にはまだ他の部隊が残っているが、負傷兵の処置や捕虜の尋問、施設の復旧などでおおわらわなのだ。殊に、司令塔の不在が混乱に拍車を掛けている。基地司令は結局戻って来ないので穴蒲が迎えに赴き、そして司令代理であった倉知は江藤が監禁している。この二名に次ぐ経験のある佐官を飴と鞭でなだめすかし、なんとか後を任せてきたが、九天軍の襲撃にかなり精神を消耗している様子だった。しばら

く役に立ちそうもない。本当なら、バログ中で遭難した市民の救出指揮を執ってもらわねばならないので、今夜の対応のまずさは後々市民から突き上げを食らうネタになること必定だった。

「ん、北嶋、災害救助要請は来ていたか？」

思い返してみると、記憶にない。啓示軍オフエンバーレナと九天軍のことで頭がいっぱいになっていたが、要請は基地に駐屯する各部隊長にもれなく伝達される仕組みになっている。基地に一報届きさえすれば、あとは今日限りで指名された哀れな伝令が駆けずり回って、連絡を回す仕組みになっている。

「どうだったかな。俺は聞いていない」

ピンとこない様子で北嶋は車中の部下に確認を取ってくれたが、やはり誰も聞いた者はいなかった。じきに、通信隊が機能していない以上、第一報すら受け取れていないのではないか、という話になる。基地でドンパチが繰り広げられたのは音と煙で明らかなので、市民が丘を登ってくることも考えにくい。おまけにもう夜も深まっている。屋外で夜を越せないような寒さも過ぎ去っており、霧こそあれ雲ひとつない月夜であれば、このあたりの野山で立ち往生している市民がいても生死にかかわることはない。今日中に横浜の敵を片付けて、市民の救助については明日頭を悩ませればいい。

そんな算段をしていた江藤たちの行く手を遮る一団があった。場所は壊されたゲートの前。車止めの変わりだとしても言うように、摂氏四十度弱の熱源が横うごめ一列になって蠢いている。人だ。増光モードに切り替えて、どこかで見た光景だと思った江藤は、やはりいつか見た連中がそこにたむろしているのを見て取った。一団のなかに、安全ヘルメットをかぶったゴリラのような男がいる。桃源協の由利鍊丸という名が最近の記憶からサルベージされる。その背後の筋骨集団の素性は推して知るべしである。

「どうした、あんたら」

江藤は将龍をゲート前で停止させ、外部スピーカーで呼びかける。ゲートはもはや車止めの機能を失っているし、辺りには破壊した車や乗備機の破片、そして敵味方の血痕が数多く残るから、基地が只事でないのは一目瞭然である。善良な市民は恐れをなして近づかないだろう。それでも桃源協の男衆がここにたかっているということは、何か言いたいことがあるのだろう。江藤はそれに耳を傾けようと思ったのだ。

「その声は、江藤少佐か」

鍊丸が将龍を見上げて大口を開ける。

「助けが欲しいんだ。ちょっと頼まれちゃくれねえか。至急だ。ロボットに乗っかっているなら都合がいい。さっそく案内するから、ついてきてくれ」

踵きびすを返してゲートそばの4WDに乗り込もうとする鍊丸を、江藤は実力行使で押しとどめた。つまり、将龍の指でいかつい首根っこをつまみ上げて、将龍のコクピットのある腹の前に持ってくる。そのうえでハッチを開けて顔を合わせた。後部座席のゴン太も身を乗り出して鼻面を覗かせる。「何をそんなに慌てている。バログで乗備機が立ち往生でもしたか？　ともかく一休み一休みだ。一休宗純」

「落ち着いていられるか！　ウチの頭かしらが、奉まつさまが連れて行かれた。テロリストの片棒を担いだって因縁をつけられてな。あんたなら話をつけられると思う。急いで来てくれ」

来てくれ、の合唱が足元から沸き起こる。団結力はよくわかった。

「警察か。桃源協は前々からマークされていたのか」

「違う、RATだ。RATが奉さまを連れて行った。あんたは連中にも顔が利くだろう。今ならまだ追いつける」

尾行は若衆にきっちりやらせているから、と鍊丸は平気で嘯く。とてもまっとうな建設業の社員とは思えなかったが、そこは敢えて指摘しない。どちらかというと親近感を持てる。

「何かの手違いがあったようだな。行ってやりたいのはやまやまだが、俺はこれから啓示軍とテロリストをまとめてとっちめに行かにならん。社長さんの解放はそのあとでもどうにかならんか？」

「いかん。奉さまは拷問を受けるかもしれんと、お嬢様は仰っている」

鍊丸は短い手足をじたばたさせ、抗議の意思を全身で表明する。ゴン太がなにやら興奮して吠える。「お嬢様というと、紅麗葉のことか」

そういえば、扇子を預かったままである。実験中、将龍の空調が停止したときのためにコクピットに持ち込んだのが、そのまま置いてある。返すにはちょうどいいが、しかし寄り道をしている場合ではない。南田たちはもう命のやりとりを始めているかも知れないのだ。それを命じたのは江藤に他ならない。

「明日の朝まで待ってくれ。それまでにケリをつけてくる。真空飛び膝蹴りの勢いでだ」

「おのれ、冷血漢。ならばこの俺を倒してから行くがいい！」

鍊丸は暴れるのをやめ、腕組みをして江藤を睨む。

「江藤、その人を早く放すんだ」

北嶋が通信で呼びかけてくる。

「俺も守るべき市民を手にかけるつもりはないが、ここで時間を使っているのは他の多数の日本人をだな……」

「いや、そういうことじゃない。とにかく下ろすんだ。将龍で迎撃態勢を取れるように！」

江藤は北嶋の言わんとするところを理解した。それは理性よりも野性により得られた理解だった。第六感が、とある気配の急接近を感じ取っている。これは人工のバルムンクフィールドだと江藤は確信できた。そのみならず、江藤はその機種すら特定した。警報音が鳴ったときには、もう手足が動いている。

「偽龍王め！」

江藤は鍊丸をテントの幌の上へ放り投げると、雷紫電をマウント位置から外して構え、振り向きざまに斬撃を受け流した。紛うことなく、龍王陸番機と呼ばれるそれが、拔身の炎草薙で上空から斬りつけてきていたのだ。開け放たれたハッチから、江藤は肉眼でそれを見た。

「散れ、市民！」

江藤は桃源協の若衆に向かって叫びながら、龍王の繰り出してくる蹴りをエアインパルサーの急噴射でかわす。機内では専用シートから転げ落ちたゴン太が楽しそうにキャンキャン吠え、外では呆然としていた若衆たちが巻き起こった土煙をかぶって我に返り、二機の機兵からこけつまろびつ遠ざかって行く。

続く連撃を三発までかわしたところで、江藤は反撃に転じた。鋭利な爪で将龍の目を狙ってきた龍王の手首を、雷紫電の柄で弾き、地面に向いた槍先を龍王の足首へと滑らせて、放電。ハッチ開状

態ではなにより自分が危ないので出力は抑えたが、MM アクチュエータを誤作動させるには充分なはずだった。実際、龍王は足をもつれさせて転倒する。

江藤は龍王の手から得物を蹴り飛ばすと、背中を踏みつけて、首筋に雷紫電を突きつける。勝利を理解したのか、ゴン太が江藤の膝の上に乗って遠吠えを始めた。

「五百蔵の小娘か。今のは本気だったな。どういうことだ」

龍王からの返事はない。もっとも、江藤も期待はしていなかった。予想していたのは別の声で、ほどなくそれは現実に聞こえてきた。

「お見事、さすがは江藤少佐」

どこからか、門宮洗の声。通信機を介しているということは、バルムンクフィールドの中、すなわち至近距離にいるはずだが、その姿は見えない。

「どこだ、出てこい。客を連れて来るという話が、どうしてこうなった」

江藤はサブディスプレイに熱と動体の在り処を表示させてみるが、桃源協の若衆が散らばっているせいで、何が何だかよくわからない。

「それは私から説明しよう」

センサーの死角、足元から声がした。かと思うと、ハッチに鉤縄が投げかけられて、何物かがよじ登ってくる。

行動の活発ぶりとは対照的に、その人物はおよそ運動には適さない上品な仕立てのスーツを着ていた。色も夜の闇とは対照的な白。逞しい長身の持ち主で、張りのある黒髪をオールバックにして、まとめた先は編んでまとめて背中に垂らしている。変わり者の映画俳優という印象を江藤は持った。初めて見る顔である。ただ、誰かに似ているような気もして、それが警戒感を薄めさせている。

「ここは舞踏会の会場じゃないぞ。誰だ、貴様は」

「ウー、ワウワウ」

一人と一匹に吠え立てられ、膝の埃を払っていた男はおもむろに名乗る。

「お初にお目にかかる。私は^{ホンシュウレン}洪秀連。亜細亜連邦元老院のひとりだ」

冗談にしてはセンスがないと江藤は思った。そんな与太は子供でも信じない。それを真顔で言っただけ、なおかつ江藤の反応を十秒以上待たせられるこの男は、どうやら本物と認めなければならないようだった。あるいは、本物の狂人か。

「元老院議員にしては、若いな」

「少佐よりは年上のはずだがね。そもそも、元老院は別に年寄りの集まりではない。ま、少年少女に溢れているとは言えないが。それより、ふたりで話をしたい」

「見ての通り、このコクピットにあんたを乗せる余裕はない」

「しかし犬は乗れるようだな」

「犬ではない、狼だ」

「これは失敬」

洪はゴン太に向かって恭しく一礼した。迂闊に頭など下げようものなら飛びつくはずのゴン太が、むしろおとなしくなる。江藤はそれでいくぶん戦闘の興奮状態から冷却され、野性から理性へシフトできた。

元老院議員を連れて来るとは、門宮が言ったことだ。不意打ちではない。ただ、まずは検討するという話だったから、いきなり元老院議員が乗り込んでくるとは思っていなかったが。

しかし約束通りに会いに来ただけなら、狂犬をけしかけられる謂れはない。偽龍王はいまだに將龍の足の下で動力を保っている。平均的な少年よりよほど短髪の少女、五百蔵惟織のふくれっ面がポップアップ表示されることもない。江藤は拘束を解除する気にはとてもなれない。

「言行不一致の良いサンプルが転がっているようだが」

江藤が偽龍王を視線で示すと、洪は微かながら眉に皺を寄せた。

「門宮から報告を受けたのは私だけだ。ここへ来たのは私の独断ということになる。それを知ったRATが、あるいは元老院の仲間の誰かが、私の目論見を阻止しようと君を襲ったのだろう。元老院議員は互いを傷つけるようなやり方を決して取らない。しかし、それは平和的手段への拘泥を意味するものではない。少佐には失礼をした」

「では、そいつにおうちへ帰れと命令してくれ。元老院議員なら、龍王を自由にできるだろう。――ああ、ダメダメ、撤回だ。帰らせるのはパイロットだけでいい。また襲ってこられたのでは、かなわん」
「ふむ。――門宮」

洪が右手を軽く挙げると、反応はすぐにあった。

「承知致しました」

まずは門宮の声がして、間もなく、龍王の体が小さく沈み込む。BFGが停止したことを、江藤は第六感で察知する。そして腹の下からは、やはり短髪の少女が這い出してきた。

「そろそろ信用してもらえたかな」

お下げを指で弄びながら、洪が時間を気にする素振りを見せる。時間がないのは、わかっている。桃源協の若衆をギャラリーにしてできる話ではないことも。

「いいだろう。少し待て。――うおお、大変だ」

江藤は外部スピーカをオンにし、大声で騒ぎ立てる。

「この地べたに這いつくばっているみっともない機兵は爆発するぞ。ドカーンと！パイロットも逃げ出した。桃源協の諸君、早くここから逃げたほうが身のためだ！」

一瞬の静まりがあった。その後ひとりが悲鳴を上げて駆け出すと、それが契機となった。物陰に潜んでいた多数の熱源が、ゲートの方へなだれうって流れていく。

「さあ、これで話せるだろう。何の話だったか。啓示軍を排除しろ、とかなんとかだった気がするが。九天軍は任せろ、とも」

「いかにもその通りだ」

「その件なら、もう動いている。元老院の虫のいい頼みを聞いたわけじゃない。俺がそうしたいから、動いたまでだ。他に交渉事がないのなら、話はまた今度にしてもらおう。啓示軍が首を洗って待っている」

「待ちたまえ、江藤少佐。RATの調査で、少々事情が変わった。もはや機兵での戦いなどに興じている場合ではない。私はそれを伝えに来たのだ」

「“ベルリンの壁”の脅威だろう？ あいにく俺は、とある筋からその話を聞いている。それしきの情報では今更、取引材料にならん」

「我々の常識が通じるというのなら、話は早い。啓示軍は絶好の機会を見逃さずに襲って来た。仮に黒龍隊が勇躍し、機兵部隊を殲滅したところで、ハンス・ライルスキーの掌中から脱したことはない。要は、オルロフを守れるかどうかだ」

待っていたキーワードが出た。江藤はにやりと笑う。

「元老院はまだオルロフを持っているのだな」

啓示軍はノイエトーターを使って暖炉の谷に“ベルリンの壁”を発生させたが、ノイエトーター単独の力ではなく、半径二メートルほどの球状の物体を不可欠としていた。それがオルロフなる存在であることを、江藤はフェバアンテのヴォルフガング・ライゼンベルガーから聞かされた。そしてヴォルフはこうも言った。啓示軍の手に渡ったオルロフは、そもそも GT72 鉱山基地で SMITS^{スミッツ} が保管していたものだろう、と。江藤たちが GT72 鉱山基地を奪還した際、RAT が基地の下層構造を爆破して立ち入り不能にしたのは、おそらく黒龍隊がオルロフに接するのを防ぐためだったと察しがついた。そうまでして存在を隠そうとしてきたオルロフについて、元老院議員を名乗る男が今、自ら口にしたのだ。

洪秀連は江藤の出方に戸惑うことなく、話を進める。

「オルロフはコアの一種だ。他のいかなるコアも必ず複数が発見されているように、オルロフもまたひとつではない。しかし、ひとつでもあれば、暖炉の谷でのような現象を起こせる。我々には残念ながらそのノウハウが不足しているが、啓示軍にはそれがある。暖炉の谷でオルロフを失い、啓示軍は一旦作戦を断念した。だからこそ我々は、金星也^{キムソンヤ} がボスボラス作戦を実行に移すのを安心して見守っていた。だが今回、極東の戦力が手薄になるタイミングを計ったかのように、オルロフの所在を啓示軍に伝えた者がいる。その情報をもとに、啓示軍は部隊を派遣したのだ」

「九天軍か。奴らはオルロフのことも知っていたというわけか」

「直接的にはそうだろう。だが、九天軍にその情報を流したのが黒龍隊だという疑惑もある。暖炉の谷で啓示軍の洗脳を受けた可能性を、我々は完全には捨てきれないのだ」

「だからこそ門宮を使って俺を監視していたのだろうか？ 優柔不断な元老院め。まだ判定を下せないのか」

「我々の一部は非常に慎重なのだ。しかし私は時間を惜しんだ。だからこうして、少佐に会いに来た。黒龍隊にはオルロフを守ってもらわねばならない」

「どこにある。どうせブルーシティのどこかだろう」

「“ルート” 最下層に保管していた。だが、今は我々の管理下にはない。九天軍が奪ったのだ。もう察しがついているだろうが、あの右院議員拉致事件のときだ」

「そんな情報、俺たちは知らなかった。俺たちが九天軍に情報をリークできたわけがない」

「失礼。表現が正確ではなかったな。疑っているのは、オルロフの所在を知る櫛田大将とそれを欲する九天軍との仲を、黒龍隊が取り持った可能性だ」

「なんだと。大将がオルロフを知っていた？」

洪秀連は沈黙を以て答える。肯定の意であることは明らかだった。

それは江藤にとって全く想定外のシナリオであった。しかし言われてみれば、横須賀事変で英雄となり、軍閥派という一大派閥の御意見番にまでなった櫛田が、亜細亜連邦を裏で操る元老院と深

い関わりを持っていてもおかしくはない。

それでも、江藤は違和感を覚える。仮に榊田がオルロフの情報を持っていたとしても、黒龍隊が榊田と九天軍の仲介になる必要はない。榊田は穂積芳喜と親しい間柄だった。その娘、克とも。九天軍が穂積克を脱獄させた時点で、すでに榊田ないし穂積が九天軍と通じていたと考えるほうが自然である。そして克の脱獄は、黒龍隊がダーダネルス作戦から帰還し、榊田が上役として収まる前のことになる。「洗脳された黒龍隊」が関与する余地はない。

江藤がそのことを指摘すると、洪はまだ反論を持っていた。

「穂積克中尉は少佐に好意を持っていた。中尉が叛乱を起こした時点で、すでに少佐と榊田大将との接点が生まれていたと疑えるのだ。黒龍隊の設立場所にしても、穂積芳喜のいる猿之門に配置したことがまず不自然だ。機兵用の設備なら、猿之門の乗備機用設備を回想するより、霞ヶ浦の既存設備を拡張するほうがずっと効率的だ」

江藤は言葉に詰まった。自分が今日のはじめて告げられた穂積克の気持ちを、見ず知らずの元老院議員が前から知っていたとは、心穏やかでない。

「泡を食ったような顔の見本だな。当時の君の僚友から得た証言だ」

「誰に聞いた」

「それは重要な問題だろうか。君が思うよりもずっと、人は隠し事に敏感だ。君が部下に対して秘密を持ち続けているように、穂積中尉も君に対してだけは気持ちが露見しないよう努めた。それが限界だったろうね。相手のみならず第三者に対しても隠しおおせるとするのは、非常に困難だ」

「さすが隠し事の総本家は、一家言持っているな」

「それしきのノウハウがなければ亜細亜連邦など打ち立てられなかったよ。もっとも、私の代でやった偉業ではないのだが。榊田大将もその一大事業に加わっていたことは今更説明不要だろう。ともに亜細亜連邦を形作っていく過程で、必要に迫られて彼にはオルロフの情報を開示している。江藤少佐、君にも今、同じ事をしている。それは私が、私個人が、少佐と穂積親子、そして榊田大将の繋がりを疑っていないからこそできることだ。私は黒龍隊を糾弾するためにここへ来たのではないし、門宮から伝えさせたように、当面の協力体制を築きたいと考えている」

江藤は眼前の男を信じるべきかどうか、迷っていた。政界の黒幕としての元老院の所業は憶測や興味本位の言説が多くあてにならないが、元老院が SMITS や RAT にやらせている事業については、江藤は何度も身近に見聞きしている。その結果として江藤は元老院を嫌っていた。例えば、龍王という秘密主義の試験用機兵を実戦に出すのがまず信用できなかったし、八月の悪夢やその後の地殻変動で廃墟となった地帯をいくつも立ち入り禁止にして、二十年近く経った今でもまだ何か秘密の調査を進めているのも理解しがたかった。匿名の特権階級にそんな傲慢を許す社会そのものが気に食わなかったから、軍内で出世して改革を試みようという理想も抱いた。

しかし、この洪秀連という男は、多少キメすぎのきらいもあるが基本的には紳士然としていて、江藤にこれまでの秘匿情報をあっさりとは開示して、手を組もうと言っている。それが特権を持つ者ゆえの余裕だという点を差し引いても、まだお釣りが来る。

「九天軍に奪われたオルロフは今どこにある。見当くらい、ついているのだろうな」

「SMITS が検証したところでは、オルロフを組み込んだバルムンクシステムの効果範囲は、必ず

ハードウェアの周辺に限られる。つまり、横浜がバロッグの中心となっている現況から、実は奪われたオルロフがかなり近いところに留まっていたと推定できる」

「なるほどな」

興味深そうに頷きながら、江藤は胸中で舌を出している。オルロフが九天軍の手中にあるならば、それを持っているのは穂積克以外に考えられない。穂積は眩い光を放ってこの猿之門基地から消え去ったのだ。どうやらオルロフは時空跳躍の鍵になっている。江藤の経験からそれは言える。

江藤はちらりと外の様子に目を配り、門宮の姿を探した。門宮は穂積が消える瞬間を見ていたはずだ。予てより、雷麒麟を使って時空跳躍を任意に起こしベルリンに殴り込むという江藤のプランを、門宮は立ち聞きしているのだ。秘密にすると口約束はしたが、まだその契約が履行されているとは期待できない。むしろ、当然もう洗いざらい報告済みなのだろうと考えていた。しかしその割には、洪秀連の物言いは持って回っている。情報を開示するとは言いつつも、やはり依然として、オルロフの正体の核心には触れようとしない。それこそが重要だというのに。

「で、どうやって破壊すればいい？」

江藤はカマをかけた。オルロフの破壊方法はヴォルフもわからないと言っていた。碎けば碎けるのかもしれないが、それで機能が失われるとは限らない。そんな代物に対して、この男はなんと答えるか、それが知りたいのだ。

「その問いについては、正直、答えを持っていない。壊そうとしたことも、壊した実績もない」

「啓示軍が悪用しようとしても、破壊など考えなかったと言うのか？ 俺が見てきた光景とはずいぶん違うようだが、おまえさんたちは元老院派の連中にきちんと自分らの意志を伝えたことがあるのか」

「暖炉の谷でのことなら、あれは間違いなく、元老院議員の意志に則ったものだ」

「たいした自信だが、実際に見てきたわけではあるまい」

「たしかに私はそこにいなかった。しかし、別の元老院議員が当事者としてあの場にいた。元老院派の軍人たちはよく尽くしてくれた」

「アカスティン・マヒロフスキーか。権力に忠誠を誓うタイプには見えなかったぞ」

「その見方は私と相違しない。そして、彼が忠誠を誓う必要はない。彼こそが、暖炉の谷で直接指揮を執った元老院議員だ」

「――ふむん、そういうカラクリか」

思い返せば、それで納得の行く部分は多い。マヒロフスキーを説得しただけで元老院派の大半を味方につけられたのは、そういう裏があったのだ。

「アカスティンは、渋々とはいえ、勉強家には違いなかった。彼は SMITS の調べ上げたオルロフの特性をよく理解していた。少佐の勘違いは多分に知識の不足に起因しているのだろう。そして今回も、我々は破壊ではなく奪還を望んでいる」

「それならば、対応は歩兵がいいだろう。機甲化歩兵の一隊がすでに“ルート”に向かっている。オルロフを奪還したいのなら、RAT に援護を命じればいい。こうして俺をここで足止めして何になる？」

「必要な対応はふたつある。ひとつは、オルロフを取り戻すこと。このためには、少佐の指摘の通り、まず各組織が連携して“ルート”内の九天軍を炙り出さなければならない。もちろん RAT はすでに動いている。おそらく今頃は、現地で機甲化歩兵部隊と遭遇しているだろう。必要なら一般の

歩兵や警察にも加わってもらうから、戦力に不足はないだろう。――私がここへ来たのは、もうひとつの対応を進めるためだ」

「オルロフが作動する環境を破壊する、ということか」

「さすが専門家だ。オルロフも他のコアと同様、一定波形の電位や圧力に晒されなければ機能を発揮しない。啓示軍と九天軍は協力してオルロフ作動の環境を醸成している。侵入してきた啓示軍はただ制空権を奪ったのではなく、オルロフの機能を引き出すための補助的な BFG か何かを持ち込んでいるはずだ。機兵自体にその機能を付与しているかもしれない」

「つまり E6 を殲滅すればいいわけだ。やることは変わらない」

「いや、違う。環境を破壊するという視点は惜しいが外れだ。オルロフの制御は非常にデリケートだ。一旦起動したものを、不用意に安定作動域からずらすのは危険が多い。だから我々は動作環境をそのままに残し、制御を奪うのが最良だと結論付けた」

それが実現可能なら、確かに理想的だろうが、江藤は素直に頷けない。ノイエトーターとオルロフを引き離すために死闘を繰り広げたのは元老院配下の龍王ではなく、江藤たちなのだ。

「E6 のゾルダートか、あいつらの持ち込んだ外部装置が、オルロフを制御している考えているわけだな。それを奪えと」

「破壊よりも困難なミッションであることは理解している」

「戦場に出ない奴が、理解しているなんてほざくな」

「方法は別にもある。少佐が穂積中尉を説得して制御系を引き渡させれば、荒事に頼る必要はない」

「そいつは無理な相談だ」

「そのようだ。しかし幸いなことに、もうひとつ、手段は残されている。この将龍だ。君は雷麒麟のコピーとしてこれを作らせた。この機兵が目標仕様を達成しているのなら、オルロフの制御を奪うことが可能はずだ。ソフトウェアはこちらで用意したものがあつた。本来、龍王に適用する予定のものだったが……。今、日本には龍王がいない。本物の龍王は」

「前々から誰かに問い質したいと思っていた。龍王とは一体何なのだ」

「それは答えられる質問だ。しかし、よく考えてほしい。知ってしまえば、もうあとには引けなくなる。櫛田大將はそれを理解したうえで、ぎりぎりのところで情報を自らカットアウトした。マヒロフスキーは、その先までを知ってしまった。本人の意志ではなかったが、それは関係ない。知ったからには、そのまま元老院に加わってもらわなければならない。それが我々の情報管理体制だ」

「もし俺が一線を越えたいと言え、すべての情報が手に入るのか」

「元老院の掴んでいる限りの情報であれば。――しかし忠告しておこう。アカスティン・マヒロフスキーは元老院議員となったことで大きな自己矛盾と苦悩を抱えることになった。君もそうなりたいか？ それは、君の野望達成の道のりに自ら障壁を作るようなものだ」

「俺の元老院嫌いをよくご存知のようだな」

「組織は相克してこそ本来の理念を意識し続けることができる。だから我々は、亜細亜連邦という枠組みを作りはしても、直接の統治機構を作らなかつた。統治に追われれば本来の理念が失われることを、初代の元老院議員たちは何よりも恐れた」

「それは違うな。対立は、組織の存続を目的化してしまうのだ。そこでは理念も理想もいびつに捻じ

曲げられる。おまえたちはもっと現場を見るべきだ」

「見ているとも。だからこうして直接少佐へ会いに来たのだ。――江藤少佐、君とは目指すところに大きな隔たりはないと思っているのだが、どうして言葉が届かないのだろうか。これもまたプロトコルの相違か」

「何の話をしている」

「龍王のことだ。少佐の疑う通り、龍王はただの兵器ではない。オルロフのコントロールユニットとして作られたものだ。全身を一種のバウムクフィールドジェネレータとして機能させ、オルロフを制御する。貴重なコアをかき集めて試行錯誤を繰り返し、ようやく作動にこぎつけたが、サンプルを使い尽くしたため思うような数を揃えられなかった。それを補うためにコアの品質を落とした量産検討型が陸番機だったが、すでに、オルロフの制御能力獲得に失敗したことが SMITS によって立証されている。コミュニケーションが取れないのだ、オルロフと。その点、将龍にはまだ可能性が残されている。賭けではあるが、試さない手はない」

「意外とチャレンジャーなのだな、おまえたちは」

「そうでもない。判断基準となるデータは取らせてもらっている」

ピンと来て、江藤は将龍の足元を見た。そこでうつ伏せになっている龍王陸番機――オルロフと没交渉のできそこない――は、以前から電子戦能力を備えていた。模擬戦を行った際、将龍のバウムクフィールドの様子をこの機兵はじっくりモニタしていたのだろう。

「前々から将龍を狙っていたか。いや、雷麒麟を、だな。それですぐにインストールできるプログラムまで用意できているわけだ。ふん、気に食わん」

「気に入ろうが気に入らなかりょうが、やってもらわなくては困る。オルロフを敵に使われては取り返しの付かないことになる。改めての、そして最後の頼みだ、江藤少佐。将龍でオルロフの制御を取り返して欲しい」

「嫌だね。啓示軍や九天軍から取り上げるのは賛成だが、そんな危険なもの、市民に正体も明かせないような連中に返してやるわけにはいかん。俺が預かろう」

「ご自分の立場がわかっていないようですね、江藤少佐」

洪の口は動いていない。声は門宮のものだ。正真正銘の男モードの。それが拡声器から聞こえた。

江藤は驚愕のあまり言葉を失う。声が将龍の真下から聞こえたからであり、そして、龍王陸番機の BFG が再起動したのを感じ取ったからでもある。

パイロットが抜け出して死に体となっていたはずの龍王が動き出す。油断していた江藤は、足を持ち上げられた将龍の姿勢を立て直すのに専念するしかなかった。

「複座型だったと！？」

「正解、しかしタイムアウト」門宮の声が通信機に切り替わる。「――これでインストールは完了だ」

龍王が両手で将龍の頭を掴み、顔を近づけて睨みつける。すると将龍の機体管制システムがポップアップを表示し、江藤は将龍がハッキングを受けていたことを知る。

「ハードとソフト。これで準備万端整った。やってくれますね、江藤少佐」

「誰が言いなりになるか。俺は無理強いされるのが大嫌いな、困ったちゃんの軍人なのでな」

「同時に人情家でもある。――惟織ちゃん、やっておしまい」

「^{アイマー}了解！」

龍王を通じて、五百蔵の声が弾ける。そして、発砲音。単発。跳弾している。屋外ではない。ゴン太が江藤の膝の上で唸る。

五百蔵に電子戦装甲車を占拠されたのだ。

「撃つな！」

「耳元で大声を出さないでくださいよ、江藤少佐。ちょっと脅かさせてもらっただけです。いたいけな少女にはそれくらいのアドバンテージがないとね」

「誰がいたいけだ、誰が。そっちがそういうつもりなら、こっちにも考えがあるぞ」

江藤は操縦桿を巧みに操り、将龍のマニピュレータで洪秀連を捕まえようとする。しかし、洪は意外な瞬発力を見せてこれをおかす。江藤は操縦桿から手を離し、拳銃に換えようとしたが、五百蔵の第二の威嚇射撃によって機先を制される。

「北嶋、無事か」

江藤は封鎖していた電子戦装甲車との回線を開き、友の安否を確認する。

「すまん、江藤。油断していた」

画面に出た北嶋は奥歯を噛み締めているが、負傷はしていないようだった。様子からすると、おそらく他の部下たちもいまのところ無事らしい。しかし、車内の跳弾がいつまでも隊員を避けてくれるとは限らない。五百蔵は当然、わかってやっているのだろう。

江藤はスーツの襟を直している洪秀連を睨めつける。すぐにでも襲いかかりそうなゴン太を片手で押さえつけ、毛の逆立った感触に自らも肌を粟立たせながら。

「結局、これがおまえたちの流儀か。可能性の段階で命の数を秤にかけ、あっさりと一方を切り捨てる。他の方法を探りもせずに」

「やれることはやってきた。しかし敵も同様に手を尽くして来ているのだ。思い通りにはいかない。決断の時を逃せば被害は広がる。可能性の議論である以上、見通しについての異論はあるだろう。しかし、我々には亜細亜連邦という方便で三十億の民を救った実績がある。それを信用してもらえない」

気に食わなかった。八月の悪夢で絶望の淵に立った人々が、まるで自助努力をしなかったかのような口ぶりが。少なくない被害を負った人々が、より甚大な痛手を負った朋友たちに援助の手を差し伸べていたことに対する見落としが。それら人々の活力と善意なくして、元老院の力だけでは何も世界は変わらなかったに違いないのに。

しかし、江藤はこみ上げるすべての反駁を嚙下した。自分の意地の問題で、友を、他人を、巻き込むわけにはいかない。

「よかろう。将龍で、敵に奪われたオルロフの制御を試みる。取り返したオルロフは、おまえたちに渡す。作戦上知り得た情報は他に漏らさない。それでいいな」

「理解と協力に感謝する」

「江藤、どういうことだ。同期システムを使うのか。それは無茶だ。まだ実験段階なんだぞ。それを敵前でだなんて、危険極まりない！」

コンソールを叩いたのだろう、北嶋の収まっている画面全体が揺れる。江藤は、北嶋がそこまで感情を表に出すのを見て懐かしさを覚え、そしていっそう、無二の親友を危険に晒すわけにはいかないと意識する。

「おまえがいたから、こうして今の俺がいる。だから今度は、俺がおまえの未来を守るターンだ」
「やめろ、無茶だ。俺のことならいい。そのシステムの構成は俺と梶間先生が揃わなければ解明できない。彼らは俺を殺せないんだ」

「それは甘い認識だな、大尉殿」門宮がくつつつと笑う。「将龍のバルムンク系は雷麒麟のコピー。ならばオリジナルの設計者、保科晃から聞き出せば容易に必要な構成の抽出が可能だろう。他にもその研究仲間がいる。RATは彼らを探すべく動き出しているし、SMITSも断片的なソースからすでに解析にとりかかっている。いつまでもあなたがたが必要なわけではない」

「だが今は時間が惜しい、そうだろう？ 僕は江藤に作動条件を伝えていないし、ドキュメント化もしていない。江藤はお膳立てされた環境でシステムを起動させたに過ぎない。戦場の予期できない環境で同じことは不可能だ」

北嶋はなお食い下がろうとするが、江藤は無駄だとわかっていた。SMITSはすでに将龍が実用に耐えるという確証を得ており、だからこそ洪秀連は自ら姿を現した。将龍があっさりと龍王陸番機のハッキングを許したことも、所詮亜細亜連邦の機兵は源流を遡ればすべて龍王に至るという不利に起因しているのだろう。まだ自分たちは元老院の掌中にあるのだ。八月の悪夢が起きた二十四年前から。

「黙っている、北嶋。この俺がどこへ行こうと俺の自由だ」

言い放つと、にわかにながら身が軽くなった気がした。そして世界が明るく輝いて見える。

――輝きすぎている。

心の持ちようによる変化ではない。江藤は何が起きているか理解した。また、あれだ。

龍王陸番機が驚いたように将龍から手を離す。同様に異変を察知したらしい洪秀連は龍王に乗り移ろうとしていたが、江藤の手をすり抜けたゴン太がハッチを飛び出し、今にもジャンプする洪の足に噛み付いた。情けない悲鳴をあげて白のスーツ姿が装甲板から転げ落ちる。ゴン太も一緒に落ちる。

間一髪、江藤は将龍の手を動かしてそれを受け止めた。それで、与えられた猶予は使い果たしたようだった。

光が広がる。五感が入り乱れ、ミキサーにかけられ、そして、拡散していく……。

将龍は猿之門基地から消失した。龍王陸番機や、他にもバルムンクフィールドで内包していた、半径十メートル強の球状空間とともに。

九

照明の落ちた地下通路に、刹那、閃光が走る。坂元は角から覗かせていた頭を引っ込め、連れている議会関係者二名を壁に押し付けると、自らも防御姿勢をとった。ほどなく、背中を爆風が過ぎ去る。足元に転がってきた何かは、いちいち見るまでもなく、鎧蜘蛛の破片だろう。擲弾で吹き飛

ばされたのだ。

「今のはこっちじゃないぞ」

近くで機甲化歩兵の一人が叫んだ。坂元もそうだろうとは思っていた。手持ちの擲弾は残り少なく、阿賀の許可がなければ発射できないことになっていた。そして阿賀とはいえば、一団のもう一端側で防御線を張っている。坂元たちは分岐のない通路で前後を鎧蜘蛛に挟まれたのだ。曲がり角で身を隠せるだけ幸運だったが、しかし、大きな誤算には違いない。

「RATの野郎、潤沢に弾持ってるじゃねえか」

橋谷が通路の角から頭を突き出し、坂元たちを手招きする。目の前の鎧蜘蛛は掃討されたい。通路の奥にいた RAT によって。坂元たちが鎧蜘蛛に挟撃される位置にあったように、行く手の鎧蜘蛛の群れもまた、坂元たちと RAT に挟まれていたのだ。

「ほら、行くぞ」

橋谷や他の機甲化歩兵に続いて、坂元も動き出す。壁に叩きつけておいた二名も引っ張るが、片方がこれに応じない。また、男のほうだ。

「話が違うぞ坂元少尉！ バルムンクシステムさえ使わなければ、寄って来ないと言っていたじゃないか！」

野崎兜跋が悲鳴をあげるのも無理はない。実を言えば坂元が叫びたい心境なのだ。相対バルムンク反応の勾配に注意し、常に鎧蜘蛛の背を取れるよう位置取りしてきたはずなのに、すでに四度も鎧蜘蛛と遭遇し、うち三度は掃討している。残る一度は、先に RAT が片付けたのだ。そのとき初めて、RAT がすぐ近くで活動中であることを坂元たちは知った。

RAT と直接の交信はしていない。迫り来る鎧蜘蛛を駆逐するので、それどころではなかったからだ。しかし漏れ聞こえる肉声と無線通信から、おおよその任務内容は知れた。RAT もまた“ルート”内の九天軍をあぶり出しにかかったのだ。そしてそれを阻んでいるのが、鎧蜘蛛というイレギュラー。RAT はやはり鎧蜘蛛に対して有効な戦術を心得ていたが、坂元たちと同じく戸惑っていた。ここにいる鎧蜘蛛は、明らかに人そのものをターゲットとして襲っている。捕食するわけでもなく、ただ殺すために。

坂元にも何が起きているのか説明はできない。だから野崎兜跋を一発殴っておとなしくさせようとしたが、先に目標の頬を張ったのは連れの阿納真理だった。

「黙って歩きなさい、馬鹿者。九天軍に猛獣使いがいただけのこと。私たちが探しているのは言わば魔法使い。もっとたちが悪いものなのだから」

一喝された兜跋は渋々のていで列に続く。ヒールを脱いだ真理の足を気遣うのは忘れておらず、ただのダメ男というわけではないが、浮世離れした男だという坂元の印象は消えない。

もっとも、浮世離れといえばむしろ阿納真理のほうだった。どうやらこの女は九天軍が見せてきた奇術の種を知っている。その具体的内容をまだ口にしないのは、ただ忙しいばかりでもない。そのくらいの時間なら、RAT が鎧蜘蛛を殲滅するのを陰から見守っている間にじゅうぶんあった。

坂元の見立てでは、種の説明に対する忌避感を彼女は抱いているようだった。病弱そうだが気が小さいわけでないのはこれまでの言動から明らかで、その言い淀みぶりに坂元は既視感がある。

「あんた、うちの隊長の秘密を知っているな」

護衛する^{きよそ}挙措で近寄り、耳打ちする。もはや隠密行動など無意味なので、小さくカンテラを灯しているが、それに照らし出された美貌にはあいかかわらず表情が乏しい。何らの変化も見出すことができない。

「誰も秘密はあるでしょう。あなたの親友だって、あなたに対して隠していることのひとつやふたつはあります。そして、あなたに対しては言えないことを、第三者になら抵抗なく相談できるということも往々にして有ります。少尉の言う秘密が、私の認識上の江藤少佐の秘密と合致するかはわかりません」

「なら質問を変えよう。江藤博照は変則領域を感知できる。生身でだ。九天軍にも同じ能力を持つ奴がいる。機械的な補助を受けているかもしれないが、いずれにしても画期的だ。それがあんたの見せたい、奇術の種だろう」

「どうやら話が早いようですね」

真理は対話に応じるが、表情はやはり変わらない。

「問題は、感知できるのみにとどまらず、彼らが制御まで身につけているおそれが強いことです。そしてこの怪物たちのことを知って、私の抱いていた疑念はほぼ確信に近いところまで来ています」

なるほどそうかと坂元は膝を打った。九天軍が変則領域を操作したかはまだ確定できないが、鎧蜘蛛の本能に何らかの方法で殺人の命令を上書きした可能性は高い。あるいは^{オフエンバーレナ}啓示軍がいなくなった協力者を始末するべく投入したのかもしれないが、そうなることや、いずれかの技術で時空間移動が可能であることが示唆される。でなければ大量の鎧蜘蛛がこれまで見つからずにいたはずがない。

どのみちこの奥に踏み入る価値はある。鎧蜘蛛を操るにせよ、時空転移を可能にするにせよ、革新的なバルムンクシステムには違いない。仮にそれを実現しているのが機械でなく生身の人間となれば、なおさらだ。後者の場合は確実にこの手で捕縛、あるいは抹殺する。それが黒龍隊を守ることになる。そのために坂元はここへ潜った。

前触れ無く、前方で閃光。

坂元は伏せ損なった。光のなかに、瀧名亜璃亜の姿を見た気がしたのだ。

見間違いだとはすぐに判明した。鎧蜘蛛の吐いた糸が小柄の RAT 隊員に絡みつき、そのたなびきが光のなかで亜璃亜の髪に似て見えただけのことだった。前方の RAT は奇襲してきた鎧蜘蛛を半ば自爆状態で屠り、その血路を橋谷たちが踏破していく。坂元も兜蹴や真理を連れてあとに続く。頬を血が垂れる。頭のどこかを破片で切ったようだった。そういえばヘルメットを鎧蜘蛛の爪に奪われて久しい。銃撃のたびに強まっているはずの臭気も気にならなくなった。

RAT に追いつく勢いで進撃したが、通路はそこで分岐点になっていた。直進か、右折か。RAT は直進した。子供くらいの全高の鎧蜘蛛が二体、それを追っている。RAT はただ脅威から全速力で逃げていただけかもしれない。橋谷は進む道を迷って立ち止まった。

「こっちです」

真理が目を閉じ、耳を塞ぎながら、右折側へと進む。坂元はその体から離れず先頭に出た。

――やはり彼女は変則領域を感知している、江藤ほどの精度ではないようだが。

背後では橋谷が阿賀を呼ぶ声がする。背後の鎧蜘蛛も片付いたようだ。味方の被害は不明。どう見ても五人以上の姿が減っているが、一部は戦闘のどさくさで RAT と合流しているかもしれない、早計に脱落したとは言えない。言いたくもない。先ほどの挟撃状態あたりから、李峰國の姿も見えないのだ。

真理の誘導の結果、一行は観音開きの鉄扉の前に辿り着いた。他に分岐路はない。

「この奥だ、間違いない」

橋谷が叫んだ。ライフルではなくセンサープローブを前に突き出している。

ちょうど追いついた阿賀を、その場の全員が見た。囲む視線の中に峰國はいない。迷子になっただけだと思うことにして、坂元は鉄扉の向こうの敵と、阿賀の口の動きに集中する。

「突入」

阿賀の静かな号令が、機甲化歩兵を突進させる。鉄扉は破られ、奥に広がる三十メートル四方のフロアになだれこんで、部屋の中央を半包围する。そこにはセンサーで感知した人間がいるはずだった。

銃撃の出迎えはなかった。そして確かに部屋の中央には人がいた。椅子に縛られている。近くに他の人影は見当たらない。

「穂積少将……」

阿賀が呻いた。穂積芳喜が猿之門基地司令であった時代をもちろん彼は知っている。他の多くの機甲化歩兵も同様である。これだけ証人がいて見間違いの心配はない。かつてのボスが、いかに痛めつけられた姿をしていようとも。

絶命していてもおかしくない有様だったが、体温が感知されたのだから、まだ息はある。数人がその縛めを解こうと足を踏み出したが、阿賀ほかベテラン勢が制止した。いちばん助けに走りたいのは彼らだろうが、同時に熟達した戦士である。ここにいるべき敵がないことを、忘れてはいない。「上だ！」

誰かが気づいて叫び、銃口が一斉に追従する。

天井は機兵が屈まずに入れるくらい高かった。その天井に近いあたりに、フロアを見下ろす張り出しがある。まさに機兵用の試験場に酷似した構造だった。

そして、張り出しの特等席から見下ろしているのは、数人の将校だった。そのなかの中央に立つ、柔らかな線を持つ人影を坂元はスコープで拡大する。穂積克に相違なかった。拷問にかけた実父ともども機甲化歩兵を見下ろして、不敵に微笑んでいる。

「ようこそ、機甲化歩兵の皆さん。RAT より早いとは予想外でした。その老体ならお返ししますよ。もう用は済みましたから」

「貴様、実の父になんということを」

阿賀がガラス窓に向かって対物ライフルを発射する。命中すれば捕縛どころではないのだから、とても冷静な判断とはいえない。部下の仇に対する、怒りに任せた行動としか思えなかったが、着弾は穂積克の上方へずれた。ガラス窓だけが碎けて飛び散る。

「ふふ。弾薬は温存したほうが身のためだと忠告しておきましょう。そこに今から鎧虫機の最終便を呼び出します。離れないと危険ですよ」

穂積克の発言は、ブラフにしては説明不足の感が強かった。ガイチュウキというのが鎧蜘蛛のこ

とだと察した坂元は、満身創痍の穂積少将を連れ出しにかかったが、すでに橋谷たち数名が動いていた。椅子ごと掴んで部屋の入り口へと引きずっていく。同時に、数名の若手がバルコニーに通じる階段を押さえに走る。彼らはおそらく、克の発言の意味を理解していない。

「阿賀少佐、下がりましょう。奴らは変則領域を使ったワープ装置を実現している！」

「ワープだと？ そんなことが……」

「見ればわかります。今は下がって！」

坂元は、この部屋の広さには理由があると考えていた。それが設計者の思惑であれ、あとから利用した九天軍の思惑であれ、ここに鎧蜘蛛が多数収容できる事実は変わらない。

背後から真理の呼ぶ声がある。それに後押しされたのか阿賀は一時撤退を決意した。いずれにせよ克らの退路に回りこむにはこの部屋を出る必要があり、阿賀は冷静さを取り戻してそちらを意識したのかもしれない。

克たちは逃げるでもなく、割れたガラスの向こうで階下の様子を見守っている。その奥に、坂元は瀧名亜璃亜の姿を見つけた。目が合う。亜璃亜はくすくすと笑っている。坂元は発作的にライフルを向けようとしたが、部屋の中央に強烈な光が発して、それを阻んだ。閃光弾のは光とは違う。――影がないのだ、どこにも。拡散反射の激しい空間でもないはずだが。

「熱量なしだあ！？」

橋谷が叫んでいる。たしかに対流も輻射も感じた覚えがない。膨れ上がってゆく光の塊から、ふと、坂元は目を逸らした。逸らした先の通路に全く光は見えない。しかし、部屋の中央を凝視する阿賀たちは一様に眩しそうに目を細め、あるいは手をかざして光を遮っている。ただひとり、阿納真理だけが普段どおりに目を開いて、そこで置きつつある何かを見つめている。

坂元は悟った。これは網膜に届く信号ではない。脳が何がしかの経路で受け取った情報を、光として錯覚しているに過ぎないのだ。だから影もなければ、反射光もない。熱が伝わることもない。西フェルガナ基地で、龍のコクピットにいてもこの光が見えたのは、防眩フィルターの性能限界が理由ではなかったのだ。

――これが、江藤博照の見ている世界。

突然、光は強い圧力を伴って拡散した。坂元は錯覚でも残光があるのかという意外な発見とともに、フロアに出現した巨大な手足もまた見つけていた。その手足は、昆虫や甲殻類のような曲線や凹凸を持ってはいない。スケールこそ鎧蜘蛛の大型クラスと近いが、質感ほどのクラスとも明らかに異なっている。その四肢は見るからに鋼板製で、平坦な面を持ち、つや消し塗装を施されている。

鎧蜘蛛の姿は一切なかった。現れたのは二機の機兵。

将 龍。そして龍王陸番機。

十

温かい。頬が濡れる。肌にかかる鼻息がくすぐったい。

江藤博照はゴン太によって起こされた。ここが宿舎のベッドではなく機兵のコクピットシートだとわかって、冷水を浴びたようににわか覚醒する。

また、飛んだのだ。もう四度目になるが、意識まで飛んだのはまだ二度目。倦怠感がある。また周りの世界では半月が過ぎ去ったのではないかと、江藤は慌てて外界の情報を探る。開け放しのハッチから、それは容易に得られる。

目の前には龍王陸番機ロンワンがいた。しかし場所は見慣れぬ屋内である。空間的に移動したのは間違いない。時間軸のずれは、とにかく外界の時計を見なければわからないが、部屋はほとんどがらんだうだった。時計に限らず調度の類がない。格納庫にしては設備が少なすぎる。ただひたすらに広大で、こうして機兵二機を内包してまだ余裕がある。

将龍ジャンロンに身じろぎさせ、少し視野を上げたところに、割れたガラス窓があった。その窓はバルコニーのように壁から突き出ており、奥には電灯の光が満ち、人影がある。

江藤は自分が動物園の檻に入れられたような気分になり、あながち間違いではないと思った。どんな操作に巻き込まれたかはわからないが、本来、ここは江藤たちとは別の何かを転移させるべき場所だったはずだ。その成否を観測するのがあのバルコニー。だとすれば、人影はバルムンクシステムの操作に携わる者たちだ。

そして江藤は見た。勝ち気そうに腕を組んで立ちながらも、呆気あっけに取られた目を隠せない穂積克の姿を。

「よお、穂積。俺を呼びつけたのはおまえか」

驚いているからには穂積克にとっても想定外の事態に決まっているのだが、江藤は敢えてそう尋ねた。克の反応を見たい。それで相手の手札がどの程度強いのかわかる。

克が前かがみになり、ピアノを弾くかコンソールを操作するような手つきを見せた。おそらく後者だったのだろう、ほどなく、室内の埋没型スピーカーから彼女の声が聞こえてきた。

「来てくれたのですね、江藤少佐。こんなロマンチックな登場をなさるとは思いませんでしたが、嬉しいです。感激しています」

「ちょ、ちょっと待て。誰が誘いに乗ると言った。俺はおまえを止めに来ただけだ。あのときと同じようにな」

狼狽しつつも、江藤はなんとか己のペースを保つ。これほど面倒な相手だとは思っていなかった。それは、穂積克を女性として、生殖相手の候補として意識していなかったからだ。年頃の女性に対する江藤の苦手意識は一般に軍人に対しても作用する。例外であるからこそ、克とは友人になれた。そう思っていた。その点に関して江藤は克に負い目がある。負債を払うためにも、ここでしっかりと穂積克の罪を止める。

「あのときとは違います。以前の私は、市井の人々の見えないところで神のように君臨している元老院という集団が許せず、行動を起こした。反抗期のようなものです。人間誰しも聖人君子には成り得ず、この世に全幅の信頼を置ける為政者などいないのだと、私も気づいてしまった。モップの乱と渾名あだなされる一件のことは覚えておいででしょう。自治を守りたいロシアの片田舎の地方政府が、連邦の介入を恐れて非常事態の報告を怠り、露見してからも援助を拒み、バログに覆われたままライフラインを脅かされた市街では暴動が激化した。あれが亜細亜連邦の縮図だと悟った時から、私の革命の計画は始まりました。――けれども、そんなママゴトは当然うまくはいかなかった。同志は一網打尽にされ、私はあなたに捕縛された。本当なら一緒に闘って欲しかったあなたに。でも

なにより悲しかったのは、あなたが私を捕えただけだったことです。修正の鉄拳も、説教もしてくれなかった。私は牢獄でひとり、己の間違いを反省しました。独りで……」

克はまるで他に人などいないように語り続ける。しかし江藤は、彼女の心情の吐露だけに注意を払ってはいられなかった。部屋の左右の壁から、正確にはその向こう側から、変則領域の気配を感じる。この部屋に何かを転移させようとしたバルムンクシステムの出力端末がそこにあるのだろう。それが作動したままということは、ここに大人しく座っているのは得策でないことになる。江藤はまだ、転移先の空間にあった物質がどうなっているのか掴んでいない。元の時空間の物質と置換されるのか、押し出し式に排除されるのか、いずれにしてもいきなり実体験するのはぞっとしない。「けれど私は変わりました。私は元老院といえども神でも仙人でもない常人の集まりに過ぎないことを理解しました。そして正しい認識の下に改めて改革案を練った。元老院に今の地位を約束している優位性を消滅させるのは、実は簡単なことでした。彼らの秘密……、オルロフの存在を公知のものとするばいい。ただそれだけなのです」

「それで一連のテロに及んだのか。たかが情報開示のために何人を犠牲にした」

「たかが、と言いましたね。その情報の秘匿のために何人が殺されているか、江藤少佐は知らないのです。私は留置場と呼ばれるそこで、つぶさに見てきました。次は自分だという恐怖と闘いながら」「オルロフのことなら俺も掴んでいた。俺がちゃんと暴いてやる。だから今すぐにこんなことはやめろ」

「できますか？ 暖炉の谷から帰った黒龍隊を誰もが狂人扱いした。人々を説得するには、実際に超常的な事象に直面させなければ駄目なのです。八月の悪夢を予言した者があったとして、誰がその話を信じたというのでしょうか」

「あれを、オルロフを安易に扱うな。危険すぎる。おまえはそれを知らないんだ」

「鎧虫機のことですか。とりあえず刷り込み程度の制御はできているので安心してください。あれの正体についてはゆっくり皆で考えましょう。きっと八月の悪夢の原因についても多くの示唆を与えてくれるはず。その検証の過程で元老院の情動的優位性は失われ、必ず亜細亜連邦は良い方向に変わります。いえ、世界がといっても過言ではないでしょう。私は啓示軍オフエンバーレナに対しても同じことをやってみせるつもりです」

「それで革命のつもりか、ばかばかしい」

それは江藤が一時は望んだものだった。しかし、考えを変えた。

「俺にできなかったことを……、いやそれ以上の大業を、おまえがやってのけるといえるのか」

「もうあの頃の穂積克とは別人になったと理解してください。その証拠に、ほら、私はその老いぼれのことをもはやどうとも思っていない」

克が示した先を、江藤は将龍の後方監視ディスプレイで追う。そこには椅子に縛られたボロ雑巾のような人間がいた。機甲化歩兵たちに抱えられているが、まだ息があるのか怪しい。

「父です」克は言った。「その血の繋がりゆえに憎んだ時期もありました。けれどそれも、牢獄の中で私は捨ててきました。遺伝子の継承などにこだわっていても無意味だと気づいたのです。父のくれた形質はあなたの気を惹く材料になり得なかった」

「穂積、おまえ、それはもう病気だぞ」

機甲化歩兵たちの、そしておそらく坂元の耳目があることを意識して、江藤はとにかく克を黙らせねばと慌てた。しかし克は平然としている。

「いかにも、恋煩い^{わづら}です。私はあなたと一緒になりたくて、変わることを決意しました。遺伝では得られなかった形質を手に入れた。あなたと同じになった……」

そのとき、克がなにかのボタンを押すのを江藤は見逃さなかった。傍らにいた軍服姿の男達がそっと離れる。そして江藤は光を見た。そして五感に変換され損なった何かが江藤の肌を粟立たせる。ゴン太が尻尾を丸めてリアシートに逃げ隠れる。

次の瞬間、江藤の目前に穂積克がいた。空中から落下してきたように見えたが、着地の音は小さかった。将龍の胸の前あたりの中空に出現したか。

克は江藤に手を差し伸べながら、コクピットの中へと踏み込んでくる。ゴン太が背後で怯えた声を出している。江藤は拳銃を手にとろうとしたが、いつの間にかホルダーから取り落としていたようだった。手が虚空を掴む。

手袋をしていない克の地肌が、江藤の頬に触れる。巨躯の隅々まで震えが走った。

「——おまえ、何をした。自分の体に何をした」

克はほほえむ。

「微細なコアを埋め込みました。そして私の全身の神経系がコアを制御するバルムンクシステムとして機能するよう、インプラント手術を受けています。SMITSは囚人を対象に同様の試験を繰り返したようですが、成功例は私だけです。私がただひとり、あなたと同じになれたのです。コアの特質を有する新人類に。だから私も今や変則領域を感じ取ることができる。相対バルムンク反応センサーの出力信号を、脳はきちんと受け取ってくれます」

我慢の限界を超え、江藤は頬に触れる異物を振り払った。

「それではサイボーグではないか！」

「お好きでしょう？ サイボーグとか改造人間とかの活躍するお話は……。先天性か後天性かだなんて、それが重要な問題ですか。生まれ持ったの形質や地位に対する執着は、不公平しか生みません。それを是正するための個々の努力を、少佐は否定するのですか。虐げられ、差別を受ける者たちは、一生その地位に甘んじていると……？」

「それもひとつの解決策だ。紛争を生まないためのな」

断言したのは、第三者だった。龍王が体を起こし、マニピュレータが穂積克を狙って動く。その指先が鋭くすぼめられているのを見て、江藤は咄嗟^{とっさ}に克を庇^{かば}った。龍王の爪が将龍の腕の装甲に弾かれる。

「邪魔をしますか、江藤少佐。告白されて情が移ったんですか？ まったく現金なんだから」

「黙れ、カマ野郎。俺まで串刺しになるところだったろうが」

将龍と龍王が力比べを始めると、周囲の動きも凍結状態を抜け出した。バルコニーに残る数人が武器や荷物を抱えて姿を消し、将龍の足元にはイダテンを身に纏った男たちが殺到する。しかし銃口には迷いがある。それこそ、江藤に当たりかねない。

「江藤少佐、どこを狙いますか」

一団の中から坂元の声が聞こえたので、即座に叫び返す。

「克はいい。龍王を黙らせろ。それから、なるだけ早くここから退避だ。ワープシステムはまだ動いているぞ」

江藤の気がかりはそれだった。克たちが本来呼ぼうとしていた何かが、ここへ現れようとしている。

機甲化歩兵の数人が江藤の指示に従い、龍王に牽制射撃を加える。機兵の操縦にはあまり慣れていないのか、複座型の仕様上の制約か、門宮はあっさり龍王を転倒させた。倒れた背中がすぐに壁につかえる。地下空間としては広大だが、機兵にとってはその程度のものだ。そして、続く通路はもっと狭いに違いない。

「こっちも機兵を捨てんとだめか」

ひとりごち、リアシートのゴン太を抱き上げようとする江藤に、ハッチのへりにしがみついていた穂積克が再び手を伸ばす。

「私に掴まって。地上まで連れて飛びます」

「遠慮する。あいにく部下の迎えがあるんでな」

「逃がすと思うんですか」

克が有無を言わず抱きついてくる。予想せぬ動きに江藤は抵抗し損ねた。血と汗の臭いに混じって香水の香りが鼻腔をくすぐる。背中に回された手に、克は何かを握っている。スイッチを押したような振動が伝わり、江藤は克の全身から変則領域の発生を感じ取る。しかし体は対処行動に移れないでいた。

これほど強く自分を抱きしめてくれる女性が、かつて母以外にいたのだろうか。

理屈ではない部分で、江藤は自身を受け入れてくれる存在として克を意識した。後天的な肉体改造がなんだというのだ。心臓が弱い人間はペースメーカーをつける、歯が抜ければ挿し歯をする、それら施術と同じではないかという考えが、肉体の直感を追認する。

克の体がゆっくりと輝きを放つ。江藤は自分の体にもそれが伝染していることに気づいた。たしかに、過程こそ違えど、克は自分と等しくなったのかもしれない。

足元でガスの噴き出す音がした。下を見ると、下半身がもくもくと煙に覆われている。バロッグの靄とは異なる。粗い粒子が空中に浮遊することによる、可視光のブロック。発煙筒だ。源紅麗葉から投げつけられた。

その煙の中から灰色の塊がジャンプして、江藤の体を駆け上った。すると克が短い悲鳴をあげて体を離れた。左耳を押さえている。指の隙間から液体の筋が垂れる。それでも克の体の輝きは消えていない。

「江藤！」

アンカーショットを使って登って来た阿賀正尊が、穂積克の右手に何か握られているのを見て取り、即座にその上腕を銃で撃った。制止できるようなのろい動きを阿賀はしなかった。

克がぐもった呻き声を上げ、よろけてハッチの端から転落する。江藤には克が自ら身を躍らせたように見えた。コンソールを押しつけてシートを抜け出し、ハッチの下を覗き込んだが、部屋の床に克の姿は見えない。目を丸くした数人の機甲化歩兵たちが残るだけだ。

再び飛んだのだ。

「大丈夫か、江藤」

「なんとかな。ゴン太のおかげだ」

ゴン太が江藤に抱きついて尻尾を振り、これを見た阿賀はハッチに乗せようとしていた足を慌てて引っ込める。

「お、俺は降りる」

「それがいい。早くこの部屋を出るんだ。次の客が来る」

まだ茫然としつつも、江藤は部屋の両サイドから感じていた変則領域の感覚が、依然健在であることを確かめた。近い場所にオルロフが接続されている可能性が高いと考えていたが、克が単身移動したところを見ると、システムの中核は別の場所にあるのかもしれない。少なくとも将龍にインストールされたオルロフの制御プログラムはバックグラウンドで走るままだ。

阿賀がアンカーショットをリリースし、江藤も将龍をできるだけ部屋の隅に動かしてから、ゴン太を抱いて昇降用ワイヤーで床に下りる。すると、背後に立つ長身の影があった。

「少佐は穂積中尉と行動を共にするかと思ったよ」

ファイティングポーズを取りながらふりかえると、降着した将龍の影に隠れるように、白いスーツの男が立っていた。江藤は洪秀連^{ホンシュウレン}を時空転移に巻き込んでいたのを忘れていた。

「あんたか。悪いが今はオルロフのコントロールを試している暇がない。あんたも早いとこ、門宮に護衛させてどっかに消えるんだな。あいつらに事情を説明するのは難しい」

「懸念は無用だ。RAT^{ラット}が迎えに来てくれる。それよりも聞きたい。江藤少佐、君は変則領域を感知できるのか」

江藤は洪の顔をじっと見つめた。抱えるゴン太もまねをする。洪秀連がまっすぐ見返してくるのを数秒間観測してから、江藤は口を開いた。

「いかにもそうだ。文句があるか」

洪秀連は破顔した。

「どうやら、我々にはまだ勝機があるようだ。私と来てくれ、少佐。ケーニヒを出し抜いてやろう」

そのときの白服紳士の笑みを、江藤は前にどこかで見たような気がした。よく思い出そうとして面長の顔を凝視するが、すぐにその集中は途切れることになった。

「真理さん！」

腕力の足りないような青年の悲鳴と、追って、人の倒れるような音がした。部屋の入口の方だ。江藤は人前に出られない元老院議員の放置を選んだ。あの不甲斐ない声は野崎兜跋に違いなく、すると倒れたのは佳人薄命の印象が強い阿納真理と相場が決まっている。

果たしてふたりはそこにいた。阿賀の部下二名が寄り添い、脈やらを取って、大事はなさそうだと安堵している。江藤の視線、といよりも巨大な質量と輻射に気づいたものだろう、兵士の片方がこれは貧血でしょうと診断してみせる。

しかし、へたりこんで頭を抱え込んだ阿納真理の動揺ぶりは貧血で説明できるものではなかった。「どういうこと……。おかしいじゃない、アキラ。なんで今頃……」

真理が何もない壁のほうを睨む。まるで今にも崇ろうという幽霊の視線である。それゆえに江藤は理解した。

「阿納、戻ったんだな」

かつて変則領域を捉えたというその感覚が。

江藤もまた、にわかに存在を顕示しはじめた味の濃い変則領域を肌で感じている。ユニークだが、初めてではない、この感覚。

背後では将龍が耳障りな高周波振動を始めていた。

十一

坂元は逃げた九天軍の、もとい、穂積克の一味を追ってコンクリート造りの狭い通路を走っていた。阿賀の部下たち五人が一緒に走っている。別経路で先回りを狙っている者も何人か居るはずで、追撃に従事している味方の総数はわからない。ただ、追撃開始からすでにふたりが負傷と機器損傷で脱落した。やったのはいずれも瀧名亜璃亜だ。これまでが嘘のように、鎧蜘蛛とは遭遇していない。本能に従って地上を目指しているのかもしれない。地上にはコアがごろごろしている。

亜璃亜は制服姿の男たちを先に行かせ、殿軍を務めている。得意の炭素^{カーボンブレード}刀を欠き、鉄のフレーム材を代わりにしているようなのだが、驚くべき戦闘センスである。最初こそ少女への銃撃をためらっていた機甲化歩兵の面々だが、やがて、亜璃亜の足が止まればすぐにでも発砲するようになった。あれが危険な獣だとわかったのだ。味方のひとは肩に重傷を負わされている。高い授業料だ。しかし、亜璃亜は依然として追っ手を翻弄し続けている。

「イダテン、パージします」

対物ライフルなどの重火器に固執する限り、亜璃亜には追いつけない。そう判断した坂元は少しの間足を止め、着備機を脱ぐ。

周りの機甲化歩兵は坂元に倣^{なら}わなかった。イダテンを外して深追いしたところへ乗備機が待ち伏せでもしていたらひとたまりもないので、彼らの判断のほうが堅実である。しかし坂元はどうしても亜璃亜を捕捉したかった。借りを返さねば気が済まない。

まるっきりの私情というわけでもない。亜璃亜の捕縛は亜細亜連邦軍にとっても益があると坂元は考えている。穂積克は九天軍の日本における最高責任者、蒼天を謀殺し、自らが戦力を引き継いだ。そのエージェントとして重要な働きをしたのがあの少女、瀧名亜璃亜。彼女に利用されて蒼天に直接手を下したのが坂元自身。

元はといえば、坂元は蒼天を殺す気ではなかった。変則領域を予知するという噂の占い師が、蒼天と同一人物であるならば、その力の実在を確かめたかったのだ。しかし、結果としては、坂元は一切の対話なく蒼天を殺した。基地を襲って来たからには最早対話の余地など無いと諦めたのだ。――決して、現場で亜璃亜に唆されたからではない。

とはいえ、亜璃亜が教唆の意図を持っていたことは間違いない。RATは亜璃亜を九天軍幹部のボディガードであるとして警戒していたし、今も穂積克と一緒にいた。穂積克が乗っ取ったあとの組織の中核メンバーという見立てに、坂元は自信がある。

亜璃亜の背中が曲がり角に消えた。坂元は敢えて減速せずにつっこむ。待ち伏せはなかった。ただ、その先が三叉路になっており、どこへ消えたかわからない。

「分岐点です。坂元少尉、右へ向かいます」

通信機に向かって宣言したが、どうも通じていないようだった。構わず、坂元は追撃を続ける。右を選んだのに理由はない。どれがいいかと迷って立ち止まれば、たとえ正解の道を判別できようとも、もう追いつけない。

背後から足音が聞こえる。機甲化歩兵が鎧を脱いで追いついたか、あるいは峰國^{フエングオ}が坂元の通信機の発信に気づいて合流したかと、坂元はちらりと振り返る。そしてミスを激しく悔いた。

振り下ろされたフレーム材が坂元の手から拳銃をはじき飛ばした。痛みを感じる間もなく、坂元は太腿のナイフに手を伸ばす。その間に、亜璃亜はフレーム材を引きずるようにして懐に飛び込んできた。そしてフレーム材を手放し、坂元が懐に持っているもう一本のナイフを奪って、喉仏に突きつける。

「ほら、殺せる」

坂元の顎の下で、亜璃亜が笑う。おまえに俺は殺せない、という坂元の台詞^{せりふ}を根に持っている。

荒い呼吸に応じて動く喉が、周期的にナイフの刃に当たる。亜璃亜もまた息を乱していた。不意に下半身が充血するのを、坂元は冷静に自己観測する。

「なぜ穂積に手を貸す。九天軍は不要だと言ったよな。あれは嘘か」

堅気に戻る道を、桃源協は与えてくれようとしていた。それを蹴って、亜璃亜は猿之門基地襲撃に合流したのだ。そして九天軍に対する裏切りを働いた。

「克は仲間。互いに利用しあえる仲間。九天軍は道具。使いやすいように、ちょっと手直した」

「あいつらは亜細亜連邦も世界も手直ししようとしている。無謀なことだ。そんなことに付き合っていたら、おまえの離れ離れの友達探しはできないぞ。亜璃亜、おまえは利用されている。克と、あのエセ占い師たちにだ」

「あんたもそうすればいい。わたしはあんたを利用してるんだから。――何をしてほしい？」

亜璃亜が顔を寄せる。鼻梁が触れそうなほど近く。

「教えて。オルロフとは何だ。テレポート用のコアか」

「Teleportaiton? たぶん違う。あれは通信機^{コミュニケーター}のようなものだと、克は言っていた」

「コミュニケーター？」

詳しく聞かねばならない。しかし、来し方より新たな足音が迫っていた。

「見せてあげる。わたしを追ってくればいい」

亜璃亜は細い舌を出して坂元の唇を舐めた。そして喉に当てられていたナイフが、^{ほの}灰かに伝わる体温が、離れていく。

「誘っているのかよ」

坂元は少女の背中を追って再び走り出した。努めて速力を上げる。追いつくためにではなく、後続を引き離すために。

それから五分ほど走り続けカロリーを多大に消費した坂元は、その見返りとして、味方を撒いて亜璃亜に追いつくという成果を得た。

亜璃亜が立ち止まったその部屋はやけに明るい。中央で琥珀色に光り輝く物体がある。

いや、これも本当の光ではないのだと、坂元は悟った。これは人間の脳の錯覚。表現を変えるなら、未知の信号に対して脳が吐き出したエラー。亜璃亜にもそれは見えているようだった。目を細

めつつ、その物体に歩み寄る。

「これがオルロフ」

亜璃亜は手でそれに触れた。人間大の六角柱だと、輝きに慣れた脳が輪郭を読み取る。どうやら幾らかは本当に発光しているらしい。部屋には照明がないのに、亜璃亜の肢体が細い影を落としている。「――そう。こちらはもう少し持たせる。克は急いだほうがいい。ケーニヒはそろそろ我慢が利かないと思うから」

背中を向けた亜璃亜が何かに話しかけた。昨日は通信機を持っていなかったが、今日は違うのか。坂元はオルロフが体感できる熱を発していないことを確かめながらゆっくりと近づき、少女の肩に触れる。

「誰と話している？」

やはり亜璃亜は通信機らしきものを持っていない。骨伝導マイクでも仕込んでいるのかもしれないが、しかし坂元の軍用通信機でさえろくに電波を受信できていない。一方的にしゃべるだけなら自由だが、会話が成り立つのはおかしい。

見返る亜璃亜の瞳の色は薄く、オルロフの輝きを写して猫のように怪しく光る。

「触ってみればいい」

言うなり坂元の手を取り、光る六角柱へと導く。抗おうとする理性を、興味が振り伏せた。坂元は掌でそれに触れる。亜璃亜の左手がそうしているように。

微細な糸が爪の間から脳へと突き抜けた、ように感じた。その筋状の痛みを意識したのは一瞬のことで、こみ上げる嘔吐感にすべてが乗っ取られ、坂元は膝をつく。脂汗を流し、這い^{つくば}蹲るに至るまで、どれほどの時間がかかっただろうか。坂元はスローモーションのように引き伸ばされた時間のなかで苦しみに苛まれたが、おそらく実時間としては数秒ほどだろうと、わずかに活動を続ける理性の部分で押し量る。

まるで頭の中をフォークで掻き回されているようだった。自分が獣のような悲鳴を上げていることに、坂元はしばらく気がつかなかった。亜璃亜の掌が額に触れて、その柔らかな感触が、彼の五感を平常に引き戻すまで。

「なんだ、これは」

ひとしきり息を整えてから、坂元は声を絞り出した。

「だから、オルロフ。ニョイリンだと呼ぶ男もいた。どこの言葉かは知らない」

「如意輪……。意味深な名だ。しかし、これがコミュニケーターだとは信じられないな。俺には苦痛しか伝わってこなかった」

「たいがいの男はそう。あんたみたいになるだけ。女のほうが通じやすいと、ケーニヒは言っている。でも、わたしや克は特別。電話のようにこれを使えるのは」

「さっきは穂積克と話していたのか」

「声に出す言葉で通じるのとは、違った感覚。あまり順番はない。思ったままが、流れこむ。だから、余計な思いが混ざらないよう注意が必要。わざわざ声に出すのはそのため」

亜璃亜の受け答えから、坂元はだんだんと仮説を組み立てていた。オルロフが時空間の離散的な移動に重要な役割を果たしているのは間違いないが、オルロフあるいは如意輪と呼ばれるそれ自体

は、コミュニケーターだという。

それはすなわち情報の転送を行うコア、と位置づけてみる。バルムンクフィールド内に存在する物質の分布の情報を正確に取得し、これを発信側から受信側へと転送することで、物体が時空間を移動する現象として観測される。発信側と受信側の質量とエネルギーがどのように交換されるのかはわからない。

あるいはそのギャップの大きさが、発信側での消失と受信側での出現の、第三者視点での時間差に比例するのかもしれない。黒龍隊が西フェルガナ基地から消滅して各地で意識を取り戻すまでの間、周りの世界では半月もの日数が経過していたが、今日の将^{ジャンロン}龍については転送にかかる時間が数秒、長くて数分程度に過ぎない。

オルロフなる特殊なコアがそのような機能を持つという仮定をひとまず真として、次に考えるべきは、どうやってそれを制御できるかである。

世界で見つかっているのコアのほとんどすべてについて、同様のアプローチがなされている。まずはそれが引き起こす事象を発見し、再現性を得て、入出力の因果関係をはっきりとさせ、制御へと繋げる。思い通りに制御できないものについては封印措置だけでも究明する。それすら叶わぬ場合、当該コアに誰も寄せ付けないのが鉄則となる。元老院はその名目で亜連各地に不入の地を設けているのだし、中央議会管轄下の各種連邦機関も類似の措置をあちこちで取っている。そんな秘密の場所のどこかで、このオルロフは秘匿されていたのだろう。そして、それを操れるという特別な人間たちも。「おまえは、SMITSに捕まっていたことがあるか」

「捕まったのかどうかは、覚えていない。でも、育てられていた」

「オルロフを制御できる道具として、だな。SMITSめ……」

「別に恨んでない。わたしの仲間はSMITSを出てからたくさん死んだ」

「脱走したのか？」

「これはケーニヒの言い方だけど、わたしは親離れしただけ。でもきょうだいたちと別れたくはなかった。だから今、探している。これを使えば遠くのきょうだいたちも見つかると思ったけど、まだうまくいってない。ケーニヒは『九頭竜^{くずりゅう}』をまだ改良する必要がある」

亜璃亜は九天軍を利用していると言った。その言葉にどうやら偽りはないらしいと坂元は得心した。亜璃亜はオルロフを利用し続けるために、九天軍に、ケーニヒなる人物に、利用されている。ギブアンドテイク。

「あの化け物たちを引っ張り出したのも、おまえや穂積克なのか。ケーニヒって奴が命令したのか」

「わたしは人間の意識しか感じ取れない。克も同じ。たぶん、あの虫たちはオルロフが呼んだんだ。ケーニヒはこうなると予想してた」

「自意識が……、オルロフは物を考えているのか？」

「言ったろ。人間のしかわからない。坂元の声は少しわかった」

「なんだと」

「おまえは、もっと褒められたいと思っている。でも、自分で自分に満足してないから、人に褒められてもやっぱり不満を感じる。オルロフをわたしたちから取り上げれば、不満がなくなる。そう考えている」

なるほどそういう見方もあるかと、坂元は驚くよりむしろ感心した。たしかに、亜璃亜は自分の心持ちを漠然とながら感じ取ったらしい。坂元が自らの言葉で説明したなら、亜璃亜のような表現になるはずがなかった。

亜璃亜には変則領域を生身で利用できる性質がある。坂本はその事実を受け入れることにした。江藤博照が変則領域の存在を感知しているのと同じくらい、それは確かなことだと。そうした者は少数ながら存在する。これを世間に知らしめれば、江藤や黒龍隊にのみ裏切りの嫌疑がかかることはない。説明に都合のよい物証も、目の前にある。

しかし、これは持ち帰れない。坂元はオルロフに触れられない。おそらく全人類の大多数がそうだ。物証としての有用性が、翻ってその獲得の障壁となっている。オルロフはここでも“壁”を作っていた。

「亜璃亜。オルロフを持って俺たちに投降しろ。悪いようにはしない。俺たちも少し時間をかければ、オルロフを作動させられるだろう。きょうだい探しだって協力できるということだ。わかるか、このメリットが。そしておまえに損はない。炭素刀も返してやる」

阿賀たちはともかく、RATに捕まればただではすまない。彼女自身がどう思っていようと、SMITSが非人道的な人体実験に彼女を利用すると、坂元は信じて疑わない。江藤なら、事情を話せばきっと^{かくま}置ってくれる。なにしろ亜璃亜は広い意味で江藤の同類なのだ。

亜璃亜は無言のまま目を細めた。今も手を触れたままのオルロフで、遠い誰かの声を聞いているのかもしれない。眼前の自分をさし置いて。無性に腹が立ち、坂元はその細腕を輝く六角柱から引き剥がし、力づくで亜璃亜の体を自分のほうに向き直らせようとした。

「その子から離れなさい」

よく通る女の声がした。麻痺から抜け切れていない坂元の五感は、その接近を察知できていなかった。やってきたのはひとりではない。顔の下半分を布で隠した女と、季節外れの厚手のコート姿の男。「占い師……、いや、あんたがケーニヒカ」

直感に従ってカマをかけた。男は走ってきたのだろう、コートを脱ぎ捨て、かぶっていた帽子で襟元を煽ぐ。露出は増えたはずだが、外見の特徴をつかみきれない。まだ若いのか、それとも中年なのか、よくわからない。

「好きに呼ぶがいい。所詮、名など便宜的なものだ。この私と友好関係を築く気持ちがないのであれば、君の選択に制約はない」

「ではケーニヒ。取引だ。亜璃亜を殺されたくなければ、このオルロフを渡せ」

「できるかな」

「ノーチャージでとは言わない。最悪は自爆も覚悟して“ルート”に降りた。あんたらも巻き込める火薬量だ」

ブラフだったが、ケーニヒは考えこむ仕草を見せた。隣で女が拳銃を構えているが、間合いが遠い。亜璃亜に当たる可能性を考えれば、引き金に力は込められないはずだ。ふたりが亜璃亜を本当に大事にしているのなら、坂元はその答えを亜璃亜に見せたくもあって、自分がそのような行動に出たのだと客観的に分析する。

「手放すわけにはいかないな。啓示軍を呼び寄せた苦勞が水の泡になってしまう。この私の九頭龍が

ようやく完成しようというのに」

「手放せないとは、どっちのことだ。亜璃亜か、オルロフか」

「どちらもだよ。九頭龍はまだまだ冗長性の不足したシステムでね」

「出来損ないだな」

「改良の余地は認める。だからこそ、ここで君を手に入れることにしよう。――やれ、亜璃亜」

亜璃亜が動いた。ナイフを奪われまいと彼女の手先を警戒した坂元は、そのまま抱きついてきた亜璃亜の動きに対処できなかった。そして亜璃亜は坂元の体を背後の六角柱へと押し付ける。

対物ライフルで体を吹き飛ばされたかと坂元は錯誤した。それほどの情報の衝撃があった。そこに刻まれた細やかな情報など、いちいち読み取れはしない。ただただ、熱く、痛く、苦しい。許容できない情報を流し込まれた坂元の脳が、五感を切り捨てる。

どれほどの時間が経過したか、やがて五感の復活を得た坂元が自覚することは難しかった。どうやら自分が倒れていること、そこはオルロフの上ではないこと、亜璃亜の柔らかな肌が触れてはいないことを、順に認識していく。しかしオルロフの幻夢の光はいまだそばに感じられる。そしてケーニヒの音がする。

「撒いたと思ったが、この私の裏をかいたか。君は優秀な軍人だ」

誰かと会話している。そういえば坂元は銃声を聞いたような気がした。それで自分は助かったのかもしれない。

「賛辞は連れのほうに願おう。彼女は追跡のプロでね。蛟^{チャオ}が囷であることはすぐにわかった」

聞き覚えのない声だが、坂元はそれを味方と思い込む愚直を自らに許容した。男の声音と編み出されるフレーズの連なりに、その力があつた。遅ればせながら焦点と露光の調整に取り掛かった瞳が、凜々しい後姿を捉える。傍らには小柄な人影があり、「彼女」と言及された人物だと、坂元は推測する。

「なるほど、どうやらこの私が散りばめたヒントをかなり回収したようだ。そして断片を正しく組み上げて、ここに至った。すばらしいな」

「追い詰められた言い訳のつもりか」

小柄の女が言った。声は若い。亜璃亜ほどではないにしても、坂元よりいくつも上ということはあるまいだろう。しかし声は一人前の殺気を伴っている。正規軍の人間ではない、すなわち命令ではなく自由意志で人を殺そうとしていると感じた。

一般人なら腰が引けて当然の殺気に晒されながら、ケーニヒはなお余裕を見せていた。首を横に振るその仕草は、ずいぶん芝居がかっている。

「つまらない憶測だ。面子^{めんつ}など、好奇心を満たすためならいくらでもなげうとう。この私は、偶然拾った断片を集めて組み上げたいと思う、素朴な好奇心の持ち主のひとりなんだよ。この欲求を邪魔されるのは勘弁ならない」

「ここで問答を続ける気はない」男が静かに言い放つ。「私には、即座に君達を射殺するという選択肢もある」

「ほほう、RATに飼われているわけではないか。しかし、君は知っている。そこにあるオルロフのことを。私を殺そうともオルロフは手元に得たいと考えている。茨木大尉、君は保科晁に会ったか？」

ケーニヒへの返答は銃声をもって為された。撃ったのは、坂元が味方と信じる側だった。小柄な女のほうが発砲した。拳銃ではなく、自動小銃を。

悲鳴は聞こえなかった。

連射が止んだとき、立っている人数に変わりはない。

「次は命中させる。手を上げてその場に膝をつけ」

茨木の傍らの女の言葉は、ただの脅しではないと解る。今の銃撃は、跳弾で三人の誰かに当たっていてもおかしくなかった。そして坂元は男の素性も理解した。茨木彪。江藤博照と士官学校で伝説を作った男。

その茨木がオルロフの正体をどうやら知っている。同じく士官学校の級友であった読字堂よみじどうの店主のように、茨木もまた、江藤の特質のことは承知しているのだろうと坂元は推測した。だからこそ、オルロフに纏わる話を信じ、行動できるに違いない。

「話を続けるなら場所を変えよう、という提案ならば同意する。この私も、早く見晴らしのいい場所に出て事の顛末を見守りたいのでね」

ケーニヒは威嚇に対して全く動じていなかった。ただの強がりでもない。手も上げなければ膝をつくこともなく、ケーニヒらは佇んでいる。そしてその背後に、うっすらと巨大な影が浮かび上がる。琥珀色の発光体。キチン質に似た体表の放つ鈍い光沢。

「亜璃亜、後ろだ！」

坂元は叫んでいた。亜璃亜がそれに反応して一瞬目を合わせたように見えたが、よくはわからなかった。亜璃亜は背後に迫った怪異の振るう鉤爪をかわすと、あろうことかその腕に飛びついてよじ登る。坂元が、そしておそらく茨木たちもが呆気にとられているうちに、亜璃亜は鎧蜘蛛の頭の部分まで辿っていく。

亜璃亜が怪異の耳元で何かを囁いた。頷くように琥珀色の複眼が明滅する。坂元は自分の動物的直感が警鐘を打ち鳴らすのを聞く。鎧蜘蛛は今の今まで襲いかかろうとしていたケーニヒたちに完全に興味を失い、坂元たちのほうへと歩を進める。いや、狙っているのはオルロフだと、坂元は気づく。

ケーニヒたちが鎧蜘蛛の足元をすり抜けて逃げる。小銃の弾着がそれを追ったが、鎧蜘蛛の体表に阻まれる。

「オルロフから離れて」

坂元はふらつく足に鞭打って立ち上がり、茨木たちの腕を引く。鎧蜘蛛のために道を譲らせたのだ。立ちただかる位置にいれば蹂躪じゅうりんされるのは明らかだった。

鎧蜘蛛は乗用車を押し潰せる運動量をオルロフへとぶつけ、転がった六角柱を貪るように体を屈める。坂元は女から小銃を奪ってこれを撃とうとしたが、むしろ放っておくほうがひとまずは安全だと気づき、ケーニヒや亜璃亜たちの走り去った室外へと目を向ける。少し下がって様子を見ているというわけではなかった。彼らは完全に姿を消していた。

「どういつもりだ……」

茨木が呟く。

彼らはあれだけ執着していたオルロフを放置して去った。ただ亜璃亜と落ち合うためだけにこの場所へ寄ったのか。オルロフを欠かせない要素だと言いながら。

「大尉、オルロフが！」

女が坂元から小銃をひったくり返し、鎧蜘蛛に向けて構える。その怪物の腹は左右に割れて、大きな牙を持った口となり、オルロフを丸呑みにしようとしている。あのようにコアを摂取する生き物なのだと、坂元は初めて理解した。あれは、生き物だ。

「なるほど、あれを倒さねばオルロフは手に入らないということだな。できるか、小嶺」

「関節や目を狙えば」

小嶺と呼ばれた女は標的との距離を詰めながら、連射を加える。オルロフがそうそう破壊されないものだという認識はケーニヒラと一致しているらしい。

的確な銃撃が鎧蜘蛛の体の甲を避け、貫いていく。それでも鎧蜘蛛はオルロフを食すことに没頭し続けた。過半数の手足をもがれ、複眼を破壊されても。それは確実に機能停止へと、死へと向かっていたが、しかし残された複眼の輝きは輝きを増していた。その色合いは、牙を噛みあわせたような腹の隙間から漏れる光と、よく似ている。

銃声が止む。ひとつの弾倉を使い切ったのだ。小嶺はまだ弾倉を携行していたが、それを交換する手が遅い。

「茨木大尉……。これは……」

「おそらく、寄生だ。オルロフが自ら捕食者を呼び寄せた理由がこれでわかった。こうするために敢えて自らを食わせたのだ。私たちも、ケーニヒに一杯食わされたのかもしれない」

茨木の洞察を肯定するように、オルロフに宿主とされた鎧蜘蛛は、何か別の生き物へと変貌を遂げようとしている。活力を失ったかに見えた肢体がゆっくりと蠢きだす。そして坂元は遠吠えのようなものを聞いた……。ような気がした。それが実際に聴覚にもたらされた信号であったか、次の瞬間にはわからなくなっていた。

——オルロフはコミュニケーター。

脳裏で亜璃亜の声が再生される。坂元はこの場所に多数の鎧蜘蛛が向かっている姿を幻視し、戦慄した。

十二

黒龍隊のブルーアイズへの接近は困難を極めた。

まず視界が悪い。バロッグの可視光干渉が著しく、徘徊する鎧蜘蛛を見つけたときには、距離がもう百メートルを切ってしまうている。臙な発光に気づいて迎撃すれば、死体がすぐ近くに転がる。給弾もうかうかやっていると、

こうまで視程が小さいと、タワーの上のフルークゾルダートを狙撃するなど夢のまた夢だった。あまつさえ、敵はバロッグの影響の小さいバルムンク砲で攻撃を仕掛けてくる。不幸中の幸い、向こうも精密照準ができないようで、直撃を免れてはいる。とはいえ、これ以上果敢な前進は不可能だと、そろそろ南田は諦めなければならない。

「空軍はまだ動かないのか」

南田はビルの影に隠れて熱粒子砲の掃射をやり過ぎしながら、さらに奥に身を隠す戦場管制車に

訊ねる。応答したのは喉を枯らしつつある柝原だった。

「それが……。上空に Su-42 の編隊が滞空しています。でも、攻撃を実施していないみたいで」
「明確な情報を」

「ブルーアイズを中心に、半径二キロメートルの円を描いて周回を続けています」

応答が韓鈴華^{ハンリンホァ}に代わる。

「近衛軍め、何をやっているんだ。汪大尉^{ワン}、なんとか言ってやって下さいよ」

「いえ、少尉。上空の Su-42 は近衛軍ではありません。識別コードは第一戦略機動師団のものでしょ」

「そういうことだ、竜時くん」

いつの間にか名前呼びに変わっている汪凱威^{ガイウェイ}が、偉そうに解説を始める。そしてこの数ヶ月でずいぶん日本語会話能力を鍛えたらしい秀才は、一部の固有名詞を除き会話の殆どを日本語に切り替えている。

「戦略機動師団は通常の迎撃に参加しない。彼らはあくまで内乱に対する抑止力だ。彼らが監視しているのは、黒龍隊か、その他の近衛軍か、とにかく戦略軍の意に従わず、あるいは命令を待たず、勝手な行動を取る連中だ」

現時点において、その条件は関東一円に展開する部隊の大多数にあてはまる。

「柝原、第一戦略機動師団の現指揮官はわかるか」

出動したからには、責任者がいるということだ。市ヶ谷で現職が戦死したにせよ、代理のその人物に掛け合えばなんとかなるかもしれない。南田はそこに希望を持った。

「問い合わせます。――少し移動しないと繋がらないかも」

「竜時さん、左舷に鎧蜘蛛！ 中型！」

タチアナらしき声は、龍^{ロン}の鳴らす警報音より早く南田を動かした。バッテリー交換直後の雷紫電を突き刺そうとするが、槍先をしっかりと向ける前に、鎧蜘蛛の腕がその軌道を妨害。別の腕の鉤爪が龍の胸部 BFG を求めて襲いかかる。回避は間に合わない。機体に複数回の衝撃。鎧蜘蛛に組み付かれた。正面ディスプレイに鎧蜘蛛の単眼が大映しになる。

と、その目玉、すなわち鎧蜘蛛の急所に、銃弾の直撃があった。口から糸を垂らしながら鎧蜘蛛のけぞる。

「とどめだ！」

通信機から入った声に促され、南田は改めて雷紫電を目標に突き刺し、放電させる。中型クラスには最大出力。でなければ即死させられない。大破ではなく即死という概念が、黒龍隊では定着している。これは断じて乗備機などではない。

「助かりました」

援護してくれたのは機甲化歩兵に違いなかった。南田は路上にその姿を探し、そして空のロケットランチャーを担いだ上妻の姿を発見する。まだ議事堂で負った傷が完治していないはずだ。そして、黒龍隊の援護に割かれた別働隊に上妻は含まれていなかった。

「南田少尉ですね。機兵の姿が見えたので合流させてもらいました。こちらは今の化け物に襲われて散り散りです。そちらの状況は？」

「江藤少佐より、先行して横浜に移動するよう命令を受けましたが、現場判断でブルーアイズ頂上の

奪還に着手しました。江藤少佐とはまだ合流できていません。戦力が足りない」

すでに鷹山の龍が脚部をやられ、小笠木たち機甲化歩兵がその補佐に回っている。自由に動ける攻撃役は南田と杜洋伸ドゥヤンシエンの二機の龍のみ。近衛軍の機甲部隊が応援に来てくれないかと期待していたが、少なくとも感知圏内にはいない。

「機兵を直接相手にするだけが方法ではないですよ。ブルーアイズ内部では、九天軍に呼応したエデン系諸グループの鎮圧が進められているはず。そちらをうまく援護できれば、足元から啓示軍オフェンバーレナを攻撃できます」

「なるほど、それは良策ですね。――戦場管制車、コンタクト取れそう？」

「バログを抜けないと、直接は無理。有線で誰か引っ張って来たなら、いくらでも話繋いであげるけど」

「ケーブルならあります」上妻が後続の装甲兵員輸送車を指差す。「私たちが接続してきましょう。ただ、ここからでは長さが足りません。もう二百メートルは近づかないと」

南田はデータバンクから立体地図情報呼び出して、上妻が突破しようとしている経路を確認した。広大な遊歩道の下に潜り込めれば、身を隠すのは容易そうである。問題はそこまでの百メートル。ブルーアイズを頂点とするバログ濃度の急勾配を考えると、装甲兵員輸送車で突破は機関暴走の可能性が高く自殺行為。着備機のみ、あるいは生身でケーブルを抱えて走るのが最も安全だろう。啓示軍のセンサーにも見つかりにくい。

吟味に多くの時間は費やされなかった。上妻提案の作戦は実施に移された。南田は念のため別のブロックに回りこんで囷となる。機兵の移動を感知した E6エーゼクス が上空から熱粒子砲や電離砲を浴びせかける。南田は飛蝗型の高速ホバー走行性能のおかげで無事にこれをかいくぐったが、都市への被害は甚大だ。

互いに約束し合った位置を離れたため、戦場管制車とは連絡が取れなくなった。林立するビルの際間から、上妻たちの突破の成否を確かめようとしたが、厚いバログのために見通しがきかない。

南田は懐中時計の針の運びを感じながら、上妻たちが遊歩道の下に辿りつくまでをイメージする。二十五秒。もういい頃か。しかし重いケーブルが引っかかってもたついているかもしれない。数分は稼ぐべきか。

戦場管制車まで戻れば、ケーブルに繋いだ通信端末で上妻とリアルタイムに通話できる。しかし攻撃も伴わずに往復をすれば啓示軍に怪しまれる。一応、攻撃は試みておこうと南田は考えた。

雷紫電を路上に置き、火縄をマウントから外して構える。装弾確認よし。このままタワーの頂上を狙っても、バログに弾道を反らされる。高度をとってバログを抜けなければ、真面目に攻撃しているようには見えない。本気の攻撃でなければ E6あざむ を欺けない。

南田は頑丈そうなビルを見繕い、飛蝗型をその屋上まで跳躍させる。着地した足が一階分をぶち抜いたが、ともかく姿勢は安定した。視程良好。相対バウムク反応も低い。もちろん、敵方からも丸見えに近いわけで、のんびり照準はしてられない。

画像識別で適当なフルークゾルダートに照準を固定し、操縦桿の主武装攻撃実行のボタンを押す。百五ミリ砲弾が旋回しながら飛んでいく。すれ違いで何かの弾が飛んできた。命中はしなかったが、足元のビルが崩壊する。脚部ロケットを噴射するが、瓦礫に引っかかった両脚の軸がうまく揃わず、

飛び立てない。

マニュアル歩行モードで脚をばたつかせ、龍は瓦礫を抜けだした。脚部ロケット異常なし。再度噴射をかけ、浮上。

そこを再び砲弾がかすめた。ブルーアイズの方からではない。頭上に敵機がいる。空中で実体弾砲撃を行ったそのフルークゾルダートは、姿勢安定のためまだ第二撃には移行していない。南田は即座に火縄で応射。しかし空中では照準の確実性に欠けた。砲弾は的を外し、フルークゾルダートは腕の機関砲で反撃を開始する。

空中での運動性能には圧倒的な差があった。飛蝗型は無様に機関砲を被弾。逃げてでも火線が食らいついてくる。弾のいくつかが装甲を貫通したことが、メインディスプレイへの警告表示でわかる。さらには、新手のフルークゾルダートが大刀を振りかぶって肉迫する。

絶体絶命の窮地から南田を救ったのは、横合いから飛来した空対空ミサイルであった。大刀の運動エネルギーはミサイルの一発を叩き折るのに費やされ、機関砲を撃っていた機体は、破片と煙を撒き散らしながら落下していく。大刀を持った機体は、シュヴァルトツパンターがそうしたように、味方機を支えるべくパワーダイブ。

「生きているか、黒龍隊。こちら近衛軍第一ヘリ大隊。これよりブルーアイズ奪還を援護する」

東の空より現れたのは、旧式の攻撃ヘリ、AH-1 からなる編隊だった。多数のミサイルがブルーアイズの E6 目がけて飛んでいく。

「戦域の各位に通達。上層階の非戦闘員救出は完了している。もはや躊躇の必要はない。啓示軍排除に全力を傾けよ」

指揮官らしき男の声が途切れるまでに、ミサイル群は目標に到達して次々に信管を作動させる。見る限り四機が被弾、うち二機が屋上に不時着し、一機が飛行能力を喪失してタワーの下へと落ちていく。

E6 の行動は二手にわかれた。被弾した仲間を庇う機体と、攻め手の AH-1 を蹴散らしにかかる機体とに。うち二機が飛蝗型を狙ってきたので、南田はビルを跳び移りながら逃げる。対空ミサイルが残っていれば高確率で直撃を期待できる間合いだが、あいにく前回攻撃時に自分自身で最後の発射を浪費している。せめて搬送車に戻って対空散弾装填の火筒ホッツを手にするまでは、逃げに徹するのが得策だ。

しかし散弾を先に使ってきたのはフルークゾルダートだった。逃げる背中に、ガツガツと散弾が当たる。装甲部は耐えたが、やがてメインロケットのノズルが撃ち抜かれた。推力低下と冷却系の循環停止。診断機能により自動でメインロケット燃料カット。目標としていた次の足場に対して高度が不足する。衝突しそうなビルビルの壁面を蹴って、十階ほど低い別のビルの屋上に着地。まだ休むわけにはいかない。南田は振り向きざまに火縄を発砲。追っ手への牽制にはなったが、二機は左右に分かれてなお攻撃を続行する。頭部に被弾して、画面の映像が揺れる。EPU に異常なし。まだやれる。南田は回避をやめて狙撃に専念。ビル風に煽られてひるんだ一機に命中弾を与えた。決ったのは機体中央。直後にバイルアウトを視認。せっかく脱出したならビルに衝突しなければいいと南田は思ったが、そこまでは目が追えない。追っている場合でもない。

——放置したもう一機は？

龍の顔を向けると、ちょうどその機体が空中で爆散するところだった。バイルアウトは確認できない。

南田は息を飲んだ。通常の空対空ミサイルの破壊力を優に超えている。少なくとも AH-1 にそのような火力はない。では、何がフルークゾルダートを屠ったのか。まるで戦車砲でも受けたかのようだったが、戦車が地上から狙撃するには、バロログが濃厚すぎる。

「マーカを送る。その地点で合流だ」

「藤居さん!？」

遠く東のビルに、龍らしき姿がある。抱えている長大な筒は、^{シラヌイ}不知火単装型か。ズームすると、複座型に似て、頭頂の左右に角のような突起が伸びている。飛蝗型のデータバンクにはすでに登録されていた。あれこそ角龍^{ジャオロン}。江藤が黒龍隊の戦力としてくすねようとしていた新型機。

「早く潜るんだ。連射は利かないし、こっちも狙われると逃げ切れない」

言っているそばから、角龍のごくごく近傍を砲弾が掠め、背後の別のビルを粉碎する。ブルーアイズの尖塔から放たれた鋭い攻撃。E6 にも狙撃能力に優れた機体が混じっているのだ。

そんななか、角龍は第二発を撃とうと踏ん張っている。南田は胸に熱いものを感じた。江藤といい藤居といい、いつも自分を助けてくれる。

「了解。下で会いましょう！」

逸る気持ちに背中を押され、雲海のようなバロログに身を躍らせる。

* * * * *

流れが変わった。

三機が大破し、回収不能。五機が飛行能力を失い、このうち二機が地上まで落ちた。その他、被弾して性能低下した機体が過半数にのぼる。

ケーシャ・スラントはそうした数字以上に、場の空気とでも形容すべき動物的な感覚により、形勢の不利を認めていた。

基幹部隊から与えられた作戦指示書では、最悪の場合は機体を処分して九天軍と合流し、亜連内に潜伏するよう定められている。しかしケーシャはまだ信じていた。自分自身と愛機シュヴァルツパンター、そして多くの勝利を分かち合った部下たちの力を。

件の^{くだん}バルムンクシステムさえ作動させれば、勝ちは見える。暖炉の谷では実際にうまくいった。ユプシロンの介入で最後の最後に撤退を余儀なくされたが、今回はその影が見当たらない。うまく前線に釘付けできていると、基幹部隊から言われている。九天軍側の作業さえ完了すれば、作戦は成功したも同然なのだ。

「ケーニヒに作業を急がせろ。あと三十分だ。それまでは持たせる」

九天軍の通信員にそれだけ告げると、ケーシャは回線を E6 限定に切り替える。

「ブラームス、迎撃指揮を任せる。私はバシリスを拾い上げてくる」

落下した味方機の片方は、位置を把握している。ブルーアイズに設置した装置を守るため、盾となってミサイルを止める姿を、ケーシャはたまたま目撃していた。本体への直撃ではなかった。回収の危険を冒す価値はある。

「無茶です、中尉。敵地上戦力の増援も警戒しなければなりません」

「だから、その前にバシリスを拾って、ついでに龍の一機も潰して来ようと言っている。おまえはヘリを減らしておけ。そろそろミサイルも尽きるはずだ」

否は聞かず、ケーシャはシュバルツパンターを地上へと降下させる。バロッグに飛び込むまではパワーダイブ。白い壁が AH-1 の視界を遮ってくれたところで、地上に対する進入角を浅めに変える。各種センサーで落ちた味方機を探す。

バシリス機はブルーアイズ下層に面した広場に落ちていた。飛行モジュールはパージ済みのようだが、二足歩行の様子に不具合はない。ケーシャはゆっくりとその傍らに舞い降りた。

「バシリス、機体損害を知らせろ」

「申し訳ない、ドジったよ、隊長。被弾は右舷飛行モジュールだった。空中でパージして制動したから、本体は無事だ。このまま地上で戦闘続行できる」

「駄目だ。シュヴァルツパンターで引き上げる。敵は亜連軍だけではない」

ケーシャは前方の靄の中へ熱粒子砲を発射した。弾道のぶんだけ一時的にバロッグが晴れ、四本の足と四本の腕を持つ異形のモノの末期が垣間見える。

「――なんと。今回のサーヴァントは敵味方を識別しないってことか」

「暖炉の谷では、ノイエーターが制御系の中核として働いていたようだ。しかしゾルダートではかの異形に言葉を届けることができない」

「だからゲリラの手も借りる、と」

「ケーニヒは信頼に応じてくれるだろう。でなければ、私が誅する」

「お願いしますよ、隊長」

バシリス機がシュヴァルツパンターに掴まってくる。ケーシャは自機のほうからも保持しようとして左手を伸ばしたが、そこでけたたましく警報が鳴った。

愛機の左手をバシリス機の肩越しに突き出し、同軸上に備えた機関砲を発射。顔面を腕で庇いながら猪突猛進して来たのは、龍。そのまま体当たりをして強制的にバルムンクフィールドを共有。そのうえで、手にした槍を突き出してくる。

「隊長！」

バシリスが再び己を盾とした。首の根元、ゾルダートにとっての急所に電撃を受け、制御を失う。咄嗟にトリガーを引いたであろう右腕部ロケット弾が立て続けに発射されるが、発射筒は龍の脇に抱えられており、すべて後方のバロッグへと飲み込まれて華を散らす。

突き飛ばされたシュヴァルツパンターは、翼の生み出す変速領域によって大きな揚力を得て急浮上し、バシリス機の貫通を避けた俯角で熱粒子砲を発射。敵機の右肩から左肩にかけてを薙ぐ。狙撃用の設定だったので出力は高い。龍の両腕は熱変形と制御系の断裂で動かなくなったはずだ。また、胸部に搭載されている BFG も無事では済まない。事実、シュヴァルツパンターのバルムンクフィールドは完全独立となった。龍のバルムンクフィールドは消えた。バシリス機も。

完全に破壊するべく再びトリガーに力を込めかけた指を、ケーシャはぎりぎりの理性で抑制する。龍の完全破壊は避けるよう、作戦上定められている。だからこそ黒龍隊の第一波を取って生還させたのだ。部下たちの献身を無駄にせぬために、ここは龍の戦闘能力を奪う程度で我慢しなければな

らない。そして、BFG と両腕の機能を奪った時点で、それは満足されている。

ケーシャはそのまま愛機を上昇させる。バシリスが放電に耐えたとしても、今、回収はかなわない。作戦さえ成功させれば、救出はできる。

そのとき、何かが機体上方に出現した。少なくともセンサー上ではそうとしか捉えられなかった。相対バルムンク反応レベル A、しかしすぐにレベル C まで低下。衝突警報。タワーが崩落したかと思っただけ、見上げた視線が捉えたのは、一機の機兵の屍だった。

衝突した。シュヴァルツパンターはなんとか空中に留まったが、飛行モジュールを中心に多くの破損箇所が報告される。コントロールが利かず、前に横に回転する。

ケーシャは操縦訓練の一環でこのような機動に対する耐性を得ていた。めまぐるしく移り変わる映像のなかから、しっかりと客観的な状況を拾い出す。上から突如落ちてきた機兵はそのまま路面に落下した。バシリス機のそばで、仰向けに倒れている。

しかし、バシリスを倒した龍が見当たらない。後退したかという誤解はすぐに解けた。その機体は両腕と BFG の機能を失いながらも、シュヴァルツパンターに向かって来ていた。跳んだのだ。龍が、突き出されたその膝が、ディスプレイに大写しとなる。

ケーシャ・スラントは撃墜された。

実戦上でのそれは、彼女にとってまだ二度目のことだった。

* * * * *

モニタ上の赤色の輝点がひとつ、またひとつと減っていく。少し前まで増加と減少が拮抗していたが、順調に減少側へと傾いたようである。藤居は大きく息を吐く。

「なんとか、もちそうですね」

「ああ」

表示されているのは、角龍が把握する敵性存在である。有線、無線を組み合わせて接続した多数の友軍機から送られてくる情報は、角龍が整理統合し、新旧各フォーマットに出力して送り返している。

藤居は角龍の戦場管制システムを再起動させていた。予期せぬ動作を始める心配は拭えなかったが、藤居は目前の脅威をより重要と評価した。この決断こそが、近衛軍の AH-1 編隊をして、バロログの上層を掠めた危険な飛行でブルーアイズまで接近せしめ、頂上の E6 への奇襲を可能としたのである。到達までに、バロログに近づきすぎた三機の不時着を余儀なくされたが、彼らに危険を冒してもらった甲斐はあった。

幸いにして、まだ戦場管制システムは円道の制御下を離れていない。もっとも、もしも暴走を始めたならば、藤居は角龍が腰に繋げた複数の有線通信ケーブルと、頭に戴く角状の通信アンテナを機械的に破壊するつもりでいる。他にも基本的な通信システムは搭載しているが、このバロログのなかで、それら月並の機器では用を為さない。仮に通信可能な相手が接近してきても、角龍の機体の運動制御は奪われていないから、こちらから距離を取れば通信不能状態を保てる。戦場管制システムがどんな悪事を企図しようとも、害はない。

いや、企図しているのはあくまでその設計者、または操作者である。

戦場管制システムの乗っ取りは、おそらく昊天の差金によるもの。藤居はそう直感していた。敢

えて根拠を持ち出すならば、霞ヶ浦駐屯地を襲った九天軍の大部分が、その後の啓示軍の出現を前提とせずに行動していたことが挙げられる。監視網がダウンするという状況を最大限に利用したのが、部下のほとんどすべてを捨て石にして、蛟^{チャオ}とともに脱出した卑劣漢、昊天だ。

「戦場管制車より報告。江藤少佐の将龍^{ジャンロン}が救援に現れたようです」

「そうか！ 今どこだ」

「ブルーアイズ直下」

「もうそこまで……。途中の近衛軍は報告を回してくれなかったのか」

「すみません、こちらもすべての情報を捌ききれしていません。角龍が市ヶ谷の代わりに機能しているようなもので、EPUの処理能力がさすがに限界なんです。それでフィルタをかけているんですが、そこに引っかかっていたのかもしれない」

「龍のEPUと連結できれば、問題は解決されるか」

「相手も戦場管制システムを搭載しているのがベストですけど、同じHAOS^{ヘイオス}を走らせているEPUならまだベターなほうです。有線での直接接続か、レーザー通信くらいの情報伝達速度と信頼性が必要ですけど」

「それはオルロフとやらを破壊してこのバログを消してしまうほうがまだ早そうだな。円道、将龍以外の、黒龍隊の機兵の位置は掴めているか。合流して、頂上の制御装置の破壊を急ぎたい」

「柝原に問い合わせます。聞いてた、蜚^{はい}？ ——え、なに、それホント？ 藤居さん、竜時さんは隊長と一緒です。おまけにE6隊長機を、ふたりの連携で倒したとのことですよ」

「それは朗報だな」

「では、悪い知らせも伝えてあげよう」

円道ではない、男の声。藤居の耳元のマイクからだけ聞こえてきた。誰の声だかすぐに察した。願ってもない。藤居の探していた相手だ。

「昊天か」

「ご名答。君のくれた通信機が役に立っているよ」

霞ヶ浦駐屯地で昊天と対峙した折、藤居は腕時計型の通信端末を落とした。昊天はそれをちゃっかり拾って利用しているのだ。利用停止を申告すべき市ヶ谷が落ちたため、すぐに悪用を止める手段はない。通信端末か、その悪用を考える人そのものを破壊しない限りは。

「外部出力遮断しつつ、探知します」

背後からかけられる円道の小声が頼もしい。近くにいるのは確かで、方位を確定できれば角龍で処理できる。摘まみ上げるなり、踏み潰すなり。あいにくと対人制圧用の非致死兵器は持ち合わせがなかった。

藤居は円道の活躍に期待し、昊天へと問いかける。

「霞ヶ浦で戦場管制システムに手を入れたのはおまえの差金か」

「当たらずとも遠からず、だな。君がこの私に向けている感情は、決して的外れではない」

「啓示軍を迎え入れて、どうするつもりだ。九頭竜とやらを手土産に、今度は啓示軍に乗り換えるのか。おまえの正義はどこにある」

「言っただろう、この私にとって、まだ見ぬ真理の訴求こそが第一。所属する組織も、名乗る名前も、

この私にはあくまで便宜的な依代^{よりしろ}に過ぎない」

「人に危害を加える真理など、俺たちは欲しくない。おまえの自分勝手に許す訳にはいかないな」

藤居は円道に目配せをして進捗を訊ねるが、焦燥した円道の首が左右に振られるだけだった。昊天は巧みに電波の発信元を隠している。

「独り善がりだと君は言うが、この私としてもドンパチの継続は望むところではない」

「なんだと」

降伏宣言か勝利宣言か、藤居は昊天の次なる声を待つ。

「悪い知らせがあると言った。それは啓示軍が FTP を開く条件を整えるまで、もう十分あるかないかということだ。彼らに FTP の制御権を渡すのは、人類の大多数にとっての不幸であり、敗北を意味する」

「FTP？」

「Fatal Transfer Port。頭文字を取って FTP と、この私が便宜的に名付けたものだ。啓示軍は暖炉の谷でこれを開き、二個機兵戦隊をベルリン近郊まで転送した。オルロフの力の一端だ。幸いにも君の上官がオルロフを奪ってくれたため、その一回きりで啓示軍は FTP を再び開けなくなったが、今ここに、FTP を開く条件が整いつつある」

「貴様が協力した結果だ」

「因果関係の指摘としては正しい。本来ならこの時点で九天軍が FTP の制御を奪っているはずだったが、軍と警察と RAT の連携が想定よりもスムーズだったため、啓示軍に対して用意していた手駒をことごとく駆逐されてしまった。スケジュール修正のため、こうして君に頼んでいる。啓示軍の持ち込んだ制御装置を破壊して欲しい。ブルーアイズ頂上に設置された砂時計型の金属筐体を、その得物に詰まった砲弾でだ」

これは罠だ、と藤居は身構えた。FTP の件が法螺^{ほら}話かどうかは別として、昊天の口車に乗って角龍の火器を使用してはならないと、直感と理性が声を揃えて警告している。角龍で正確な狙撃を行うには、戦場管制システムを介した測量支援が不可欠だろう。啓示軍のバルムンクシステムを破壊するその瞬間、戦場管制システムは稼働を余儀なくされる。狙撃に成功すればおそらくこの夜霧のようなバログが消える。戦場管制システムは水を得た魚となってブルーアイズの通信インフラにアクセスし、日本中に、亜連中に侵入可能となる。藤居が角龍の通信能力を物理的に破壊するまでの数秒で、戦場管制システムは昊天の企図した仕事を全うすることだろう。

「俺たちは、九天軍のように簡単には騙せない。事態は貴様の思い通りに進まない」

啖呵を切ってはみたものの、ただ提案を拒んでじっとしているわけにもいかない。頂上の制御装置を破壊すべきことは、角龍からの発信で多くの友軍が認知している。藤居が引き金を引くまでもなく、ブルーアイズ上層の奪還を進めている歩兵や警察、RAT たちが、予告なくあれを破壊するだろう。実際それは啓示軍の作戦阻止という目的では正しい選択である。しかし九天軍が、昊天が何かを企んでいる。

角龍の戦場管制システムは、いまやこのブルーシティという戦場における亜細亜連邦軍、警察、その他もろもろの組織の交換手である。今は昊天のハッキングを警戒して一時的に出力を遮断してい

るが、このまま情報の流れを止め続ければ、戦況は再びひっくり返されるかもしれない。昊天の狙いは寧ろそちらとも推測できる。つまり、九天軍は他のテロリストを手駒として自らの予備戦力を温存している可能性があり、また、本当はオルロフの制御をすでに握っているとも疑える。オルロフの起こしてきたと思しき数々の超常現象を「慮」れば、もはや九天軍に一兵も残されておらずとも、脅威は最大と評価しなければならない。

昊天が積極的に働きかけをしてきたからには、逆に考えて、現状を守れば、昊天の策に嵌るリスクは小さい。藤居が昊天の言葉に応じようと応じまいと、遅かれ早かれ啓示軍はオルロフの制御を失うことになるだろうが、そこに気がつくと、昊天が気にしているのは時間かもしれないという新たな視点に辿り着く。もしも昊天が、本当に共通の危機意識から啓示軍の妨害を急ごうとしているのであれば、おいそれと捨ておくわけにもいかない。

要は、昊天を信用するか否か。

藤居の迷いを機体の動きから感じ取ったのか、昊天が沈黙を破る。

「狙撃するか、しないか。いつぞやと似た状況だと指摘できるな」

廖と、孔魁の顔が浮かぶ。あのときよりも状況は複雑だが、それでも昊天の言葉は藤居の大きな動揺を与えた。そして混乱はなお深まる。かつて藤居は、引き金を引いたことを悔いた。自分が友を撃ってしまったのかどうかは定かでない。しかし端緒となったのは紛れもなく藤居なのだ。それを思い出させた昊天の狙いは、啓示軍の制御装置を破壊してくれという依頼と相反する。

「おまえは、撃たせたいのか、どうなんだ」

訊ねること自体が昊天の罠に踏み込む一歩かもしれないと自覚しつつも、藤居は衝動を押さえることができない。円道が何か警告を発したが、耳には入らなかった。

「間違った印象を与えてしまったようだな。この私が真に指摘したいのは別のことだ。状況はよく似ているが、決定的に異なる点がある。君は今、誰の命令にも縛られていない。君は自身の判断で、その引き金の処遇を定められる」

「それは違うな。通信は俺が押さえている。上官に判断を仰ぐことは可能だ」

そう、江藤がこの戦場にやってきたのだ。どうすればいいかは江藤に聞けばいい。江藤なら、このブルーアイズで起こっている現象を肌身で感じている異能者なら、藤居よりも的確な判断が下せるだろう。昊天に惑わされていないだけ冷静でもある。それが最上の策だと、藤居は確信する。

「上官に判断を委ねるか」

またも思考を読んだように、昊天が言葉で切り込んでくる。

「君は歐陽 某 という指揮官の判断に従わなかった」

「どうしてその名を知っている」

「黒龍隊のことはよく調べたと、言ったはずだ。この私の探究心を低く評価してもらっては困る。――さて、命令に従うという鉄則を犯した君が、今この場では自ら命令を求める。それはしかし、欺瞞だろう。君は納得できる命令にしか従う気はないのだ」

「違う。俺は変わったんだ。命令には従う。それがどんなものであろうと」

「江藤博照の命令ならば、だろう。君は彼を尊敬している。そういう相手からの命令だから従える。君は枷に自らを嵌めたようできて、真実は、自分の好きなようにやっているだけだとこの私は見る。」

回りくどいことはせず、今もその引き金を自分の意志で引くべきではないか」

「俺は江藤少佐に従う！」

「たいした信頼ぶりだが、さては、知らないようだな。君のトラウマとなった北京での立て籠もり事件だが、欧陽という男が人質救出にゴーサインを出さなかったのは、実は彼自身の考えではない。彼は形式上の指揮官に過ぎなかった。彼を通して君たちを操っていた影の指揮官がいる。人質を助けるよりも、それを餌にテロリストを一網打尽にしようとしたと、この私の情報源は語っていた。そうした阿漕な手をよくやる男なのだと……」

文脈が、すでにその黒幕の名を告げている。藤居は耳を塞ぎたかったが、あいにく通信機は耳に直接当てられている。剥ぎ取ろうとした手は、しかし間に合わなかった。

「――江藤博照だ」

違う、と叫びたかった。しかし喉が言うことを聞かない。藤居はでたらめに角龍の火器という火器を解放するという欲求に駆られる。手は従順に衝動を具現化するべく動く。

「藤居さん、真上です！」

円道の声で我に返った。藤居は不知火単装型を頭上に向けた。その砲口の先には、バロッグの中まで降下してきた褐色のフルークゾルダートの姿があった。本来狙撃用であろう長物の火器を、まるでスピアのように突き出して舞い降りてくる。

両機は砲身が触れ合うほどの至近距離で、互いに渾身の一撃を放った。

その瞬間、藤居は敵パイロットの咆哮と、昊天の含み笑いとを聞いた気がした。

十三

ブルーシティを包んでいたバロッグが晴れていく。

リーフェンゴリーフェンゴ オフェンバーレナオフェンバーレナ 李峰國は、啓示軍の設置した砂時計型の機械装置を破壊した。擲弾で一撃だった。

“ルート”からここまで、海拔差にして数百メートル。階段を地道に制覇してテロリスト駆逐に当たった先鋒たちは、さぞかし多くの血と汗と弾薬を費やしてこの頂きに至ったに違いないが、峰國は彼らの血路をそのまま辿ってはいない。動力と安全が手元に戻れば、エレベータが使える。制御盤を操作して再起動させ、乗り込んでしまえば、あとは何の苦もなく地上数百メートルの高さまで運んでくれる。

エレベータで敵対者と遭遇することはなかった。ブルーアイズはテロリストの手から完全に奪還された。では誰の手に戻ったかと言うと、それは定かでない。亜細亜連邦軍か、警察か、RATラットか、非武装の市民たちか。あるいはそれらすべてを影から見守る元老院か。

誰の思惑だろうと、どうでもいいと峰國は思った。それは、傍らで骸むくろとなったばかりの軍人とRAT隊員たちも同じ気持うだったろう。

今この時、皆が結束して啓示軍の支配に抗おうとしている。

――いや、例外もいる。

霧が晴れるにつれ、横浜上空を周回するジェット戦闘機の光が見えてきた。第一戦略機動師団。彼らはまだ傍観を続けている。バロッグという隠れ蓑みのを失い、燃料も弾薬も尽きかけ、羽を休める

枝もなくしたフルークゾルダートを、彼らは精密誘導爆撃でたやすく殲滅できる。

「あいつら、実はもう啓示軍に恭順しちゃってるってオチじゃないよね」

峰國は屋上でもうひとり残った生存者に問うた。砂時計への接近攻撃を敢行した十数人は、峰國ひとりを残して、フルークゾルダートの機関砲掃射や踏み潰しの餌食になった。もっとも、一方的な殺戮を受けたわけではない。ロケットランチャーと対物ライフルで砂時計の直掩機を撃ち落とし、目標それ自体も破壊したのだから、コストとしては優位だろう。――背後に立つ女が無言のうちにそう勘定していることを、峰國は知っていた。決着までを陰から見ていただけのこの女は。

「彼らは自分たちの任務に忠実なだけよ、李少尉。――あなたは違うようだけれど」

峰國が振り返ると、女は拳銃を向けていた。手馴れた射撃姿勢で、距離も十分近い。手にしているのはRATの制式拳銃であり、峰國はその照準精度についてもよく知悉している。したがって、命中率はかなり高いと計算できる。

「お互い様じゃん。櫛田大将をどっかに隠したの、あんたたちでしょ。市ヶ谷はどうぶん機能しないし、戦略軍の許可だって取ってないはずだ。俺、調べたからわかる」

「いつもはとぼけたふりをして、とんだ食わせ者ね。いったい誰の命で動いているのか、教えてもらえるかしら。納得できれば、ここで制裁は加えない」

「それは、穴蒲静香大尉としての発言？ そーれーとーも……」

「気づいていて、どうして。それもあなたを操っている誰かの意向？」

「上の意向と一致したのは、たまたまだ。同業者を見つけても、リスクが最大化するまでは放置するってね。でも基本的に、俺はやりたようにやるだけだよ。あんたはどうなの、穴蒲大尉。その名と役割は他人から与えられたものなんだろうけど、でも、もうあんたのものだ。好きに使ったらいいじゃないか」

「それは許されない」

穴蒲静香は即答した。何かの条文を読み上げるように。

「お固いね、RATは」

「そういうあなたは……」

「同じRATでも、久留はもう少し柔らかい奴だったよ。あんたはそうだな、門宮の兄ちゃんあたりを見習ったほうがいい。付き合ってみたら？」

「CD776と？ 冗談でしょう、願い下げよ」

「そんな味気ない名前で呼んでやるなよ」

「そうね、彼らC種には生まれ持った戸籍というものがある。多くが今もその名を名乗っている。でもあなたは違うでしょう。私と同じ、戸籍を失ったB種。李峰國という名前は任務上与えられたものにすぎない。ようやくわかったわ、あなたがBK698だったというわけね」

「だいせいーい。いつバレるかどヒヤヒヤしたんですけどね」

「いい加減、その癩に障る人格を演じるのはやめなさい」

「やだよー。俺はあんたの指揮下にはないもん」

「では、あなたに命令しているのは誰？ 答えなければ、手足を順に撃ちぬく。大丈夫、弾を体内に残すヘマはやらないから、急所まで順番が周る前に喋ってくれれば、止血して病院に担ぎ込んであげる」

「俺、そういうプレイって趣味じゃないんだよね。ひとまず、落ち着こうよ。E6^{エーゼクス}は死に体だけど、まだ掃討しきったわけじゃない」

フルークゾルダートの多くが飛行能力を失い、地上に落ちた。残る多数がその援護に向かったため、主戦場は地上に移っている。今こうしている間にも、峰國の内耳には傍受した無線通信の内容が届いており、そうした戦況の推移がつぶさにわかる。想像以上に詳細な情報がやり取りされているのは、角龍^{ジャオロン}が戦場管制システムを作動させネットワークを築いていた成果だろう。しかし、現時点では、角龍の所在を通信から読み取れない。中核は失われ、枝葉末節が互いに連携を続けているだけの状態と峰國は見た。

角龍が健在でなくとも、つまり戦場管制システムがなくとも、バロックが晴れてしまえば違いはない。在来兵器がこぞって息を吹き返し、観測情報の共有に裏打ちされた精密な火力投入が可能となる。穴蒲には牽制の警告を与えたが、実のところ、E6はすでに袋の鼠だと峰國は見ている。落ちた仲間を見捨てて半数のフルークゾルダートが飛び立ったところで、近衛軍の航空戦力はこれを見逃さない。

彼らはオルロフを当てにしすぎた。あるいは、基幹部隊に捨てられたか。同情の念が湧かないでもないが、これもオルロフの作り出した幻想かもしれないと冷静に分析する知性は残っている。「勘違いのないように断っておくけど、私は啓示軍と通じているわけではないわ」

多少、態度を軟化させて、女が言った。その口ぶりは穴蒲静香としての振る舞いとは異なる。戸籍とともに封じられた、彼女自身の素が垣間見えた。

「啓示軍と通じていた九天軍を、あんたらは利用した。九天軍に蛟^{チャオ}が渡るよう手配したでしょ。おかげで霞ヶ浦では大変だったよ、飯も食いそこねたし。でも、おかげで色々見えてきた。あんたらの狙いを当てようか？ RATが九天軍を、いや穂積の娘や昊天を凶に乗らせるような工作をやったのは、オルロフをこの横浜に集めるためだ」

「どうやら話が通じそうね。オルロフをいつまでも啓示軍や九天軍に持たせておいては危険なの。荒療治でも、ここで一気にオルロフを取り返す必要があった。彼らがオルロフの本来の姿に気づく前に」

「へえ、もともと元老院の物だって？ 変じゃない？ 二十四年前に空から降ってきた石ころじゃん。それに、本来の姿だとか言うけど、落ちてくる前の状態を見たことあるの？ 八月の悪夢の起こる瞬間、あの隕石群がどこから現れたのかは誰も知らないってのが俺たち情報筋の常識だよ。元老院は隠し撮り映像を仲間内でお楽しみってわけ？」

「それは……」

穴蒲は反駁しかけ、そしてはっと気づいて口を閉ざした。

「あなた、この会話を……」

「あちゃ、ばれた？ 全部録音、アンド時差つきながら外部に転送しているよ。隊長はすべてこの話をご存知ってわけ。ニヤニヤ。そのうち血相変えて将龍^{ジャンロン}で踏み込んでくるに違いな……」

噂をすれば影。外付けスレイブニルブスターの全力噴射とわかる轟音が峰國の背後に迫り、頭上を超えて、まさにその影がブルーアイズの頂上に差した。

* * * * *

「釣瓶^{つるべ}落とし・急転直下！」

江藤は雄叫びとともに、峰國と穴蒲の間に将龍を着地させた。雷紫電の放電端子の先端を、穴蒲の頭上で寸止めにして。穴蒲の顔面が蒼白に見えるのは、将龍の投げかけるメタルハライドランプの光のせいばかりではないだろう。腰を抜かさなかつただけ優秀だが。

「隊長一。お元気そうで何よりですー」

将龍の関節各所のショックアブソーバが復帰したタイミングで、峰國がのほほんと挨拶を寄越す。「峰國、貴様の話はあとで聞く。今はこいつだ。――穴蒲静香、答えろ。オルロフを集める目的とはなんだ。本来の姿とはどういう意味だ。あれは単体でテレポートシステムのコアとして機能するのではないのか」

「その質問には私がお答えしよう」

穴蒲の声を拾うために作動させていた指向性マイクが、別の人物の到来を知らせる。男だ。発音と抑揚から、どうやら中国人だとわかるが、声に覚えはない。

「誰だ」

九天軍の仲間かと、江藤は警戒したのだが、スピーカを通じたその声を聞いたその男は、将龍の投げかける光の縁、明暗の境界線上で立ち止まる。

「どうやらライトが強すぎて、私の顔が見えていないようですね。戦略軍特別運用調整官、汪凱威^{ワンガイウェイ}です。お久しぶりです」

江藤は二秒間の検索を実行し、クエリに出力を返す。

「うむ、覚えていない」

「こ、これだから蛮勇な武官どもは！」

汪凱威はオクターブひとつ高い声を出したが、居住まいを正して咳払いをし、登場時の口調に復帰する。

「江藤少佐、オルロフがテレポートシステムのコアだというあなたの仮説は、半分正しく、しかしもう半分は間違っている。オルロフは確かに黒龍隊の遭遇した怪現象と密接に関わりがある。しかしながら、オルロフそれ自体はさして便利な代物ではない。むしろ不便と言ったほうが妥当ですよ」

「馬鹿を言え。啓示軍の手品の種がそれだとすれば、どこが不便なのだ」

「いいから最後までお聞きなさい。――より重要なのは、オルロフを鍵としてアクセス可能な、上位のバルムンクシステムです。それこそが、異なる時空間の直結を可能とし、いわゆる“ベルリンの壁”を形作り、そして人の精神すら侵す禁忌^{クンレン}の存在。元老院はこれを<崑崙>と呼んでいる。そうだな、静香」

汪に顔を向けられた穴蒲が、拳銃ごとそちらを振り返る。

「馴れ馴れしく呼ばないで頂けるかしら、特別運用調整官殿。たとえば仮初^{かりそめ}の名でもぞっとするわ」

その態度に江藤のほうがぞっとする。仮初と切り捨てたその名で過ごしていた姿のほうが、まだ可愛げがあった。阿納真理といい、秋月杏里といい、自分の周りにはどうしてこうもツンばかりが多いのか。ちょっとはデレが欲しい。

信じられない精神の持ち主ということでは、汪凱威のほうもそうだった。辛辣な言葉の反撃を受

けてもけろりとしており、拳銃には逃げ腰になりながらも、まだまだ退場する気もなければ、舞台を降りて聴衆に転ずる気もなさそうである。

「江藤少佐。私は暖炉の谷で負った傷を癒したのち、直ちにあなたがたの足跡を追った。ダーダネルス作戦におけるすべての里程を。猿之門基地への凱旋から遡って、暖炉の谷、タシケント、GT72 鉦山基地、西フェルガナ基地、新青海^{チンハイ}基地、厚木基地……。そして猿之門基地へ再び行き着こうとした、その矢先に九天軍と啓示軍の襲撃が始まってしまった。綿密な調査を至上とする、特別運用調整官としての私の完全性が裏目に出てしまいました。しかしおかげで、ここであなたに解説することができます。オルロフの何たるかをね」

「口上が長いぞ。結論を三行で教えろ」

「これだから蛮勇の武官は……。まあ、いいでしょう。オルロフはただの呼び鈴に過ぎませんが、その先にある<崑崙>は、精神と物理現象とを操作する能力を持つ、いわば神のような存在。元老院はそもそもが<崑崙>の管理団体であり、彼らに亜細亜連邦樹立という偉業を成し遂げさせたのも、その力あってのことだと言えるでしょう。ことによれば、八月の悪夢すら<崑崙>を使って元老院が用意したパラダイムシフトだったかもしれない」

ゴシップ週刊誌が数ヵ月ネタに困らないような話を汪はさらりと言っただけのける。

「それが真実なら、なんとも壮大なマッチポンプだな。元老院は自ら世界の混乱を招いておいて、その收拾の功績を周囲に認めさせ、今の地位に収まった」

「そこまでいくと、未検証の仮説といった段階ですが、少なくとも私見としてはそうです。しかし、今ここで元老院を追及したところで得られるものはありません。彼女の言うように、啓示軍や九天軍からオルロフを奪うことを第一に考えましょう」

その提案には、江藤も賛成するにやぶさかでない。なにせ他ならぬ元老院議員と面識ができたのだ。あの白スーツに協力的態度を取っておき、蜜月の関係を築いてしまえば、彼らの急所を掴むのも、<崑崙>なる存在の正体を探るのもたやすくなる。

「しかし、制御器は壊してしまっただろう。どうやってオルロフの在り処を知る？」

「あなたはいい質問をする。そして私はいい答えを持っている。――地上をご覧になれば、少佐もすぐおわかりになる」

そのヒントでピンと来た。あるいは、第六感と呼応した毛穴の収縮が先かもしれない。ともかく江藤は汪の利用しようとしているものの正体を理解した。それはまだブルーシティの地上と地下を徘徊している。

「鎧蜘蛛を使うのか」

「そのとおり。あれらはすでに、本能の赴くままオルロフに群がろうと動き出しているはず。軍や警察の組織力を用いれば、オルロフの探索は時間だけの問題です」

汪凱威は気楽に言うが、市民たちが鎧蜘蛛の姿を見たらパニックになるだろう。空が白み始める前に、E6 ともどもカタをつけるべきだと江藤は判断した。時間はあまりない。

もっとも、時間制約は穂積のほうが厳しい。鎧蜘蛛が食い荒らすか、亜連が回収するかのまえに、彼女は目的を達成しなければならない。元老院の秘密を白日の下に晒し、亜連の支配体制を叩き壊すという野望の第一歩のために。九天軍がなお戦意を維持し、穂積の指揮下にあるとすれば、まだ

一波乱を覚悟しておくべきだろう。

そして、江藤の胸騒ぎは的中した。

「なんだ、あれ」

峰國が空を見上げている。ゴン太がシートベルトを噛み千切る勢いで暴れ、吠え出す。江藤もその方向に形容しがたい圧迫感を覚えていた。消滅砲の虹色の光を思い出し、唾を飲み込みながら江藤は――将龍は――振り返る。

天空に、琥珀色に光り輝く霧がかかっていた。

霧にはところどころに切れ目があり、浮遊する岩塊のようなものが垣間見えている。光っているのはどうやら霧ではなくその物体のほうだ。表面全体が発光しているのではなく、岩肌の合間の亀裂のような部分から、光が漏れている。夜道で見る人家の窓の灯のように。しかし眩^{まばゆ}さは電灯の比ではない。溶鉱炉の輝き、もしくは、太陽のそれに^{たと}喩えるのがふさわしい強烈な光である。

江藤は思わず手を額にかざしながら、霧の奥の物体をよくよく観察する。

かなり大きい。比較対象物がないので正確にはわからないが、足元のブルーアイズに周長で負けることはないだろう。ブルーシティのミニチュアに誰かが拳大の石を投げ込んだような対比である。そんな巨大な物体が、落ちてくるでもなく、天空を漂っている。変則領域が生じていることは想像に難くない。

そして、その異様さを語るうえで、形状を抜きにすることはできない。

「砂時計がフラフープを回しているみたいだな」

江藤が言うと、汪凱威のわざとらしい溜め息が聞こえた。

「これだから教養のないお方は嫌いだ。原子軌道の d_{z^2} 軌道に似ている、くらいは言えないものか」

江藤は内心、ほっとした。自分が最初に気づいたのであれば、江藤は第六感が視覚に干渉して生み出した幻覚ではないかと疑ったところだ。しかしあれは違う。峰國も、汪も、穴蒲も、全員が同じ座標を向いて目を眇めている。

砂時計型の岩塊が幻覚ではないとなると、やはりそれを浮かしているのは変則領域以外に考えられなかった。しかし岩塊を取り巻く霧がバロログであるという確信は、江藤の第六感を以てしても得られないのだった。岩塊の見える方向の、変則領域の存在感が強すぎる。肉眼で太陽を直視できない感覚に近い。

「ともかく、あれが<崑崙>。おそらくは、そうです」

断定的な口調の割に、特別運用調整官は他人を説得するろくな根拠を持たないようだった。

「これがあんたの計画なの、大尉。オルロフの本当の機能を使わせないために、ここで一気に取り返そうとしたんじゃないの」

「予定外よ」

峰國に問いかけられた穴蒲静香は、珍しく声のトーンを外す狼狽ぶりを見せた。

「啓示軍の制御器さえ壊せば、穂積中尉の計画は水泡に帰す筈だった……。これは一体、どういうことよ。汪凱威、説明できないの!？」

「説明しよう。――これは私の理解を超える、と」

汪凱威にはわかるはずがない、と江藤は思った。全身の血液がアルコールに置き換わったような

違和感と興奮を、この男は共有していない。彼の話からすれば、暖炉の谷でベルリンの壁が生じた際にも一緒にいたはずだが、その経験も意味合いが大きく異なってくる。

暖炉の谷で、江藤は苦痛として壁の発生を感知した。しかし今、あの上空の巨大オブジェから感じるのは、痛みや恐怖ではない。驚いたことに、これを例えるには感動という概念が最も語弊がない。「で、どうするのだ」江藤は感覚を共有できない一般人たちに問うた。「元老院派の大好きな核弾頭で吹っ飛ばすか？」

視線を感じたのか、汪がこれを受けて応答する。

「やれやれ、まだそんなことを言っているのですか、あなたがたは。いい機会なので、ここで誤解を解かせて頂こう。私は、暖炉の谷で核弾頭など使っていない。使おうと考えてもいない」

「その言い分は、元老院派のでっち上げそのままだ」

「事実を曲解しているのはあなた方だ。あのとき私が龍王^{ロンワン}に同乗して遂行しようとしていた任務は、全く性質が異なる。不知火の弾頭に使われたのは、他にもない、元老院保有のオルロフのひとつ。これをベルリンの壁中心に撃ち込み、オルロフ同士の干渉作用を引き起こすことで、啓示軍の作った制御系を崩壊させる。そういう作戦だったのです。結局のところ、龍王はRAT特務員であった久留伍長の錯乱により任務に従事できず、江藤少佐、あなたが別のやり方で啓示軍の制御系を崩してくれたために事無きを得たのですが」

「手持ちのオルロフでそんなことが可能なのなら」江藤は怒りを抑えきれずに怒鳴る。「どうしてさっさとベルリンに乗り込んで、ハンス・ライルスキーの首根っこを掴まないのだ！」

汪凱威は肩を竦める。

「私に言われても、決定権は持っていないのでどうしようもない。きっと何かしらの制限があるのでは。元老院も、なにも秘密を隠すためだけに、啓示軍への有効な対抗手段を出し惜しみはしないでしょう。彼らもこの戦争で多くのものを失っている。その視点を、江藤少佐、黒龍隊隊長であるあなたは見落とすべきでない」

その言葉を受けて考えるところがあり、江藤は反駁の舌鋒をひとまず収めた。むやみに権力に衝突しただけなら幼稚な逃避に過ぎないと、若き日の江藤は考えた。だから積極的に参画する手段として士官になった。その経緯からすれば、黒龍隊隊長という立場は願ってもないものである。それを与えた人々の思惑がどうであったにせよ、これはもう、自分のものだ。そして、自分のものだからこそ、責任は逃れられない。江藤がこれまで道具としてのみその立場を利用してきたという汪凱威の指摘は正しい。

江藤が押し黙ったそばで、ゴン太が唸り声を上げる。その鼻先は、夜空を昼のように変える上空の物体にまっすぐ向けられている。江藤の感覚に変化はないが、より鈍感な将龍の相対バルムンク反応センサーは、表示する反応レベルを表示上の上限値まで引き上げた。江藤は機械よりも先に感覚の飽和を迎えていたのだ。

<崑崙>の変化は視覚的に識別困難だったが、やがてそこへ、天空の四方八方からか細い筋が伸びてきた。ロケット噴射の航跡か。来し方を辿れば、Su-42の機影が微かに視認できる。

核ミサイルかもしれない。江藤はせめてタワーの陰に入れば熱線と衝撃波からは逃れられると考え、峰國と先着一名を将龍で摘み上げようとしたが、雷紫電を投げ捨てている間に弾着予想時間を

超過した。

しかし、爆発は起きない。航跡は確かに<崑崙>に肉迫していたが、衝突に至る前に舵を取り、至近距離を周回している。ブルーシティを見守るように飛んでいたSu-42編隊の縮図であると感じ、そして江藤は、撃ち込まれたのがミサイルではないことを悟った。

「プローブか。第一戦略機動師団のクソツタレどもは、このために今まで静観していたわけだ」

「きっとそうでしょう」汪が応じる。「これでお解りになったはず。元老院はあれをよくよく調べ理解したいと考えこそすれ、破壊するつもりなどない。あるいは、破壊はそもそもできないと考えている。ベルリンの壁がそうであるようにね」

「そして、制御もできずにいる」思いのほか低い声で口を挟んだのは峰國だった。「では、保有者である元老院にも制御できないものを、今あそこに出現させているのはどこの誰だ」

「それは……」

口ごもる汪を尻目に、そのとき、江藤は確信していた。<崑崙>から届く波動のなかに、見知った気配が潜んでいる。

「穂積克！」

地下から消え去った穂積の行き先があそこだとすれば、江藤は、自分もそこへ乗り込むことができなから考えた。将龍は九天軍の構築したバルムンクシステム——オルロフを組み込んだものに違いない——と同期し、時空跳躍を起こした。再現性も得られている。条件こそ不明だが、将龍ならばオルロフの性質を利用してあの空中楼閣、<崑崙>に直接移動できるだろう。

江藤は、龍王から流し込まれたオルロフ制御プログラムの作動状態を確認して、それがまさに活発化しているのを発見した。将龍は積極的にオルロフを制御しようと頭脳を——EPUを働かせているようだが、どうも肝心の応答が得られていない。こう動かしたい、という意味が将龍にはあるが、オルロフにそれを伝達できていないようである。もしくは、送ったコマンドとクエリを完全に無視されているか。

続いて江藤は閃いた。角龍搭載の戦場管制システムが噂通りのスペックを持つならば、将龍の言葉をうまく翻訳し、あれに伝達できるかもしれない。

「藤居、聞こえるか、藤居」

閉鎖していた通信チャンネルを開いて藤居を呼びだそうとしたが、江藤の声を聞いて真っ先に応答してきたのは別の部下だった。

「やっと繋がった！ 江藤少佐、どこにいるんです？ というかあれは一体、何ですか。近衛軍の戦車が砲撃を始めましたが、全く効いていません。まるで“ベルリンの壁”と一緒に。俺たちは啓示軍にしてやられたんですか」

「竜時か。おそらくだが、あれは啓示軍の制御下にはない。穂積が九天軍の支援でやっていることだ。俺がクエリをつけるべき問題だ。だがしかし、将龍ではあれとコミュニケートできんらしい。角龍の力がいる。藤居はどこだ」

「言っていることがよくわかりませんが、藤居さんの角龍とは、通信途絶しています。戦場管制システムはもう機能していません。手探りで啓示軍と鎧蜘蛛を各個撃破していましたが、今はあのデカブツをどうにかするのが最優先のようですね。——通信が届かないのが問題なら、殴りこむまでで

しょう。暖炉の谷と同じです。将龍なら、やれるんじゃないんですか？」

「そう簡単に言ってくれるな。将龍は雷麒麟のコピーとしては不完全だ。九天軍の装置とどうにかリンクせにゃならんが、その鍵がわからん」

<鍵など、必要ないのですよ>

「なんだと。気合でどうにかしろというのか」

「俺はそんなこと言っていませんよ」

「今、鍵など要らんとしなかつたか。――いや」

江藤は、そのメッセージがどのような知覚の経路を辿って脳に至ったものか、定かに思い出せないことに気がついた。

耳から入った情報ではない。

「穂積か」

<そうです>

意味が直接響いてくる。文章として明瞭に出るのではなく、別のプロトコルで情報が脳に届けられている印象を江藤は受けた。それは、暖炉の谷で知らず知らずのうちに敵愾心^{てきがいしん}を増幅された亜細亜連邦軍の将兵たちの様子を彷彿とさせる。

<オルロフはコミュニケーター。《崑崙》を呼び出すための。でもその通信プロトコルは、人の脳とも情報交換できる。私はその性質と、インプラントの力を借りて、《崑崙》の制御を可能としました。《崑崙》を介して、私は幾多の人々の脳に直接語りかけることができる>

啓示軍のやった手品の種明かしを穂積はやろうとしている。そして、その技が啓示軍だけのお家芸ではないことも、穂積は白日の下に晒したいのだろう。元老院の権威失墜という目的を達成するために。

しかし、江藤は敢えて問いただした。

「何をやる気だ。皆さんごきげんようと挨拶したいわけでもあるまい」

<革命ですよ。純粹に情報のみによる革命。最低限の血は、もう流しました>

明確な部分だけを言語化すればそのような内容だった。だが江藤は、言葉として変換されない穂積の思いをも感じ取っていた。亜細亜連邦の体制に対する憤懣^{ふんまん}、革命を成し遂げられなかった悔恨、父との訣別に至った苦悩、九天軍に与してまで目指す新体制への意気込み……。

そして、さらなる奥に秘められた感情を汲み取ったとき、江藤は胸の痛みを回避できなかつた。異端である江藤の存在を理解したいという衝動が穂積の心の内奥^{ないおう}にある。しかし江藤はその気持を受け取れない。この疼きは変則領域に対する反応などではない。

「穂積、すまん。俺は……」

「江藤少佐！」

現実の声がして、江藤は五感に対する意識を研ぎ直した。

どこからやってきたのか、鎧蜘蛛が目前にいた。

穴蒲が拳銃を放ち、汪がやめさせ、峰國が辺りの死体に駆け寄ってロケット弾を担ぐ。江藤も一度放り出した雷紫電を将龍に拾わせたが、まっしぐらに将龍めがけて突進してきた鎧蜘蛛に機先を制された。雷紫電を握った腕が強靱な腕に取り押さえられる。かなり大型の個体だった。暖炉の谷

で見たどの個体も及ばぬほどで、質量は明らかに将龍より大きい。ブルーアイズ内部の人間用通路を登ってこれたはずがないのはもちろんのこと、ここまでのサイズとなると壁を這い上がってきたとも考えにくい。

鎧蜘蛛が体を押し付けてきたかと思うと、その腹がぱっくりと左右に割れた。胸腔とでも言うべきか、牙の生えた大口が将龍に齧^{かじ}り付こうと迫る。外見こそ似ていても、甲殻類や昆虫の構造とは全く異なる。江藤は牙やその奥の空洞よりも、その異質さに恐怖を覚えた。

両手を押さえられた将龍はあっけなく組み伏せられた。苦し紛れに胸部マルチランチャーから煙幕弾や閃光弾を発射したが、射線は鎧蜘蛛の肩の上をすり抜ける。燃料の残り少ないメインロケットに点火し、振り落とそうと試みるも、将龍の胴に齧り付かれるほうが早い。

江藤は肌の粟立ちを意識しながら、これも穂積のやらせていることではないかと疑ったが、そうではなかった。

機体にのしかかっていた重量が、突如として軽減された。

飴のように溶けた手足と、酸化しぼろぼろになった破片とが、将龍の上に残されている。胴体はまるごと消えてしまった。

<崑崙>から一筋の鋭い射線が伸びたことを、江藤の知覚は明瞭に捉えていた。穂積は江藤を守ったのだ。

「消滅砲!？」

穴蒲の驚愕の声が聞こえる。

「いや、違う。今のは熱粒子砲だ。とんでもなくでかいだけのな」

消滅砲のビームには感知できるほどの熱量がない。それは経験上知っていることだ。しかし今のは将龍の複数のセンサーに高熱の履歴を残している。標的の間近にいた将龍も無事ではなく、コクピット内温度も急激に上昇してサウナと化した。装甲もいくらか溶けているだろう。少なくとも温度センサは死んでいる。

江藤がこれまでに見たことのない威力、収束性、速度をもった熱粒子砲である。数キロメートル離れた位置から、正確に鎧蜘蛛だけを買いた点も見逃せない。

それを脅威とみなしたのは、江藤だけではなかった。啓示軍や鎧蜘蛛掃討に従事していた攻撃ヘリの数機が高度を上げ、<崑崙>へと果敢に向かっていく。地上からの砲火が効かないのなら、上からならば攻撃が届くかも知れないと考えたのだろう。もちろん、自身が撃墜されるリスクを覚悟の上で。彼らは横浜の町が廃墟となることを何よりも恐れたのだ。いや、もしかすればこれが世界の破滅の始まり、八月の悪夢の第二ステージではないかと危ぶんだゆえかも知れない。

「やめさせろ」

意気込みには感じ入るが、哀しいかな、ヘリなどあれの前では螻蛄^{とうろう}の斧に過ぎないと江藤は動物的に悟っていた。しかし、通信は繋がらなかった。

ヘリから放たれたミサイルは<崑崙>をびくともさせることなく、そして空中を仄かな光の筋が走るたび、ヘリが一機、また一機と爆散していく。

「穂積、やめろ、見境をなくすな」

悲壮な思いで叫んだものの、返事をしたのは、荒い鼻息の収まらぬゴン太だけだった。気づいて

いなかったが、通信系が殆どやられてしまっている。今しがたの熱粒子砲のダメージだろう。ヘリ部隊への警告は届くはずもなかったのだ。

江藤はコクピットハッチを開けた。熱で歪んだ装甲と機構部が干渉したので、あとは腕力でなんとか隙間を作った。そして峰國の姿を探して叫ぶ。

「峰國、俺の声を下に繋げ」

散らばった鎧蜘蛛の手足の影で背を丸めていた峰國は、江藤を振り向くと、ボロボロの通信機をかざして見せた。

「えへへ、いかれちゃって」

南田や栃原たちには繋がらないということだった。江藤は続いて穴蒲や汪凱威も探したが、二人ともめいめいに、どこかと交信している。江藤の呼びかけは完全に無視された。江藤を無視しているのは穂積も同じだった。理解したいと願いつつも、その実、江藤の気持ちをまるで汲み取っていない。一方通行の思い。

江藤は悟った。一方通行で当たり前だ。穂積はこちらの声や思惟しゐを読み取っているのではなかったのだ。空中を飛び交う膨大な電波信号の中から、江藤の声をキャッチしていたのだろう。だから将龍の通信手段が失われたあと、穂積は江藤の声を聞けなくなった。――あるいは、出血のため意識を失ったか。しかし<崑崙>はまだ輝きを失っていない。穂積がいなくとも機能を維持するとなると、それはそれで、厄介だと江藤は気づく。

とにかくあそこに踏み込まなければ罫らちが明かない。江藤はどうにか辿り着く方法を脳裏に思い描いて逡巡した。

――もしや、そういうことか。

江藤が閃くと、光がはじけた。

十四

リヒャルト・ブラームスは戦場で上官を探していた。ケーシャ・スラント。彼の戦意を支えるただひとつの支柱を。

地上で四方からの砲火に追い立てられ、ブラームスの乗機、通称ブラオンシュツツェは、あちこちに傷を負っていた。破損はコクピット内部にも及び、ブラームスは血眼ちまなこの文字通り視野を血液で遮られていたが、幸いにしてまだ機体の飛行能力は失われていなかった。とはいえ危ない橋だ。メインジェットなり、翼のひとつなりを撃ち貫かれれば、もはや帰還は叶わなくなる。

それでも、ブラームスは高度を上げるつもりはなかった。破損したセンサーでは、数十メートルの低空にいないと、シュヴァルツパンターの姿を捕捉できそうにない。半時前に交信を絶ち、機体のどれだけがそのままの姿で残っているかわからないケーシャの愛機を、彼はなんとしても見つけるつもりでいる。すでに多くのフルークゾルダートが刀折れ矢尽きており、翼すら失った彼らを連れ帰ることはもはや不可能だが、ブラームスはただひとり、ケーシャだけを助け出すために、自らの命を賭としていた。

もっとも、願いどおりケーシャを救い出せたところで、おいそれと空へと舞い戻れるわけではない。

頭上にそびえる、天にも届こうという巖^{いわお}。空前絶後の巨大砂時計は、トーチカとなってブラームスの道を阻んでいる。

基幹部隊からこのような物の出現の可能性は聞かされていない。正体はわからないが、あれが接近する航空戦力を強力な熱粒子砲で叩き落としているうちは、ブラームスも上空を押さえられることはないだろう。飛び上がればブラームスも標的となる。あれを操る意思が啓示^{オフェンバーレナ}軍に属さぬものであることは明白だ。あの物体は E6^{エーゼクス} を一切援護していない。あれが亜連の戦車を焼き払ってくれていたなら、ブラームスの傍らには、まだ二人の部下が従っていたはずなのだ。

そんななかでも、まだブラームスが生き残っているのは、敵の情報中枢であった見慣れぬ龍^{ロン}を破壊できたおかげである。もっとも、その代償としてブラームスは機体の頭部を持っていかれた。気密こそ保たれているが、コクピットのすぐ上は薄皮一枚隔てて外気である。射出座席が作動しなかったのは、ブラームスが直前にその機能を破壊したからに他ならない。中途半端な損傷で戦線離脱するつもりはなかったし、そもそもこんな低高度、ビル群のなかで射出座席が作動したところで、生存率がどれほど高まるか疑問だった。

ケーシャもまた、そうしただろう。ブラームスはそう考えていた。だからシュヴァルツパンターの機体発見が最優先なのだ。そのコクピットの中に彼女は閉じ込められている可能性が高い。脱出している場合でも、その事実を機体状態から確認できる。

前方に相対バルムンク反応、レベル C を感知。シュヴァルツパンターの可能性があるが、センサー不調のため、パターン識別による機種同定が機能しない。味方機か、龍か、衝動だけで動くサーヴァントたちか。

敵味方も判別できないまま、レベルは B に上昇。残弾二発の EM カノーネを構えるより早く、それはロケット噴射で高度を得てブラオンシュツェの懐に飛び込んできた。機兵だが、ゾルダートタイプではない。画面の中で、長大な刀が閃く。

ブラームスのブラオンシュツェは、EM カノーネの砲身を跳ね上げて斬撃を受け止めた。亜連版ヴェルメゼーベルたる炎草薙かと思ったが、EM カノーネは溶断されなかった。火器管制システムはなお射撃可能の緑のライトを点灯させている。

ブラームスは確実な一撃を浴びせるべく、発射のタイミングを見送った。ロケット噴射で宙に浮いた敵機は、やがて推力を落とし自由落下に近いかたちで路面へと着地する。ブラームスは完全な隙を作ったターゲットを見下ろす。亜連製の機兵のようだが、やはりデータにない。しかし輪郭センサーのおかげでロックオンには成功している。ブラオンシュツェは機械の翼を広げて姿勢を安定させ、足元へ向けて EM カノーネを発射する。

直撃しなかった。敵機は手にした大刀を振り回して重心をずらしたのだ。穿たれた路面の破片と衝撃とが敵機を揺さぶり、そしていくらかは機体に損害を与えたと期待できたが、ブラームスとて次の一射には EM カノーネの冷却時間を要した。僚機がいればとどめを放てたものを、実際にできた追撃はといえば、照準がずれ気味の機関砲を浴びせることだけだった。これも致命打にはならない。

しかし間合いは取れた。相手は飛行できない。ブラームスは眼下の不明機を無視し、先に進むことにする。地上を徘徊するサーヴァントが、それを取り囲むように集まりつつある。

次のストリートに移るべく、火線をかいくぐって高度を取ったブラオンシュツェに、取り付くものがあった。

「撤退だ、ブラームス！」

ザック・コミレットのフルークゾルダートだった。大型のヴェルメゼーベルは刃こぼれし、機体にも多くの弾痕が見られるが、動きは健在そのもので、ブラオンシュツェに手を貸して一気に高層ビルのひとつを飛び越えた。追いつがる火線がビルを砕く。

「まだ退けません。隊長を回収しないと」

「この状況じゃ無理だろうが！」

コミレットの言葉を無視し、ブラームスは高度を下げて次の通りの探索を始める。と、そこへ新たな敵が接近してきた。今度は視認で機種判別。龍。それが二機。

EM カノーネの最後の一発は、腰だめの射撃体勢にあった龍の胴体へと直撃した。撃破は確実で、それ以上観測の必要もない。問題は、直進してきたもう一機である。一目瞭然で火砲を携行しているブラオンシュツェに対し、目眩ましの煙幕と雷紫電だけで踊りかかってきたその敵は、ブラームスが機関砲を浴びせかけてもなお動じなかった。一旦煙幕に潜った龍が、ブラオンシュツェの真下からの跳躍で奇襲してきたとき、ブラームスは撃墜されるのを覚悟した。

しかし、龍の見事な^{とっかん}呐喊は、間に割って入ったコミレット機の重剣により防がれた。

「退け！ 隊長はあんたの犬死になど望んでいないぞ！」

龍を地面に跳ね返したコミレット機は、その反作用で浮き上がった機体をさらにブラオンシュツェに接触させて、離脱を促す。

「攻撃が収まったな。今がチャンスだろう。行くぞ、中尉殿。飛行可能な仲間だけを集めるんだ」

「待ってくれ、コミレット少尉。地上で抗戦中の味方機がまだいるはずだ。彼らを回収しなければ。回収部隊と合流すれば、四機は拾いあげてもらえるだろう」

言いながら、ブラームスは己の嘘に呆れていた。今の今まで、部隊員の顔など忘れていた。ただの戦力単位としてしか考えていなかった。いなくなったおかげでケーシャの救出が難しくなった、という程度にしか。今こうして反駁しているのは、彼女を救出する時間を稼ごうというおためごかしに過ぎない。そうしたことを冷静かつ客観的に捉えている自分にブラームスは気づき、肌の粟立ちを覚える。

「そいつはどうだ」

ザック・コミレットはビルの屋上に掲げられた看板をヴェルメゼーベルで切り落とし、地上の敵に対する牽制としつつ、強引にブラオンシュツェをブルーアイズから遠ざける方向に引っ張っていく。「俺たちはもともと、劣勢となれば機体を捨てて脱出し、九天軍の世話になるのが最有力オプションだった。隊長はそうは考えていなかったが、な。しかし現実はそのさ。フルークゾルダートで仰々しく乗り込んだところで、肝心のポートが開かなければ増援も補給も得られず、全滅は必至。それが自明だからこそ、基幹部隊は、喋られて困るような情報を俺たちに与えちゃいない。あんなデカブツが現れることも、九天軍との密約の中身も、何もかも。とどのつまり、俺たちを迎えに回収部隊など来ない。自力で飛べない者は置いて行くしかない」

ちょうど、眼下に撃墜され大破した友軍機が見えた。回収部隊とのランデブーを、彼、もしくは彼

女は、企図していただろうか。

「そんなことは……。いや、そうかもしれない。基幹部隊は私達を信用していたとは言いがたい。しかし、そんなことは、もともとどうでもよかった。私は、あの人がいてくれれば。ザック、私はここへ残る。九天軍も私に利用価値を見出し、合流させてくれるだろう」

そこで推力を落としたブラオンシュツェに気づくと、コミレット機はすぐに戻ってきて、ヴェルメゼーベルを振りかぶる。ブラオンシュツェの背後から飛来したミサイルが叩き斬られ、コミレット機の安定翼の一部が剥落して、ミサイルの破片とともに地上へと舞い散る。

「そんなことをして、死んだかもわからない隊長を探そうってのかい？ ——リヒャルト、あんたは、戦隊ひとつ全滅させた女として隊長の名を広めたいのか？ 違うだろ。なら生還しろ、俺と一緒に」
「ザック、あなたは」

「これ以上ゴタゴタ言うようなら、俺はひとりで帰るぞ。俺だって、慕ってる御仁にまだまだ尽くさなきゃいけないからな。——ハンス・ライルスキーのためなんかじゃない。他ならない自分のために、生きろ」

普段あまり内心を明かさないうザック・コミレットの、それは唐突な発言だった。それを追及する暇もなく、ブラームスの頭上から、高層ビルを貫通して強力な熱粒子砲の光条が襲いかかる。かろうじてかわし、倒壊するビルに押しつぶされないよう抜け出ると、まるでそれを待ち構えていたかのように、新手の戦車、ヘリが四方から二機を包囲しつつあった。

「私が敵を引きつけます」

ブラームスはコミレットの前に出た。上空からの熱粒子砲と、迫り来る敵機の前に機体を晒して。
「おい、待ちな！ ろくに武装も残っていないくせに」

「行ってください。これはせめてものお礼です。大切なことに気づかせてくれたあなたへの」

ブラームスは前進する。もはや迷うことも、後ろめたさを覚えることもない。他の誰のためでもなく、自分のために進むのだ。名誉も何も知ったことではない。ベルリンにはケーシャ・スラントがいないのだ。ならば、取るべき進路は決まっている。

機関砲、ロケット弾、熱粒子砲……。種々の火線がブラオンシュツェの機体を叩き、砕き、貫く。しかしブラームスはまだ飛ぶことができた。そして視界は巨大な巖に塗りつぶされる。

衝突の寸前、ブラームスはその物体を形容するにふさわしい言葉を見つけた。

「神々しい……」

光の渦が彼の意識を消失させた。

十五

夢の中で奈落へ落ち込んで行き、底に衝突する瞬間にはっと目を覚ます。江藤が味わったのはちょうどそんな感覚だった。

江藤は将龍ジャンロンごと別の場所に移動していた。真夏のビーチなど足元にも及ばない眩しさが周囲の観察を阻んでいたが、やがれそれが幻覚であることに江藤は気がついた。

自分を取り巻く濃厚な変則領域を、等高線のような線図のイメージで意識する。途端に、江藤は

過度の光を感じなくなった。あるのは普段通りの将龍のコクピットであり、壊れて閉まらないコクピットハッチから覗ける、薄暗い洞窟のような環境である。実際の光はむしろ乏しく、闇に溶けたその環境の辺縁を視覚で捉えることはできない。

目が慣れて、江藤は将龍と洞窟との間にまたひとつ別のレイヤーが横たわっているのを発見した。ブルーアイズの頂上部分だと識別できたのは、そこに数人の生存者と、何倍もの死体が転がっていたからだ。

誰かが呻いたと思ったら、それは江藤自身の声だった。鳥肌の立った腕を袖越しにさする。無性にぬくもりが欲しい。ゴン太のふかふかの体を抱きしめられれば少しは紛れるだろう。――しかし、その愛狼がない。後部席の拘束を抜け出したのは戦闘中、随分前だった。密閉空間を嫌ったのか、外の様子に興味を惹かれたのか、ともかく声も姿もない。

ハッチは例外だが、将龍は概ねにしてまだ動くようだった。機体動作も然り、オルロフへの干渉に成功したらしいバルムンクシステムのほうもまた然り。

それでも江藤は機体を置き去りにして、外を探索することに決めた。

江藤はオルロフを制御下に置いたわけではなかった。どうやら<崑崙>とやらの内部に転移できたようだが、自分がトリガーを引いたのかどうか、江藤には確証がない。むしろ、積極的に疑っている。

江藤は光りに包まれる前のことを思い返してみる。<崑崙>へ飛び込むアイデアの輪郭こそ思いついたが、具体的な手順はまだ決めていなかった。もちろん、決めていなければ実行にも移せない。そうする前に、ここへ来てしまったのだ。第一、江藤は周辺の空間まるごと転移させようなどとは考えていなかった。将龍のバルムンクフィールドの展開範囲を超える半径であり、どういう原理で巻き込んでしまったのかも見当がつかない。ともかく制御できているとは言いがたいのが現状で、このまま意図せぬうちに将龍が転移を起こしでもしたら、ゴン太とはぐれてしまう。

新たな機能を得た将龍を使いこなすことは、あとでいい。しかし機体の灯を落とすとこの場所に居続けられないのではないかという漠然とした不安もあり、暗証番号入力を要するセキュリティロックだけをかけて、江藤は切り取られたブルーアイズの屋上部分に降り立った。

傾斜を感じる。人間は視界全体が傾いていると勝手に水平を補正してしまうと江藤は聞いたことがあったが、それを差し引いてもなお、この足場、ブルーアイズの屋上は傾いている。ボールを転がしたら最後、追いつけないだろう。ゴン太が自分の体でボール球ごっこをやっていないことを江藤は祈った。

いざゴン太を探そうにも、五感が朦朧としていてひどく大儀だった。一升瓶をひとりで空けたときの感覚に近い。将龍のバルムンクフィールドから出たのがまずかったようだ。

匂いを意識できない。ペンライトの照らし出す視野に捉えた物体を、個々に認識できない。今もまた、誰かの体に躓いて、江藤はようやくそこに人が寝ていたことに気づいた。しゃがみこみ、うつぶせの襟首を掴んで引き上げて無遠慮に光を当てると、それは見知った顔だった。

「おい、峰國ではないか。起きろ。風邪をひくぞ」

峰國が何か唸っている。というわけで死んではない。江藤は起こすのも面倒に感じて、放置する。周囲の気配に危険は感じない。バルムンク砲に狙い撃たれるような、毛のチリチリとする感覚は一切ない。

「なるほど、転移現象の前後で記憶が曖昧なのは、実際に意識が混濁しているからか」

すぐ近くで誰かが言った。しかし江藤はその意を解するのに数秒の時間を要した。頭の中の言語選択を切り替えて、ようやく理解する。そのときには、相手の正体も判じていた。汪凱威^{ワンガイウェイ}。自前のペンライトで手元の手帳を照らしながら、何か書き付けている。

「おまえを連れて来たつもりはなかったのだがな。そこらへんの死体もそうだ」

江藤が首をひねると、汪もまた鏡写しのようにそうした。

「おや。ブルーアイズの周りにこの岩盤が現れた結果、この場所だけが空洞内に取り残されたとは考えませんか、江藤少佐」

それは思ってもみなかったが、確かに考えられることだった。江藤をはじめ、黒龍隊はかつて、機兵や車輛ごと時空を移動した。同様に、穂積があの空中要塞ごと転移してもおかしくない。これまで江藤が飛んだ際に、臓腑の中に地面やコンクリートがめりこんだことはなかったが、それは果たしてただの幸運だったのか。汪ならずとも興味そそられる考察の対象はいくらもありそうだった。

とはいえ、今はゴン太への執着が何よりも勝っていた。そこで江藤はこう言った。

「おまえ、どうせ途方にくれていて暇だろう。俺の愛するゴン太を探す手伝いをしろ」

「ゴン太？ 男娼ですか？」

「おまえとは談笑できそうにないな。俺の飼^{すく}い狼だ」

汪は笑わなかった。ただ肩を竦^{すく}めただけだ。

話すだけ無駄だと、汪の肩を突き飛ばすようにして江藤は前進する。

あいかわらず五感は冴えない。

江藤は立ち止まった。

――汪は、日本語を使ったか？

――自分は果たして、汪という男を暗がりでも識別できるほど、よく顔を覚えていたか？ ふりかえった江藤は、幻ではないらしい確かな人影を認めて安堵する。将龍を至近で観察しようとする様子の執拗ぶりは、江藤の想像の範疇を超えるものだからだ。

しかし、もどかしさは残った。汪凱威といった何語を使って会話したのか、思い出せない。そしてそれが初めての感覚ではないことだけは、わかっている。

<それがオルロフの力の骨頂です>

江藤はもはや驚かなかった。

<なるほどな>それは簡単に可能だった。<ここは確かに《崑崙》とやらの中らしい。この岩の塊は、脳波すらピックアップする高感度の走査・通信システムのプラットフォームというわけだ>

<そして物質の構成情報すら転送できる。江藤少佐、あなたの描いたイメージが、テレポートを実現したのです。私が何度かそうしてみせたように。あなたと私は、その力を持つ稀少な存在、仲間です>

<これを俺がやったというのか>

<自覚はあるのでしょうか>

<ないな>嘘は通じない。<実際、おまえも似たようなものだろう。強がってはいても、俺の《崑崙》への干渉を防げなかった、それが何よりの証だ>

<あなたが来るのを拒む理由が、私にあると思いますか>

<はぐらかすな>

江藤はわずかながら体感重力の減少を察知していた。この空間は緩やかに降下している。地表へ。
<穂積、おまえの傷は深いようだな>

阿賀に受けた銃創からの出血が止まっていないとすれば、今すぐにも処置が必要である。思念で<崑崙>を動かしているのだとすれば、制御に^{ほころ}綻びが出るのも自然なことだった。

<そこまでお解りなら、話は早いですね。江藤少佐、せっかく来て頂けたのなら、私の役目を引き継いで頂けませんか。私には少し時間が足りなかった>

<おまえはいつだってそうだ。考える時間が足りない。だから叛乱などバカのやることだと分からない>

<叛乱じゃない。これは情報による革命だと言ったはずですよ>

<では、すぐに攻撃をやめろ>

<攻撃……。自衛反応があるとでもいうの……>

<関知していないのか。危険だな。おまえはやはりこのデカブツを制御できてなどいない>

<認めましょう。そしてお願いします。あなたに革命の意志を継いでほしい。元老院はこのような物の存在を隠蔽していた。この事実を、^{あまね}遍く世界に知らせたい>

<先に落下を止めろ。それもできないか？>

<《崑崙》の崩壊は止められません。もとより、条件が不足していたのです。私はいつかの時間を得るためだけに、あの男に計画の変更を要請した。ほんのひととき。それすらも失われようとしている>

穂積には、もうそれを行う集中力が残っていない。江藤の受け取る思惟も断片的になってきた。
<崑崙>内部という絶好の条件がなければ、とうに判読不能の信号になっていただろう。

<何を言いたい。聞くだけは聞いてやる>

<ありがとう、江藤少佐……>

安堵の感情をスイッチにして、穂積の意識が一瞬途切れる。しかし、闇に沈み込む前に復活した。
<我々の敵は啓示軍ではない>

^{ことだま}言霊が突風となって江藤を襲った。体勢を崩して尻餅をつく。

起き上がろうとしたが、わずか三センチ伸びをただけで終わった。体が震え、手足が萎えている。今のメッセージは外にまで届いたと確信できる、強烈な波動だった。改めて江藤が発信する必要はないだろう。

しかし、いったいどういう意味なのか。敵は元老院だと言いたかったのか。続きはないのか。待てども返事はない。動揺が退潮し、^{りよりよく}臂力が蘇るだけの時が過ぎてもなお。

江藤は立ち上がり、尻の埃を叩いた。

そこしか力のぶつけどころがなかった。

もう穂積に^{せっかん}折檻の必要はないのだから。

歩いて行くと、空洞はいくつもが連なっていることがわかった。構造としてはスポンジの内部に近い。ただし岩製の。よじ登ったり、滑り降りたりしてそこを進んでいく。

ゴン太は簡単に見つかった。

聞こえてきた遠吠えを頼りにアスレチックを進んでいくと、軽石のような多孔質の岩塊が連なる一帯に、ゴン太が鎮座していた。その足元には人間が横たわっている。

穂積克だった。

江藤はその体を抱き上げようと腰を落とす。

「待ちなさい」

銃声はその声が続いた。穴蒲静香が、全身の毛を逆立てた猫のような形相で、江藤を睨んでいる。

「待ってなどいられん。この場所は地面に落ちちようとしている」

恫喝としてはお手頃だと江藤は思ったが、しかし相手はひるまなかった。

「だから、その前にサンプルを回収したいわけ。早くしないと撃つわよ」

「おい、キャラ違ってるぞ」

「うるさい、私には個性も戸籍も必要ない」

穴蒲は近づいてくる。狙えば当てられる距離まで詰めようとしているのだ。狂っているわけではない。なお冷静な判断力を残したうえで、彼女は行動している。

「脱出のあてがあるようだな」

「まあね。乗せてあげてもいいけど、定員オーバーかも。特にあなたのサイズでは」

岩の砕けるけたたましい音がして、穴蒲の脱出手段が自ら姿を現した。

「偽龍王……。門宮か。どうやってここに」

機兵用の出口のない“ルート”に置き去りにしたのだ。穴を掘って出てくるには早すぎる。それとも、十分な時間が外界では過ぎ去ったのか。

「何を言っている。君がやったことだ、江藤少佐」

まったく素晴らしい、と言って手を叩くのは、機兵の手に乗って江藤を見下ろす、^{ホンシュウレン}洪秀連だった。

「江藤少佐、君はこのとき横浜にあってオルロフと同期していたすべてのものを、生物と無生物との境なく、すべてここへ転送したようだ」

「おい、勝手に俺のせいにするな。偽龍王に仕込んだ干渉プログラムがようやくと作動しただけのことだろう」

「もしそうなら、あれを連れて来たりなどするものか」

洪が親指で示した物を目に入れて、江藤は食用蛙が潰れたような呻きを漏らした。機兵サイズにまで成長した、ヌシとでも呼びたくなる威容の鎧蜘蛛が、四対の手足で器用に岩を掻き分けながら追って来ている。

よくよく見れば、龍王は多数の引っかき傷を負っており、部品も一部剥落している。二体の乱闘の様はおおよそ想像がつく。ここで続きを演じてほしいなどとは、江藤は全く思わない。

「あっちに行け、門宮。あれはコアに誘引されている。囷になれ。そのかわり、こいつは俺が拾って帰ってやる」

江藤は穂積を担ぎ上げようとし、穴蒲が発砲する。脅しではなかった。そのとき地震が襲ってこ

なければ、江藤は銃弾を腹に収めていたかもしれない。

「やめろ、ふたりとも」男モードの門宮が叫ぶ。「穂積の脳神経系はまだ機能を停止していない。つまり、あの化物にはなおコアとして認識されているんだ。逃げるなら、そいつの首を切り落とすか、俺たちに引き渡すか、そのどちらかだ」

選択の時間的猶予がないことは、激しくなる一方の地響きが明示している。

幸いにして、江藤の答えは決まっていた。元老院とその子飼たちの提案では、ここから脱出できるのは江藤だけだ。ゴン太くらいは抱いていけばいいかもしれないが、まだ峰國と、ついでに汪凱威が残っている。もちろん、冷たくなっていく穂積の体も置いては行けない。首を落とすなどもつてのほかであり、元老院の玩具として提供する気もさらさらない。

「俺は好きにやらせてもらう」江藤は洪秀連に向かって見栄を切った。「その三つ編みを巻いて逃げ出すがいい」

「なっ、私の誇りある髪型を犬のしっぽの如く……」

「無礼であろうが！」

再び銃を向ける穴蒲静香を江藤は無視した。射撃に手馴れているようだが、この揺れの中で当てられるものではない。

江藤はまだ温かい血の滴る穂積の体をお姫様抱っこし、足に寄り添うゴン太の感触をズボンの生地越しに意識しながら、ここでない場所の情景を見る。

「観念したか、江藤少佐」

「うるさい、集中させろ。俺はひとりふたりだけ助けるなど、スケールのみみっちは好かん。まとめてどうにかしてやる」

集中のために目を閉じる間際、洪が口の端で笑うのを江藤は見た。

「さっきのを本当に俺がやったというのなら、また逆をやればいいだけのことだ」

江藤はこのブルーシティで散り散りに戦う部下や戦友たちに思いを馳せ、猿之門のせせこましく煩わしくも楽しかった日常を振り返る。再びあそこに戻りたい。すべてが元には戻らないだろうが、江藤はもともとそんなことを求めている。もっともっと理想郷に近づけねばならないのだから、変化はむしろ望むところだ。

「根性、必中、魂、ひらめき！」

イメージが焼結した。

どよめきが起こり、今までとは振幅も周波数も異なる地響きが走る。もう転移に成功したのかと怪訝けげんに思って江藤が目を開けると、視界いっぱいそしゃくに鎧蜘蛛の目玉があった。琥珀色の輝きがまっすぐ江藤を捉える。

ゴン太が飛びかかった。威嚇の声も省略して即座に。しかし化物はそれを物ともせず、体を持ち上げて腹を見せる。一般に動物が弱点とする部分だが、鎧蜘蛛はそこに巨大な口を持っていた。あばらに似た牙が左右に開き、江藤を飲み込もうと迫る。

次に起こったことを、江藤はさんざん岩に頭をぶつけて危うく意識を失いかけてから思い出し、ようやくそしゃく咀嚼した。つまり江藤は助かったが、救援は意外な人物だった。

鎧蜘蛛の口腔と江藤との間に割って入ったのは、一見して華奢きゃしゃな体躯の少女だった。少女は拳大

の塊を迫り来る怪物の空洞へと投げ入れ、そして江藤をうしろざまに蹴り飛ばした。たたらを踏んだ江藤は穂積の体を取り落とし、階段状に連なる岩を池田屋よろしくずり落ちていった。

腹の中で爆発を受けた鎧蜘蛛はさすがに怯んだのだろう、江藤が体を起こしたときには、龍王が手刀で鎧蜘蛛の首を刎ねていた。

なおも暴れる巨体を龍王が押さえ込んでいる間に、江藤のそばに立つ男があった。「ようやく対面だ。こちらが手土産を持参するべきところを、逆に手伝いをしてもらって申し訳ないな」

「誰だ」

江藤は相手の顔を凝視し、記憶のなかのアルバムをめくった。どうやら親しいお友達ではない、とすぐにわかる。

「この私の名を尋ねるか。これまでなら『昊天』と答えるところだが、所詮は借り物だから価値がない。しかし、礼代わりにひとつ教えておこう。これも便宜的なものだが、一部の友人たちは私をケーニヒと呼ぶ。子供っぽい発想であり好みではないが、往々にして、名などは本人の意図とは関わりなく押し付けられる厄介な代物だ。もっとも、この私はそれらの枷の縛めを甘受する気などないのだが」

長口上の得意な奴だった。いや、これも音波ではない何かで伝わってきたのかも知れないと江藤は気づく。穂積が力尽きるとともに弱まっていたあの感覚が、揺り戻しを起こしている。

「いい勘をしているようだ。そう、これもまたFTPの可能性。この私が見極めんとするもの」

今度はたしかに声による発信だったが、男がFTPという言葉に込めた意味合いは、別の発信機、受信機、プロトコルによって江藤に伝わっていた。この男こそが穂積を幫助したという事実とともに。

「死にに来た、わけではないな、貴様。このデカブツをどうする気だ」

「今の状況は、この私の手に余る。早々に退散するとも。――投資は回収させてもらうがね。亜璃亜」

少女がケーニヒに呼ばれて降りてくる。その背後では煙幕が張られ、たちまち、元老院議員とその連れたちの姿が見えなくなる。門宮の怒声と龍王がもがく騒音はあいかわらず聞こえるが。

「どうするの？」

ケーニヒと肩を並べた少女、亜璃亜が尋ねた。出す日を間違えた粗大ごみでも話題にしているような口調で。

「そうだな。この御仁は連れて行けない。自力でなんとかしてもらえないか」

「言われずとも！」

掴みかかろうとした江藤を、機敏な動きで亜璃亜が制した。的確に関節を狙った打撃が、電気のように骨に響く。

「慌てるべきではない、江藤少佐。もっとも、時間がないのは確かだが……。論理と同様、飛躍は常道とすべきものではない。もうすぐ脱出口が得られる。機兵で脱出するのがいいだろう」

言ったそばから、発破のような衝撃が伝わり、空洞内で反響する。

もう一機の機兵が現れた。門宮が龍王でそれを押さえこもうと動いたので、江藤もそれに気づいた。一瞬、牙黒鷲かと思いつたが、どうも違う。気配が。よく見れば形も異なる。

詮索は後回しにして、すぐにケーニヒと亜璃亜のほうに視線を戻す。しかし二人の姿は消えてい

た。時空跳躍というわけではない。江藤の足元がごっそりと崩落して離れ離れになったのだ。

江藤は遠くなっていく岩の天井を見上げ、自分の足場だけでなく、全周囲のスポンジ状の岩塊がぼろぼろと崩れ始めているさまを目にした。そして異常に気づく。結合が解かれているばかりではなく、岩そのものが次々と光と化して消失している。その確かな証拠が、光の奥から流れてくる冷たい空気、そしてこの場所の高度を思い出させてくれる風切り音。生じた隙間は脱出口どころの大きさではない。〈崑崙〉は空中分解し、光のなかに溶けている。

江藤の足場はまだ消え去っていなかった。ゴン太とともに、六畳間ていどの広さの岩塊にしがみついている。高度はまだ高層ビル群まで落ちていない。自由落下ではないのだ。消え行きつつも、なおこの岩の塊には、超常的な力が作用している。おそらくは変則領域を利した制動がかかっている。

しかし〈崑崙〉中枢から放たれていた光はかなり弱まっているようだった。真昼のように地上を照らしていた光が、今や、これだけ間近にいても曙ていどにしか感じられない。この光が消え去るとき、万有引力が容赦無い勢いで自分と地球を熱烈にハグさせるだろうと江藤は察した。

パラシュートがほしいところだが、どこにも転がっていない。ケーニヒの言ったように、機兵が必要だった。岩を飛び移りながら降下していく偽龍王、そして闖入してきた所属不明機らしき影がちらりと見えた。ゴン太が不満げに吠える。

「落ち着けゴン太、どのみち将龍の燃料は残り僅かだ」

門宮たちはうまく高層ビルに乗り移る気だろうが、逆噴射は必須条件だろう。この岩場を離れれば自然法則に支配される。

――では自然ではない方法は？

将龍はまだ〈崑崙〉の機能をロードできるかもしれない。名案と思えたが、江藤は、それが自分の発想らしくないという違和感を覚えた。

〈届いていますか、隊長〉

声と思ったが、それはないはずだった。風切り音でゴン太の唸りしか聞こえない状態なのだ。聞こえるのは幻聴か、そうでなければ、〈崑崙〉が転送した信号。

〈よかった、聞こえたみたいだ〉

メッセージはいくぶん明瞭になった。まるで声のように聞こえるのだが、それは受信後に脳が情報処理した結果に過ぎないようだった。

〈峰國か？〉

江藤の問いに対し、肯定の思念が即座に返って来た。

〈イエッサー。どうも俺の脳やそこらに埋め込まれた多目的インプラントが、穂積克と同様のアクセスを可能にしているみたいですね。仕様範囲外なんで、自分でもびっくりですが。――今、回収します。将龍からはそちらが見えてるんで〉

〈プロテクトを解いたのか。しかし将龍ではだめだ。制動噴射が足りん〉

〈隊長、現実を直視するんです。あなたは将龍が有用であると本当は知っているはずだ。飛べばいいんです。自然法則に依らない方法で。それで助かる。いや、みんなを助けられると思っている、あなたは！〉

将龍が正面に姿を現した。周囲を落下中の岩を手足で押して、噴射剤を使うことなく江藤のもと

へと距離を縮めてくると、半開きのコクピットハッチから峰國の顔が覗く。

「そうだ、将龍があれば、まだ〈崑崙〉に指令を送れる」

江藤は自分とゴン太のいる場所が将龍のバルムンクフィールドに入ったのを知覚した。例のプログラムが活発に動き回っているのを、そのフィールドの波紋から感じ取れる。となれば、コクピットに乗り移るまでもない。この状態で、条件は揃っていると江藤は確信できた。

猿之門のイメージを再び呼び起こす。たちまち光が溢れ出し、江藤は〈崑崙〉のあまりに巨大な質量と体積を意識させられる。

――駄目だ。

猿之門にこの物体を転移させるわけにはいかない。丘の上の基地には仲間がおり、小山を切り開いた新興団地には北嶋の妻子が、商店街には昔馴染みの読字堂店主や、胃之上食堂^{かむろ}の鹿室がいる。さらには桃源協の源紅麗葉、他にも最近よしみを結んだ人々が大勢いる。災難が過ぎ去るのを祈り待つ市民たちの頭上に、流星群を降らすことはできない。八月の悪夢のようなことは、絶対に。

大洋、もしくは宇宙がいい。そうは思ったが、イメージが固まらない。船や飛行機で何の感慨もなく通り過ぎただけの場所には、ましてや行ったことのない場所には、飛ばせそうにない。

「隊長、暖炉の谷ですよ。あの中心部は立入禁止になっている」

「それだ」

「ワウ！」

ゴン太のひと吠えは、同意ではなく、威嚇と警戒のものだった。先ほどの鎧蜘蛛が近くの岩場に飛び移ってきていた。強力な変則領域の波動に引き寄せられているのか、江藤たちのほうへさらに飛び移ろうとしている。門宮や亜璃亜に受けた傷は決して浅くないはずだが、あいかわらずの貪欲さで獲物を喰らおうという衝動が窺える。

<ちっ。鎧虫機か>

一瞬、誰の思念かわからなかった。しかしそれは紛れもなく将龍の腹の中から発せられている。
李峰國^{リー}のものに違いない。

<隊長、お邪魔虫は俺が引き受けます。もう高度の余裕が無い。早いところ転送してくれ、スコッティ>

将龍が江藤たちの足場をゆっくりと突き放し、噴射剤を使って空中で一回転を決め、機先を制して鎧蜘蛛の張り付いている岩に飛びかかっていく。

<やめろ、峰國、^{しんがり}殿などというオイシイ役回りは部下には譲ってやれんぞ>

<これが俺の役目です>

<将龍がなければ転送も何もないだろうが>

<まだそんなことを。――認めるんです。あなたは普通じゃない>

江藤は息を呑んだ。もつれあう将龍と鎧蜘蛛が互いに破片を散らしながら岩場から剥がれ落ちた。特に、将龍の背中からはメインロケットのノズルが落下した。〈崑崙〉の力場から抜けたのか、相対速度が急激に増大する。江藤から見ても、落ちていく。

<わかっているでしょう。こうして将龍が離れても、隊長はまだ《崑崙》を制御し続けている。

ブースターとなるバルムンクシステムなど本当は必要ない。あなたが欲したのは、自力だけでこん

な人外の力を発揮しているわけではない、というお墨付きだった。しかし、実のところ、あなたは正真正銘の自力でそれをやってのけているんだ。そんなあなたが、今更いくら尋常な人間ぶったところで、イレギュラーである事実は消えない。過去は不朽です。でも人と人との関係性は絶えず書きさされていくものです。既往不咎きおうふきゅうと言うでしょう。これまでみんなに黙っていたことは、きっと大した問題にはなりません。これからですよ、これから。この戦争はまだまだ続く。啓示オフェンバーレナ軍に勝って終わりではない。金星也キムソンヤ元帥も、元老院も、そう考えている。そのときあなたはやるべきことがあるでしょう？ 流れに翻弄されるのではなく、流れを作っていくという野望を、叶える時が来る。そのために、江藤博照、あなたは生まれ変わる必要がある>

<峰國、貴様は何者だ>

<俺も認めます。RAT特務員ラットとして黒龍隊に潜り込んだ事実を。久留とは同じ穴の貉むじなってやつです。黙っていたのはすみませんでした。でも、黒龍隊で過ごした日々を俺は幸せだと思っています。だから裏切ったんです、俺を送り込んだ組織のほうをね。自分で納得のできる道を行くのがいちばんだって、母の口癖でしたよ。――あなたは特殊すぎるあまり、余人の関心を引くことも、一方で疎外されることもあるでしょう。でも、それがどうした、文句があるのかと凄んでやればいいんです。無条件に認めてしまうんです、自分自身を。俺はそのほうが好きだ。そして竜時も……>

峰國の意識の匂いがふつりと消えた。

江藤の意図がどこまで通じたものかわからないが、<崑崙>は急速に実体の殆どを失っていた。実体がこの場から消失したことで、その機能も失われたのだと、江藤はそう考えたかった。峰國の言葉が届かなくなった意味を、他のように捉えたくはない。

ゴン太がすり寄ってきて、脚に抱きついた。

間を置かず、薄氷を踏み割ったような感覚があり、江藤はゴン太ともども空中に放り出された。変則領域に干渉されない自由落下が始まる。

「ぬう、ゴン太、どうやら自分たちだけ飛ばしそこねたぞ」

驚くべきことに、もう主だった<崑崙>のかげらは見当たらない。小さいものは残っているかも知れないが、<崑崙>の放っていた光が消え去って時刻相応の闇に包まれた今、肉眼で見て取ることはできない。

江藤の第六感に対する強烈な圧迫が消え、五感が回復している。おかげで江藤は落下の恐怖を存分に味わうことができる。もはや誰でもわかることだった。これは、まずいと。ミンチよりひどいことになる。

ゴン太も震えている。しかし吠えはしない。ただ鼓動と体温が伝わってくる。

江藤は思い出した。灰色の小さな塊を拾い、守ってやると誓った日のことを。

あの日だった。阿納真理は、異能の持ち主としての江藤を黒龍隊隊長の役職に据えたいと語った。その真意を、江藤はまだ確認していない。

やり残したことはいくつもある。

峰國の代弁した野望は、必ず果たす。それが穂積克への供養にもなろう。

黒龍隊の部下たちの行く末も見守らなければならない。

胃之上食堂の通常メニューもまだ食べていない。

不朽の名作、パンタロン X の限定版コレクションボックスもまだ手に入れていない。
北嶋の家にご馳走になりに行く話だってある。
紅麗葉の扇子も預かったままだ。
こうしてはいられない。早く帰らなければ。
イメージが固まった。そこに確かな鼓動を感じる。いままさに孵^{かえ}らんとする雛が、殻という保護者を自ら突き破らんとして、果敢に嘴を振るうような。
江藤は呪文を唱えた。溢れ出す光を感じながら。
「囁き、詠唱、祈り、念じろ！」
なにやらすこぶる気持ちが良い。

十七

江藤博照は還らなかった。
いつ出されたのかもわからない非常事態宣言が解除され、旧山下公園に集結した黒龍隊が全員の安否確認をした結果、それが公式見解となった。
全体としては、死者一名、重傷者三名、軽傷者十六名、行方不明者一名。李^{リー}峰^{フェン}國^{グオ}少尉は夜明け前に死体確認の報せが入ったが、江藤博照少佐は乗機^{ジャンロン}將^{ジャン}龍^{ロン}だけを残して姿を消していた。愛玩動物一頭とともに。
曙光を受けた体が少しずつ温まる。
阿納真理は路傍の花のようにして、ただ黙って彼らを見守っていた。
＜崑崙^{クンロン}＞と前後して、江藤は消えてしまった。真理はそれを感じていたが、自信がなかった。長らく失っていた力だ。また消えてしまったのかもしれない、だとすれば江藤は存在を感じ取れないだけで、ちゃんと生きている。しかし、何もかもが不確かだ。変則領域そのもののよう。
二十四年前に突然現れたように、今また忽然と消えてしまったとしてもおかしくない。
可能性は可能性に過ぎず、妄想は妄想だった。黒龍隊とは別の部隊らしい龍^{ロン}が、歩行して近づいてくる。変則領域を操って重力をねじ曲げ、その巨体を自立せしめているその存在が、変わらずに続く現実を教えてくれる。
龍は立ち止まって暫時^{へいげい}近辺を睥睨し、そして右腕を頭より高く掲げ上げた。その掌上にはひとりの将校が堂々と佇立^{ちよりつ}している。無言の将校は、黒龍隊の面々の注目を一身に集めたことを見て取ったうえで、はじめて沈黙を破る。
「諸官、聞いてほしい」
張りのある明朗な声が無蓋のステージに響き渡る。
「現時刻を以て、亜細亜連邦特別規定第一〇号が発令された。この意味についての冗長なる説明は、ダーダネルス作戦で戦地を放浪した諸官らには無用だろう。そのうえで私、紫龍隊隊長茨木彪は、黒龍隊の人員、装備、及び情報を随時無条件に貸与頂くよう、諸官の義心に対して要請するものである。その目指すところはひとつ、この世界の防衛である」
一瞬の沈黙が、どよめきに転じた。昨日のできごとで精神を病んだか、という反応が傍目^{はため}にも多

数見受けられる。イレギュラーに対する忌避感。

しかし、真理は全く別の経緯から、その将校の語り口に強い忌避を覚えていた。

龍を暴れさせるかもしれない、と警戒した何人かが銃を向ける。まだ動く機兵に走るパイロットの姿もある。

そんななか、黒龍隊の側から、ひとりの青年が凜とした叫びを上げた。

「我々の敵は啓示軍ではない」

その一言で、騒乱はぴたりと止んだ。

「みんなも聞いだろう、あの声を。『敵は啓示軍ではない』。その意味を、俺たちはよくよく考えてみる必要がある。あの空に浮かんだ二重三角錐の要塞はいったい何だったのか。どこから現れ、どこへ消えたのか。――そして忘れてはいけない。俺たちもああして西フェルガナ基地から消え去ったことを。幻としか思えなかった現実と、対峙するべき時が来たんだ」

さざなみが人垣を伝播していく。彼らの主張の是非を論じる囁きは、声を大にして紛糾することもなく、小さな頷きの波となって、集団を均一化していく。

「藤居准尉の言うとおりで。あの声の語ったところは正しい。真なる敵は啓示軍ではない。九天軍でもない。それらの軍勢を依代とし、我々の世界を侵さんとする、影なる者たちだ。この世界を変則領域で満たした作為者は、もはやオカルトではなく、明らかに存在する！ 我々はこれと戦わなければならない。家族を、友人を、隣人を守るために。四半世紀前の災厄の再発を座視することは許されない。行動せよ、黒龍隊の戦士たちよ。我々は同志を求めている」

趨勢は決まった。真理はもうわかっていた。龍の掌上の将校は、傷つき、頼るべき指導者を失った将兵たちに、もっとも効果的な声音と抑揚を駆使している。しかし綿密な計算には依らない。それがこの男の生来の素質なのだ。と真理は直感した。

「敢えてその形骸に身を残し、挽歌を口遊んで己を慰めようとする者もいるだろう。それもまた、正しい選択のひとつだ。なぜならば、帰属すべき集団への愛情、慕情なくして闘志は成立し得ないからだ！ しかし、内奥にやるせなき炎を漲らせる兵たちは、直ちに我が下へ集え！ 敵の尖兵はすぐにでもまた迫り来る。応龍隊がそれだ。すでに昨夜の戦いで、影龍に酷似した機兵の跳梁を私はたしかに見た。彼奴らがいかにして弱小な組織ながら強力無比なる機兵を開発しえたか、これについて思索することはもはや何人にとっても容易だろう。まず討つべきは応龍隊！ もはや彼の者どもに騙され、翻弄されるばかりの日々は過去のものとなった。見よ、我らの矛を！」

煽動者は、自身を掲げ上げる龍を指したのではなかった。その背後に、予め打ち合わせた要領の良さで、二機の機兵が上空より舞い降りて着地する。

龍王。双方とも物々しく武装しており、武者姿を彷彿させるその威容は、黒龍隊の若人たちを熱狂させるに十分なものだった。

――しかし、真理は看破した。あれらは陸番機と同じ模造品だと。知識不足で形状からは見分けがつけられないが、真理には視覚情報以上に頼れるものがある。

真理はまた、誤りも認めた。

昨日までの直線上に続く今日、そして明日ではない。時代は変わろうとしている。ことほぐべきことだろう。ずっとずっと、年端のいかぬ少女の頃から望んできたことだ。ただ、その担い手が自

分の算段と異なっているだけのこと。

「行きましょうか、真理さん」

野崎兜跋が傍らに立っていた。言葉で組み立てるより早く、真理はからくりの有様を理解した。溜め息を初動として腰を上げる。

「見損なったわ、馬鹿者」

十八

昨日の戦いが嘘のように、春の陽気が猿之門基地を包んでいた。

南田は隊舎の玄関で座って待っていた。傷が疼くため、長時間は立ってられない。髭の軍医からは寝ていると言われたが、とてもそんな気にはなれない。

椅子にしているのは、横倒しのロッカーである。九天軍の突入を防ぐバリケードとしてここへ運びだされたものの、今は邪魔になって解体、放置されていた。そんな不遇のロッカーにも使用者を表明する名札があったが、持ち主はもうここにはいない。少ない荷物をまとめて、昼前には基地を出て行った。

他の多くの者もそうだった。黒龍隊隊員の過半数がここをあとにした。南田は昭和の駅の改札員よろしく、彼らのひとりひとりを見送っていた。かけるべき言葉は尽きなかった。

また、新たにふたりの仲間が南田の眼前を通り過ぎる。

「行くのか？」

坂元唯史は踵をかかとを揃えてふりかえった。何かを言いかけて、やめ、そして改めて言葉を紡ぐ。

「権限をなくした黒龍隊にいても、何もできない。俺は実効性のある努力を選ぶ」

「おまえも来い、竜時。与えられた枠に固執することはない」

鷹山が、こちらは脇目もふらず、靴を外履きに替えて出ていく。内履きは手荷物の雑囊に放り込んで。

「俺は残るよ」

続けて語るところに迷いはない。

「決めたんだ。いつか黒龍隊の隊長になるって。約束したんだ、峰國とも」

坂元が憐憫の目付きでまた何か言いかけて、うつむきがちに頭を振った。再び正面に固定した顔は、笑っている。

「そうか。がんばれよ」

ありがとうの一言すら、南田にはもう出せなかった。

坂元が鷹山に追いつき、ふたりの調和した足音が遠ざかって行く。峰國と並んで歩くとき、きっと南田の歩みもこのように響いていたはずだった。

ふたりの声も足音も届かなくなり、南田は静寂の中に取り残された。

しかし南田には聞こえていた。変わらず動き続ける針の音が。

時は進んでいる。進めているのは、螺子を巻いたこの自分だ。

デミハンターをぐっと掴み、南田竜時は立ち上がる。

